第二部

思い出の記

今よみがえる
なつかしき日々よ

あゝ土のにおい　木の香り
木の葉のさゝやき

さあ　ともに語らん
懐かしの山林を

在学当時の思い出

二五回　松原　誠一

我が母校、木曽山林高校が創立百周年を迎える事の由。悠久百年というこの事実が唯々うれしく、先ずは心よりお祝い申し上げます。九十才を越えた今、七十年以上も前に卒業した小生の学生時代を思い出してみる次第です。

受験・合格、そして入学

大正十四年、日本に唯一校しかない長野県立木曽山林学校に入学したいとの希望に満ちて受験をし、そして合格の通知あり喜びこの上もなし。当時の感銘はいまだにあり、父母に感謝す。大正時代に中等学校に進学する事は、余程の上流家庭か勉学心旺盛でなければ出来なかった時代である。私の家は貧乏だったけど受験を父母に再三再四頼んだ。父母は「受験してみろ。合格すればその時考える。何とかしてやる」といわれ必死に勉強した。先生に頼んで補修授業をしてもらった事もあり、それが報われた。

その当時、私の住む村の同級生で高等科卒業生は十名だった。男八名、女二名だった。長野工業学校、東筑農学校、木曽高等女学校、木曽中学校、木曽山林学校への受験者は八名で全員が合格した。父母に入学を懇願して許してもらった者ばかりであったと聞く。

（この頃は尋常高等小学校だから、高等科を卒業しなければ受験資格が無かった）

私は家庭と弟妹五人の事も考え一生懸命やるんだと自分なりに心に決め、遠縁の下宿稼業をしている下宿屋の下働きをしながら通学し、若干下宿代金を安くしてもらい頑張った。が、自由な時間はあまりなかった。

働きながらの学生生活

叔父からの多少の援助に加え、自分でも働きながらの学生生活であるから、留年（落第）は絶対出来ぬと心に決め、何としてもやり抜かねばならないと決心したものだ。

そして入学式。学年は甲・乙組とあり、私は乙組で級友は確か五四人だったと思う。

木曽出身の同級生は高等科を出たばかりの者だったので皆小柄だった。しかし全国から集まった入学者には大柄な者が沢山いた。年齢にも差があり、なかには陸軍軍曹で退職したのち入学してきた剛の者もいた。級友とはいえ大人と子供みたいな違いであった。福島町以外の木曽出身者に嶽風会という組織があり入会させられた。

学校には、寮生、汽車通学生等たくさんの生徒が居たので、卒業するまで言葉さえもかわさず、名前も出身地も知らない先輩がいた。

私のカバンは木綿風呂敷だ。三年間カバンを求めず（買えなかった）、それで通した。

入学すると、それぞれ何かの部に入らなければならなかったので私は庭球部に入部した。練習は毎日きびしかったが、二年生の時長野県大会と近県の大会が開催され、先輩とダブルスに出場し優勝できて本当にうれしかった。

優勝旗を先頭に、校歌を歌いながら町の中を学校に凱旋したあの青春の熱き思いは、今でも忘れることができない。

森林学、この幅広きこと

教科の学習は、四人の先生が入れ替わり教示された。数学・理科・測量等、それなりにみっちりとしぼられた。測量学は、測量士補の資格が交付されると聞かされていたので、みんな特に頑張ったが、意地の悪い先生がいて、臨時試験に出した問題をまた本試験に出すという意表をついたやり方に、クラス全員唖然として「参った」の感あり。まことに笑えぬナンセンスだった。

悲しいかな、三学期の中頃から級友の中から退学する者がけっこう出始めた。

実習は、裏山演習林と権現滝演習林で行われたが、大変な思い出ばかりが残っている。測量・伐採・地拵え・植林等。辛い作業で腹は減るし……。そんな時、思わず実習歌が口に出る。うまくつくったものだ。

学校軍事教練や教官排斥事件等々

これがまたまた辛かった。甲乙二組同時の訓練で、教官は大尉と軍曹であった。軍隊に入隊したら、すぐに中隊長・少隊長になれるような素質づくりが目的で、三年間本当に厳しくしごかれた。このしごきが、卒業後、社会人となり軍隊に入営した級友で、幹部候補生に志願・任官した折、上官の受けもよく大いに役立ったと聞く。

私が二年生の時、教官の追放事件に巻き込まれ、全員行動で同盟休校の手段がとられた事があった。二年生の中にも数人の首謀者が居たことを後日知った。

日義村の、木曽義仲公旗上げ八幡宮に全員結集し、趣意書・血判書・カミソリ等が用意され、指先を切り血判書に署名・押印したという。この事件は、司直の手が入り、首謀者の数人が退学及び停学処分され解決した。

後日、この血判状を眼にした父兄が、血印の大きいこと、見事なことに驚愕の声をあげたという。血判状は今どうなっているのか知りたいものである。現在でも、日義村のこの地を通過する度、思い出を新たにし敬礼する。

そしてその年の冬、寄宿舎の寮生に加勢して、舎監を閉じ込めてしまういたずらをしたこともあった。校庭の隅にある池の氷を四角に切り取り、長い廊下を滑らせ、舎監室の前に積み立てて封じ込めをはかった。

修学旅行の事など

昭和二年五月、東京・日光方面へ修学旅行に立った時の思い出も強烈である。足尾銅山見学の後、日光いろは坂へ約三・四里の峠道を歩きながら当時の流行歌「酋長の娘」を全員で楽しく歌いながら前進した。なぜかそれ以来、この歌は今でも思い出しては口ずさむ事がある。

日光見学後、翌日東京浅川駅に到着した時、なんと「木曽福島町大火」の報に接し、先生方も生徒一同も愕然とする。母校は、自宅は、下宿先は……。皆顔面蒼白であった。

やむなく急きょ木曽へ帰ることになり、汽車に乗ったものの、この時ほど、汽車の鈍い動きと気のもめることといったらなかった。それぞれが汽車の中を走り出したい気持ちだといって苦笑した。夕刻、ようやくにして木曽福島到着。母校の姿がそのままである事を確認出来た喜びは言葉で表現出来ないくらいであった。

しかし、先生や級友の家・下宿先等が丸焼けとなり、当分の間登校不能となった。また、女学校も焼け出されて、女生徒を木曽中または本校へ間借り授業する話も出たが、男女席を同じゅうせずの時代のこととて、教官たちの強い反対意見があり実現せずじまいに終わった。いやはやこの事件は、実に残念なことであった。

終わりに

私たちの卒業時の人数は甲乙両組合わせて四九名であった。当時は同級生の中に留年者も多数おり中には五年間または六年間も在学していた猛者もいた。私たち「昭三会」（昭和三年卒業生）が、卒業五十年後はじめてのクラス会を開催した折りは、あの紅顔美少年たりし面々が、まるで浦島太郎の世界で相まみえ、それぞれが名乗り合い涙を流しての再会で実に懐かしかった。

その後は、全国に散らばった級友の居住地等を順番に回り、婆さん同伴で旧交を温めているが、この勇士も現在では十二名になってしまった。それでも、お互い英気を養い鼓舞しあって母校の百年祭には是非出席したいと意気軒昂である。

最後に、母校木曽山林高校の今後益々のご発展と、未来永劫の祢栄を祈念申上げ筆をおくことにしたい。

木曽山林高校、創立百周年万才、〈〈〈。　（了）

山林高校百年祭原稿

二七回　宗田　尚久

当時、岡部校長の発想と思われるが、本校は林業科のみでなく木工業の基礎を学ぶ必要があるとして木工専修科が発足した。小学校卒業の年、この説明案内書を担任教師が紹介し「実業学校の第一回生というものは大変意義がある。林業以上と思うの

で是非薦めたい」と大いに称えたので私は入学を決心した。
故郷は、雑林は多いが農地の少ない養蚕地で、これもあまり性に合わない職業であり、自分一人で思う成果の上がる仕事でなかった。木工ならたとえ木の根を削っても工芸品は出来るし、木工業か建築業にと志は燃えた。しかし入ってみると、一年や二年で独立開業できる仕事でないと解った。途中で退学しようと思ったが一年間の人生勉強と思い直し我慢した。先生からも言われた。一年や二年で独立開業できるわけがない、しかし半日の勉強と半日の実習に、デザイン設計製図が学べるだけでも、年期奉公だけより良いとは思った。
さてその一年の出発点は寄宿生活だ。入るが早いか上級生のシボリだ。さもないことに態度が！言葉が悪い！と記念公園に二～三人の先輩に呼び出され、ぎゅうぎゅうシボラれる。これを修業と思って我慢はするが、通り過ぎる通学生にはそんな仕置きは知る由も無い。シボラれ放しで一年でシボッた者を後目に卒業した。
卒業してみて、「やはり学校は違う」とつくづく思った。勉強嫌いで年期奉公に入るものと一緒に考えられてたまるかと感じた。
私の書きたいことは山ほどあり、今年始めから一代記の編集中であるが、山林学校入学当時は大正から昭和の大不景気の時代であり私が物心ついた時、当時の感動詞「木枯らしはふく、木の葉は飛ぶ、家に篭り外に出るな、世はまさに危険信号だ！警鐘は乱打される、急局を告げる！警鐘乱打は続く！大正年代の大不況、関東の大震災勃発す。井戸水に注意せよ。朝鮮人問題で『戦慄』。農民よ意志あらば海外進出も考えよ」……にあるように、国としても南米ブラジル移民政策がとられた。また「青年よ大陸へ！」の合言葉のもと、満州移民開拓団の薦めも始まる。その後満州事変の勃発である。先輩の大竹君も南米ブラジル移民で卒業式を前にして卒業を許されブラジル移民として出発して行った。これは山林学校としての第一号者であった。当時私はつくづく海外発展の先駆者、大竹君は偉い人だと思った。
私も木専第一回生として一年で当時の中等学校卒となれたのを利点と考えた。当時林業科を本科と言い、三年間かかって卒業だ。寄宿舎では一年生として、二年生、三年生からはシボラレるのは人生勉強だ、と平然として猛者にシボラれた。が卒業後は学卒という事を胸に秘して年期奉公に入った。
本科というものの目的はあくまでも役人、役職で何年たつか分からないが、やっと係長か部課長だ。
しかし専修科は徴兵検査後は腕次第で事業家として独立も、社長ともなれる、三年卒の本科より早く定年退職も何もない社長となれる。手腕次第で大事業家になれるのだ。生徒時代は木専と言われ、小馬鹿にされた。本科生曰く、「これからの社会は木工なんて機械がどんどん出来る時代だ。職人なんて何だ」と笑っていた。生徒同士の笑い話だったのだ。しかし私は自信

たっぷりだ「その大機械を駆使して大事業、大工場をやるのは誰だ」就職して部課長になる奴には引けを取らない大社長になって見せるなんて私は反抗したものだ。　案の定、私が木工場の動力許可を取りに役所の林務課へ行ったら二年先輩の○○君が部長となってキセルで煙草を吸っていて節約生活が目についた。係が違っていたので私は見てみぬふりをして用を済ませて帰った。私は完全に定年の無い、使用人三○人の社長であった。実業家志望と勤め人の差はこんな所に歴然としてあるのだ。頭上に圧迫の無い実業は人によっては燃える希望とも言える。

しかし当時の岡部校長は、木工科短命とはいえ専修科を創設した事は、緑を愛し木を愛する地球を今考えると先見の明があった人物と感謝する。

世界の砂漠を森林にしてみせる。もう二百年の命を与えてくれたなら、なんて夢をみれるのも、我々山林生ではなかろうか。何をおいても山林のない世界はあり得ない。木曽山林は世界の山林学校である。

これを何千の卒業生が今世界中に点在して証明している。今日の思い出は、岡部校長以下二百名近い手植えの桜が、裏山演習林に生い茂っているだろう事を想像している。

本校舎より寄宿舎のほうが大きかった我々学生時代の懐かしい思い出は、山ほどあり書き尽くせないので一応この位で筆を置く。

（了）

木曽山林高校と共に生きた私の半生（生徒時代）

二七回・木専一回　奥原万喜男

昭和四年四月、木曽山林学校に木工専修科が設置された。当時、日本でも有数の林業校として知られていた山林学校に、将来木材加工方面の人材育成目的で木工専修科の設置されたことは、学校当局はもちろん、地域社会の協力のあったことは言うまでもない。

募集人員は三十名で、修業年限は一カ年（但し希望により卒業後一カ年研究生として学校に残ることが認められていた。）

一日の授業時間も技術の修得を主体に構成されていて、授業時間中約半分は実習時間であり、その他の科目は、修身、国語、英語、体育、教練、木工材料、木材工作、製図等々であった。部活動としては陸上、剣道、柔道、弓道、庭球部等があり、それぞれに所属していた。

当時、林業科はすでにに卒業回数二六回を数え、卒業生も千三百名に上っていた。朝鮮、台湾を始め全国各地の林業界の他、各方面で活躍していた。その頃林業科の募集人員は五○名となっていたので、林業科三クラス、専修科一クラスで、少なくとも全校で百六～七○名の生徒は在籍していたことと思われる。

それから特筆すべきことは、全国で数少ない林業校であった

ため、県外、郡外からの入学生が多く、寄宿舎制度のあったことである。当時の郡外、県外出身者は名簿でも判るが、特に岐阜県出身の生徒が多かった。また、中には朝鮮、台湾からの生徒もいた。

それから当時は、年齢の四、五才多い生徒が入学していたことも珍しいことではなかった。中には二五、六才まで軍隊生活を過ごし、陸軍曹長の階級を持った生徒もいて、教練の時間には助手で教えていた変った生徒もいた。何れにしても現在の高校では考えられない学校生活であった。

職員数は校長以下教員十七、八名と、事務室その他で二十数名だったろうか。校長、教頭も授業を受持っていた。

学校生活も一学期も過ぎれば大分馴れてきた。専修科は実習が多かったので、木工具の使い方や技術的な面での苦労はあったが、なんとか簡単な作品は出来るようになっていた。

在校生とも通学途上や部活動などの面で顔見知りも多くなっていったが、特に三年生にはクラス全体で教室に呼ばれ時々ハッパをかけられたので怖かったが、個人的には親切にしてくれた人が多かったように思う。

一学期のテストも無事修了し、学校も夏休みを迎えた。休み中も特に登校することもなく、一カ月近い休みも宿題と家事の手伝いで終了した。

二学期に入ると学習の他に、見学旅行やスポーツ大会など学校生活も何かと忙しくなってきた。木工専修科の実習設備も夏休みの頃から、電動機械など最小限のものが設置されてきた。生徒の実習作品も入学当初に比較すれば技術的にも一段と上達してきていたように思われる。この頃から学校でも塗装にクリヤーラッカーを主として使用するようになっていたので、作品の仕上がりも良くなってきていた。

十一月に入り、たまたま郡下の生産物品評会が開かれ、その会場に専修科生徒の実習作品（数百点）を出品売却し、約三時間の間に売り尽くされ、大変盛況であったことを聞いている。

二学期も終了し、三学期に入るとぼつぼつ進路のことが、話題に上るようになり、自分でも真剣に考えるようになってきた。

木工専修科として一回目の卒業生を出すことになるのだから、学校当局としても就職先等については、ある程度考えていてくれたことと思われる。

昭和五年三月、一年間の修業年限を終えて吾々二七名は木専一回生として卒業式を迎えた。しかし、一年間の修業年限では知識技術共に不十分であり、就職しても十分な仕事が出来るようなわけにいかなかった。

その頃、さらに学習を続けたい希望者には、あと一年間学校に残ることのできる研究科を置くことになり、卒業生のうち七名の者が学校に残り学習を続けることになった。就職希望者は、大半が東京方面や県内の家具製作や木材加工関係の会社に就職したが、ある程度の見習期間は必要であった。

私も研究科生として二年目も学校に残ることとなり、実習を

主体にさらに学習を続けた。四月には木専二回生（二〇名）を迎え先輩として学習に懸命だった。木工機械の使用も許可され、ある程度の塗装技術が修得でき、技術の上でも一段と向上が見られた。秋には一年生の作品と合同の展示会も開かれ好評のうちに即売された。

卒業式当日は研究科生の終業式もあり、二年間にわたる学校生活を無事修了した。

この頃世間は一般に不況時代になりつつあり、就職口を見つけることは苦労であったが、地元の小さな木工会社に就職でき、私の社会生活への第一歩は始まった。その後二十年近く山あり谷ありの生活を経て、母校に木材工芸科が設置（昭和二二年）された翌年教員としてお世話になるわけだが、当時このようなことはもちろん知る由もなかった。（了）

二八期の回想

二八回　今井　茂男

私共二八回生が入学したのは昭和三年である。昭和中期に校舎の全面改築が行われ、今でこそ近代的校舎に生まれ変わっているが、当時は大正初年に建てられた二階建ての木造建築、それが私共三年間の学業の場であった。

あのころ在校生は全校を通じ二百人足らずであったように記憶する。当時林業専門の高校は全国的にも数少なく、しかも創立も古いとあって就学生は全国各地から参集した。それだけに年配者も多くすでに軍歴を持ったもの、また何年かの社会生活を経た者などもおり、高小卒即入学のわれわれは学年の如何を問わず何かにつけて圧倒されるような感じを抱いたものだ。

今と違って当時は軍国華やかな時代である。その影響もあってか、学校の校風もなかなか厳しいものがあり、学校生活の中で、また教科の中でよくそれを痛感したものだ。

あいさつは校則によって挙手の礼である。上級生には歩行しながらの挙手も許されたが、教師に対しては校長や軍事教官だけに限らず誰にでも停止して行う。それが鉄則、軍隊並みに敬服の意志を強請され、下級生ほど神経を使ったものだ。

通学の途次、正服正帽、冬はマントを引っ掛け、素足に下駄といういわゆるバンカラスタイル、これが一般的な通学姿である。そして左手に鞄を抱え歩行中、突然教師に遭い、慌ててマントの下から右手を引っ張り出す、余り見られた図ではなかったと思う。

また連動的に思いだされるのが、校内で折々下級生絞りが行われたことである。油を絞るという意味である。休憩時間、上級生の教室から突然呼び出しがかかる。呼ばれた者は並いる上級生の前に直立不動の姿勢をとらされ、「あいさつが悪い！」「態度が大きい！」などと罵声を飛ばされる。

真空地帯といわれたかつての日本軍隊の私的制裁ほどではな

いが、呼ばれたら弁解が効かない。「以後気を付けます」で退散するのが落ちである。

聞いたところによると、寄宿舎でも夜の集会で、下級生が油を絞られ、そのあげく舎監の眼を盗んで脱柵、インザ（学校の上にあった店、俗称インザスカイの略）へ駄菓子を買いに走らされたこともよくあったという。

さて学校の思い出となれば当然学習のことが多いはずだが、この印象は意外に少ない。講義のあと応用問題を出題、指名して壇上で解明させられることが多かったのはM教諭。

黒板に向かってチョークを走らせながら「わしの眼鏡は鏡と同じだ。見ていなくても君らの動きは手に取るように分かる」とうそぶくN教諭。

授業中講義を急に止め「考査！本を伏せろ」といきなり予期しないテストを始めたA教諭……等々。何れも実力を付けさせるための策であっただろうが、われわれにとっては全く油断のできない一こまであった。

こんなこともあった。林価算法のテストの時間、出題を配ったまま教壇で読書に専念のY教諭、すわ好機とばかりに大半の者が平然と参考書を拡げ丸写しし、誰もが満点のはずであった。ところが学期末、通信簿を開いたら何と甲乙に交じってこの学科だけ戊とある。しかも赤い丸印が付いて「朱点学科注意」と注釈まで付いている。不思議なことにこの通信簿だけが、今でも私の手許に残っている。全く皮肉な話である。

教科中、おりおり軟派振りを発揮し笑顔の多かった先輩のY教諭、柔道着の間から赤い下着をチラつかせたこともあり、よくユーモラスな話題を振りまいたS教諭、時局柄硬派教師の多い中でわれわれにとっては肩のほぐれる存在であった。

あのころ学校の方針として育林、測量、農業など実地学習に重きがおかれていた。巻脚絆、地下足袋姿でよく演習林や今は黒川ダムの湖底に沈んだ耕作地に出向いた。造林地の下刈実習で一列横隊に並び「両手間隔、鎌に開け！」というA教諭のユニークな号令をよく聞かされた。ある時は農業の実習で、糞尿を満ぱいにした肥桶に同教諭自ら片手を突っ込み、百姓根性に徹せよとばかり、全員右へ習えをさせられるという臭い一幕もあった。

とにかくこんなことを繰り返すうち、三年間の課程が終わった。そして珍しく（？）一人の落第もなく卒業の期を迎えた。昭和六年の事である。

われわれ二八回生は、入学時共に蘇門をくぐったのは七七名であった。そして三年後蘇門を後にしたのは四九名。差引き二八名の級友はいつか知らぬ間に学窓を去っていた。それが誰であったか、面影すら浮かんでこない。

四九名という数字は、俗に言う「始終苦」と語呂が合い、なんとなく気になる数字であった。われわれの多くは、即就職を期待しての入学であったが、時あたかも世界経済大恐慌の真っただ中、しかも満州事変勃発直前で求人は全くのゼロであった。

かろうじて学校の推薦で職を得た者は一割たらずにしか過ぎなかった。その多くは幾月かの、また幾年かの浪人の末あの手この手でどうにか職にありついた者ばかりである。職種のなんたるかはもちろん論外である。

時代の差とはいいながら、いわゆる引く手あまたの売り手市場・青田刈りまでして金の卵を狙うという平成初期の現代とはまさしく雲泥の差といえる。

蘇門を去って六〇年、二八回生のわれわれは、昭和四十年全国各地に散在する三〇名の現存者が相寄り「二八会」と称するクラス会を結成した。お互いに寄る年波のため、今は二三名となったが、会結成より毎年一回所をかえ会を続けている。

かつて昭和四六年「創立七〇周記念の会」に際しては、母校の庭に記念樹を植栽し、ときの校長先生によくやったと喜ばれた。

また昭和五五年には、卒業五〇年目を期にお互いの回想記をまとめて会誌を発刊。われわれの教科や年代にちなんで『年輪』と名付け、生涯の記念とした。会誌の中に、当時の校長清水吉平先生、われわれに教鞭をとっていただいた増田篤志先生から発刊の祝詞を頂戴したので、学校の図書室にも会誌をお届けしたように記憶している。

恩師　増田篤志先生

二八回　安江　宗七

木造二階建ての古い寄宿舎で同室でもあった、日下部英吉君が一足先に八七歳で他界した。彼の短歌とのかかわりは、少年期にあったらしいといわれているが、「蘇林」と称し多くの歌を残し、その遺歌集に

修めたる樹芸の技を生かすべく　気負ゐき昭和六年の春

という一首がある。四九名の同級生は、皆こんな気持ちであったと思う。しかし時はまさに昭和不況の真っただ中であり、志に合う所を得るのは非常に難しい時節であった。

その後、戦中戦後の激動の世に生きながらえたが、互いに消息を語り合う機会も得られず三〇数年を経てしまったといってよいであろう。

昭和四〇年現存者数名でクラス会を結成することが出来て、二八会と名付けた。以後所を変えても年に一度は集まるように努めてきたが、その語らいの中でも恩師増田先生の話題が多かったように思う。

平成十一年は三五回目の二八会を東京で開いた。北海道・富山からも出席してくれて現存者の半数六名が集うことが出来た。

増田先生も百四歳で御存命と承りうれしいことである。この際先生の思い出を少しでも記念誌に残しておきたいと思い稿を起こした次第である。

大道義治君は、私の呼びかけに答えて「増田先生万歳」と書けといって幾多の思い出を送ってくれた。

今井茂男君は数多い学校の教科の中で、自分の好むものはなかなかないものだが、妙に幾何という科目に興味を感じた……と。その後長く林業土木にかかわるなかで処理に迷い、在学時代に受けた教訓をもっとしっかり身に付けておけば良かったなぁ、と反省することしばしばであったという。

一年生のときは幾何を教わった。先生が教室に入ってこられると一瞬峻とした。教壇をふまれて起つ背筋の伸びた立ち姿は今でも目に浮かぶ。授業はなかなか厳しかった。「こんなことがわからないか、寄宿舎へ帰って行李の荷造りにかかれ」とか、「そんな事では全然ダメー」とか気合を入れられることが多かった。先輩の話だとこんなことは毎年のことで新入生に与える愛の鞭だといわれていた。

二、三年次では測量を習った。先生は口癖のように「よその学校では、測量器械などは生徒に見せて説明するだけのことが多いようだが、私はみんなを実習で鍛え、就職したらその日から仕事が一人で出来るようにするのが方針だ」とよく聞かされた。

お陰で私も測量の仕事は新米時代でも決して他に引け目を感じたことは無かったように思う。

平板・コンパス・トランシットでの測量は、現場作業員、製図プラニメーターによる面積算出など通して学んだ。演習林の林班・小班の設定測量をして、誤差が免諒限界に収まって誉められたことなど懐かしい。

昭和五八年六月三日第十九回の二八会を京都で開き、先生の米寿を祝った。御夫妻お揃いで御来席いただきしばらく青春時代を語らう機会を得ることが出来た。

先生は、木曽から奈良県下の三つの高校の校長を経て昭和三〇年に退官されたが「木曽山林の皆さん、職員生徒ともみんな堅実で明るく、楽しく、木曽は最も理想の学校であった」と記された回顧録を頂いた。

また私生活では一口食べたら三〇回噛むことが健康の基といわれましたが、米寿を迎えられてもなおそれを守っておられたのには頭が下がる思いがした。結婚式などに招かれた宴席の中でもこの鉄則はかたくなに守られていたようで食事時間が余りにも長くなるので同席の人から「あの年寄りは良く食べなはるなー」と陰口を叩かれたことさえあるとか、今にして思えば長寿健康の秘訣はこんなところにもあったのか、と思いを新たにした次第である。

先生は絵画にも親しんでおられ「蘇水」の雅号で色紙をよくものにされた。今井君も自分の独作の色紙を持参しお褒めをいただき、先生の色紙をいただいて今でも床間を引き立てていた

だいているとのことであった。

先生も頑張って百四才の長寿を得られ誠に敬服の至りである。先生の長い人生に心から感謝を捧げて擱筆する。（了）

●コラム　懐旧・昭和六年の春

二八回　故　日下部文嘉（蘇林）

修めたる樹芸の技を生かすべく　気負ひゐき昭和六年の春

採用通知の届きぬ新任地は九度山・高野営林署

雇ヲ命ス月俸参拾弐圓ヲ給ス　受けし辞令のいかめしかりき

山官の卵の修業は高野山伐木事業所現地にはじまる

かうやまき・ひのき・もみ・つが・あかまつにすぎを高野の六木とせり

同期安江宗七の紹介により、故日下部文嘉（蘇林）の美代夫人より遺歌集『山彦』を本校へご寄贈いただいた。同書から五首選んだ。

冒頭の歌は、安江も「思い出の記」に引用して述べる通り、二八回生の誠に意気軒昂、心意気の高いことを如実に物語る歌である。もちろんこれは、全卒業生の思いでもある。

思い出の記

三〇回　池田孝次郎

昭和十七年五月、温暖の地静岡県熊切分担区から、北海道北部の留萌地区小平蘂村所在の沖内分担区勤務を命ぜられ、一人津軽海峡を渡って着任した。

渡北して今年で五七年目を迎え、今は道北の街旭川市神楽の地を永住の地と定めたが、年齢も老いて現在八六歳を迎えた。

私は出身が上松町だったので、専ら汽車通学で同級生五人と福島駅から学校まで徒歩で通学した。あの頃の懐かしい友は他界して淋しい限りだ。

恩師で懐かしく思い出すのは、厳格そのもののような気迫にあふれた増田先生の授業や実習を忘れることが出来ない。先生から、精神的な気力を若い心に、そして身体に植え付けられた。

北海道の広大な自然の中で幾多の試練を受けたが、跳ね返す気力と身体を鍛えてくれたのは実に増田先生だ。今も心から感謝している。

友と汽車通学の三年間は本当に懐かしい思い出となった。よく木曽福島駅で饅頭を買って食べたことやあの味を何時も思い出し懐かしんでいる。

また、神庭先生が一度旭川へ来られた時、雪の降る旭川の街を語りながら歩いたことも懐かしい思い出である。

昭和八年三月、母校と別れて以来を振り返れば六六年の歳月が過ぎ去った。私は本州の山々から北海道の森林に回りに来たりさまざまな樹木に接し共に生きてきた。木を植えたり伐採したり大自然相手に生活してきた。樹木と共に生き抜いてきた私は木曽山林学校を出てよかった。このことを常に誇りに思っている。

懐かしい校歌の一節

千秋変らぬ緑をこめて　五木は生い立つみ国の林

これをいつも心の中で歌っている。蘇門会の総会などでも大きな声で歌うことがあるが、ここが私の一番好きな一節である。

静岡地方勤務の頃は、杉やもみの大木、けやきの大木を倒し、北海道へ渡ってエゾ松・トドマツの伐採や育苗をやった。

木材搬出作業では、林鉄運送・木馬運材・自動車輸送・馬橇運搬等あらゆる作業を実行し経験した。大半は伐木主任官として苦労したが、大きな事故もなくどうやらきりぬけてこられた。

北海道へ来ての一番の思い出は、終戦真近の昭和十九年、冬山の大東亜特別伐採で飛行機用材としてヤチダモ、マカバ、クルミの三種類のみの三万石伐採である。広大な雪の山を毎日スキーで回ったこと。苦しかったけれど、日本が勝つ為に必死になって闘った。勇壮な気持ちの毎日であった。作業員に召集令状がくれば、全員を集め伐根の雪を払ってその上に立って、応召兵を励ましたものだ。

学生時代、演習林での作業は気力と体力を鍛えてくれた。木曽山林の後輩達よ、どうか実習林で身体と精神を大いに鍛えてほしい。

測量実習ではトランシットの疎動や微動でやかましいの実習歌は思い出して懐かしんでいる。計画課勤務の時、境界確定係では大いに助けられたものである。

旭川蘇門会支部で名実ともに偉大な人、我等の指導者であり会の顧問をされていた唐沢繁夫様が、昭和五四年九月八日御逝去されて早や二〇年が経過した。私共の蘇門会総会には出席下さってご指導やら御叱正をされたが、あの慈父のような穏やかな笑顔を私共は忘れることができない。

宴会となれば、飲み且つ食べて歌ってくださった面影がまだ私の脳裏に生きておられる。あの面影を何時も思い起こし、淋しさの中にも限りない惜別の情に耐え、今後益々しっかりと気持ちを引きしめて旭川支部の発展に尽くしたいと思う。

終わりに母校のますますの発展と、諸先生方のご健康をお祈りして擱筆とする。

（了）

創立百周年と第三〇回卒クラス会と私の思い出

三〇回　小佐波一雄

母校創立百周年をお祝い申し上げます。

私は、一九一五年（大正四年）二月生まれの八五才。富山県富山市に生まれ木曽に移り住んでいた。学校は一九三三年（昭和八年）第三〇回の卒業で、卒業生四二名であったが、今ではクラス員は十五名に減った。

満州事変・支那事変と暗い戦争の真っただ中であり、また不況のどん底で就職口もない時代であった。卒業直後病気となり、療養生活を余儀なくされた。その間、家業の木炭業と鉱泉宿（二本木温泉越中屋）に従事していた。

当時、木炭が林産物の主流となっていた。長野県がこの木炭の県営検査を始めたので、私はその検査員となり、それから後林産物検査員として本庁（長野県庁）へ勤務することとなった。

長野市に移り住み、長野県林務部の林政・林業の二課および、商工部観光課勤務の技術工員として定年まで勤務することができた。

話はさかのぼるが、一九三五年徴兵検査で、体格的には甲種合格は間違いなしとまで言われながら、その前々年の病気がもとで第一乙種とされた。第一補充兵となり、現役で兵役に就くことは不可能となった。軍人まで志望していたが、それも不可であった。一九三八年、当時の東京目黒の近衛輜重兵連隊に教育召集されたが、即日帰郷となり、長野市に戻り復職となった。

一九四二年、金沢市の東部第五五部隊に臨時召集され、一ケ月後、満州第四六〇五部隊に転属した。学校卒業の際の教練検定がものをいい、幹部候補生を志願させられ、部隊の経理部に属し、満州に二年半、終戦は中支那で迎え、部隊下級士官として無事復員することができ、復職することもできた。

定年後は、県的の団体、長野県板金工業組合の常務理事、事務局長というように林業とは全く無関係ながら、山林魂というか万能に通用する知識技能なのか結構便利に使われ、八〇歳まで十六年間勤められたのをうれしく思っている。

これには、多くの方々の支えがあってのことであり、関係各位の皆様に深く感謝申し上げたい。

すべて山林学校卒業のお陰であると思う。一九三三年に卒業した皆さんの内、大東亜戦争の犠牲となられた多くの方々のご冥福を祈ってやまない。

さて、クラス会は、地区ごとには何回か開かれ、お互いの健在を喜び情報の交換や親睦を深めていた。一九三七年松本の御母家温泉で神庭英先生を招いて開き、十五名出席したのが初めてであり、一九四〇年岐阜県下呂温泉で渡辺操先生を招き十七名出席以来、毎年地区の数人が当番で開催している。

一九五九年、京都嵐山では増田篤志先生、重本勝先生を招き

開催。一九八四年より家族同伴で毎年開催し、本年で三〇回に及んでいる。その都度、情報の交換や親睦を深めているクラス会には校歌・実習歌にはじまり、最後は木曽節とその踊りでしめくくりにし、次回を楽しみにおひらきとしている。

その他、時には地方への旅行を兼ねて二泊することもあり、盛会で蘇門会報にも何回もその模様は投稿し報道された。

また、母校の四〇・五〇・六〇・七〇・八〇・九〇年の創立記念日には各々何人かが集まっている。

さて、昨年は十一月初めに最後になるかもしれないという名古屋の下枝君の誘いで愛知県の南知多で開かれ、家族を含めて十六名の参加であった。一九八七年、湯田中の会のおりには、長野市の善光寺で慰霊法要を営み、関係の方々の冥福をお祈りした。

当時、韓国の孫福東君と台湾の邱合慶君が同級におり、この二人には格別の思いをもっている。孫君は、家族も来日していたとおもう。寄宿舎に入っていたので、在校中は格別親しかったという思いもないが、孫君は卒業後国に帰り県の役人をしていた。

同期生に原田光雄君がおり、同氏の言葉によると終戦までは一緒だったが、その後の事は不明であるという。消息がつかめず非常に残念である。

邱君は一九八二年愛知県定光寺でのクラス会に、日本への旅行日程を合わせて開催し一夜宴を共にして旧交を温めることができた。

最後に、林業低迷のおりから多方面に人材を送れる母校のますますの隆盛と関係者のご多幸をお祈りして、母校百周年の彌栄を祈りたい。

（了）

旧師の面影を偲んで

三三回　中村　金一

昭和八年四月に私ども四四名は、小さな胸を膨らませて入学した。校門前の桜のつぼみも八分の膨らみを見せていた。

入学時の担任は、英語担当の宮原次一先生であった。先生は野沢中学（旧制）から転任して来られた新進気鋭の素晴らしい東京外語出身の先生であった。

授業では、リーダーの教科書などは一学期で終わり、後は副読本としての簡単な英語詩、アラビアンナイトなどを次々と学習したこと、さらに詩文と普通の文章の違いなどに触れられたことなど今でも懐かしく思い出すし、口ずさむことができる。

実業学校で上級の専門学校に進学するでもないのに、語学力を良くつけてくれたものと感謝の気持ちで一杯である。

入学当時の校長中村三郎先生は茨城県の方で、旧制一高、東京帝国大学林学科のご出身であられた。一年生には、当時の修身をを受持って教えてくださった。今でも忘れ得ないことは、

入学当初の初めての授業に開口一番の言葉である。即ち、

「君たちは何でも学びなさい、勉強しなさい。そして、後でそれらの知恵を整理しておきなさい。例えば、泥棒の仕方を研究したとしても、この知恵を防ぐことに利用するか、実際に泥棒するかは、その人の考えによる。」と。

これは多分、色々な知恵を積極的に求め後日に整理して、より良い活用を心がけるようにせよとの事だと思われる。これに強烈なインパクトを受けたのは、私一人ではないと思う。今思えば私自身の雑学の吸収に、そして専門馬鹿にならないようにとの教えではなかろうかと強く思う。

先生のお話から、教育の一面としてたとえそのときは理解できなくても、後日に理解ができるようになったり、そのことを生かす側面というものを持っているものであることを感ずることがある。

先生は、アメリカから林業の専門誌を取り寄せられていた。これこそ林業の最新の知恵を広く先進国に求めていた姿ではなかったかと思う。

教頭は増田篤志先生で、先生は福井市の方で北海道帝国大学林学実科のご出身であった。幾何学、測量の学課と測量の実習が担当であった。徹底したスパルタ教育で、大いにしごかれたが、絶えず他府県の林科の学校の名前を挙げ、それらの学校の卒業生に負けないようにと闘争心をかきたてられたことが忘れられない。

これらの教育は、確かに現代にはそぐわないかもしれない。しかし私たちは、それぞれが自負の下に社会へと一歩踏み出し、今日がある。誠に感謝である。

その後、増田先生は奈良県の吉野林業学校の校長、更に郡山農業学校の校長、そして新制田原本高校の初代校長を最後に勇退され、大阪府茨木市で悠々自適の日々を送られて現在一〇五歳の長寿を保っておられる。

次席は小薗井澄先生で、旧制の秋田鉱専のご出身で数学を担当され、私たちは代数・三角関数を教えていただいた。先生はまた、生徒指導の中心でもあり、生徒にとっては誠にこわい存在であった。

当時は、生徒の通学状態によって徒歩・汽車・自転車通学・寄宿舎とに分かれていた。

何れにしても怖い存在には変わりがない。物事をてきぱきと処理される方であった。

先生は、その後朝鮮総督府所管の工業高校教頭に転出され、戦後郷里の富山へ帰られたということであるが、詳細はわからない。

在学中、博物学（動物学・植物学・鉱物学）、森林数学、林価算法、幾何学の用器画（幾何画法）で作図を、また森林経理学での土地期望価などの出てくる数式は、ほとんど理解できず、数式の暗記に終わったことを思い出している。

これらの教科は重本先生に教わったが、先生は旧制の佐賀高

校から京都帝国大学林学科のご出身で、達筆・極めて几帳面な性格であられた。生徒の質問に対しても、不正確かなと思われる時は、絶対に即答はせず「書物を調べてくるから」と、後から正確な回答を示される事が多かった。

従って、私たちは陰で「学者、学者」とニックネームをつけたが、学識の高い先生は私どもには過ぎた先生であったと思っている。

先生は戦後、京都府立大学の教授になられ、さらに生活科学科の部長をされた。ラテン語で植物の学名ラベルを学校周辺の樹木に添付され、学生に覚えるよう配慮されたとのことである。

造林学、森林利用学は神庭英先生で、先生は島根県の方である。三重高農林学科のご出身で苗床での樹木の苗木の管理、演習林での造林、下草刈りなどの実習を担当された。長身にして淡々とした話ぶりとスマートな容姿にあこがれと親しみを感じたものである。

神庭先生はまた、クラブ活動のテニス、陸上競技の円盤投げなどを指導された。あのきれいなフォームでテニスをなさっている姿が眼の裏に焼きついている。また、炭焼きの実習指導も印象的であった。

久木田先生は鹿児島の方で、旧制東京高等工芸のご出身。木材工芸と数学を習ったと記憶している。

趣味の魚釣りは本格的なもので、休みの日にはイワナ・ヤマメを専門に釣っておられたが、これも良き時代であったからだろう。

先生は、何故か「ホース」というニックネームであった。後に郷里の鹿児島県立加治木工業へ教頭として栄転されたと聞いている。

小柄な市川清先生は、県内の東筑摩郡麻績の方で、旧制岐阜高農の農芸化学科出身。先生は、農業一般を教えられた。この他に化学、相撲の顧問などつとめられていた。

木曽福島町役場前の広場に特設された土俵で、町を挙げての「明治天皇ご駐輦記念相撲大会」には、当時の木曽中（旧制）との対抗試合では、それまで毎年負けているのを勝つために猛練習を続けた。

その結果昭和十年六月の大会で、はじめて圧勝したときは先生と全校生徒にとって最高の喜びの日であった。山林の相撲の伝統は、先生と当時の生徒によって創られたといっても過言ではあるまい。学校の士気は、このことを契機にさらに高揚した。

国語・漢文は大竹亀次郎先生が担当しておられた。特に、漢文は興に入れば、赤壁賦などは朗詠のなかで解説されたり、諸葛孔明の出師の表は感を込めて朗読されて、生徒のわたくしたちを充分にその雰囲気に浸らせてくれたものである。先生は、その後福島へ新しく出来た教育会館へ移られた。

当時は武道という必修科目があり、柔道・剣道・弓道の内どれか一つを選択しなければならなかった。柔道は、若林勝衛先生が木曽中との兼務で担当されていた。柔道の先生らしく、百

三〇キログラムという堂々たる体格で、性格は至って磊落であり、生徒からは「ベアー」の愛称で親しまれた。

剣道は、福島朋末先生。通称「ラッパ」の愛称で生徒に親しまれていた。生徒にはつねに熱弁をふるい、時には大言壮語となったので、このような愛称になったらしい。

弓道は、国語の大竹亀次郎先生が担当され、熱心な指導が印象的である。

学生時代は昭和の初期、それも日支事変前であったから、切羽詰まったような戦時色はまだなく、比較的のんびりとした中でも、週に一回の教練の時間は緊張したものである。

原先生が配属将校として、当時の松本歩兵五十連隊から派遣され、教頭と同位の重要な存在であった。先生の階級は少佐で、至って温厚な形式ぶらず、所謂大正デモクラシー的な方であった。

当時はまた、年に一回の軍事査閲がグランドで展開されたが、その日のために猛訓練が行われた。悠然として、悠揚迫ることのない教官の指導を受けたことが思い出される。

三年生になると、松本歩兵五十連隊へ宿泊訓練に出かける。小銃を担って四列縦隊で営門を入る時、衛兵司令が号令して原先生に敬礼し、また営内でも、生徒の我々は「原先生」といつも気さくに呼んでいたのに、兵隊は遠くから見かけただけで、歩調をとって「敬礼」と大声を発するのを見て、今さらながら「偉い方なんだなぁ」と思い直したり、また、若干は得意な気持ちだったことが、昨日のように思い浮かぶ。

助教としては、特務曹長、後の准尉の中島豊作先生が配属将校の補助となっていた。先生は、さらに体育の授業を受け持たれ「トクサン」の愛称で親しまれていた。先生は、戦時中に召集されてスマトラに征かれ、帰還されたが職業軍人とのことから本校へ戻ることはできず、菅平にある国立の体育関係施設に就かれたと聞き及んでいる。

教練の成績は、後に松本の連隊区司令部に「士官適」「下士官適」と評価区分の上報告されて、将来軍人になった時、一方は「甲種幹部候補生」として士官に登用され、他方は「乙種幹部候補生」として下士官になる。

いずれかに登用されかの判断資料としての重要な要因としての働きをしていた訳である。

木工実習は、渡辺操先生であった。先生は木工専修科を中心に教えていただいた。山梨県のご出身で、気さくに生徒作品の仕上げに関わっていただいた。

林業科の助手の先生は、長谷川竹治先生であった。達筆な先生で、何もかも筆で書かれておられた。先生は後に帝室林野局木曽支局管内に転じられた。良き先輩先生であった。

校長先生は、一年の後半（昭和八年）に高久常敬先生に代わられた。この校長先生に在学中ずっとお世話になった。先生は、栃木県那須の方のお方で、東京帝国大学農学部出の農業専門の先生だった。

蘇門会の先輩方は、農業専門という所が若干不満のようでもあり、先生もやりづらい事が多かったのではないかと思われる。

私自身が、母校に助手として残るようになったので、校長先生の外、奥様にまで特別に可愛がっていただき、良き薫陶を受けたことを有り難く懐かしく思い出される。

事務は、三溝管之先生。松本のお方で、当時は福島町の山平から通勤されていた。誠に恐い存在であった。当時は「書記の先生」と呼んでいた。給仕として中平さんという小身痩躯ながら、難しい三溝書記先生によく仕えておられた。

私自身が助手として母校に残ったので、卒業後に在職された先生方を思い出すままに記してみたいと思う。

まず高久校長の後任として、茨城県立石岡農業学校の校長から石田恭吾先生が着任された。先生は、旧制第二高等学校から東京帝国大学農学部を出られた一見ドイツのヒトラーによく似た先生だった。

特に私は、この石田校長先生のご指導で、当時の文検の合格を果たすことができた。いわば、人生の方向づけをして下さった、恩義の深い先生でもある。

特に文検合格の通知が県からあり、文部大臣名の教員免許状が校長の手元に届いた時は、わがことのように喜んでくださった。

助手という極めて低い存在の自分を自宅へ呼んでお祝いして下さったことは一生忘れられない。深く深く脳裏に焼きついて離れることがない。本当に立派なお方であった。

先生は、その後福島県立福島農学校の校長として転勤された。召集されて戦地に在った私に「福島農業に君の席を空けて待っている」という暖かい便りをいただいていたが、南方へ転戦して実現できず残念であった。

戦後、復員したときに先生は、既に亡くなっておられた。復員後、是非お会いしてお礼を申し上げたいと思っていたのに誠に残念至極である。

わたくし共の卒業後、市川清先生は塩尻農学校に、その後新潟の高田農学校の校長として赴任されたようである。その市川先生の後任として長野中学校（旧制）から細田一郎先生が赴任された。先生は、埼玉県飯能市の生まれで、東京農業教育専門学校出の研究熱心な先生であった。

いつも何かの実験をしていて、そのデータを研究雑誌に発表しておられた。その後、郷里に近い熊谷農学校に転任された。先生は、生来あまり健康な方ではなく、早逝されたということを聞いた。

国語は、百瀬潔先生が大竹先生の後任としておいでになったが、その任期は短くその後任として袖山富吉先生が着任された。

当時先生は新婚早々であったと思う。また苦学力行の先生で、渋沢家へ書生として入り国学院大学を卒業の後、文検高等教員国語科の免許を取られた先生で、私にとっては良き先達のような方で、余暇にいろいろ体験を聞かせていただき、大いに発奮

したものである。戦後京都府下園部高校に在職されておられたと聞くが、これも風聞にて詳細は不明である。

私たちの入学した昭和八年から卒業した十一年の間では、最後の年の二月に二・二六事件があり、戦争への足音が高まりつつある不穏さもあったが、まだまだ比較的に平和を満喫できる時代であったように思う。

今にして思えば、桃源郷のような学校環境であり、生徒はのびのびと、先生方はそれぞれの個性と特色を充分に生かした、誰にも気遣うことなく教育し、また教育を受けることができた時代である。

教育は、自分が受けた教養・知識・技能を次世代に引き継ぎ、更に発展させるべき手だてと考えるが、現代は余りにも周辺からの干渉が多く、本来の機能が発揮できず萎縮の状態にあるように思われる。

学校も、教員も、そして生徒も右顧左眄することなく、本来の目標に向かって進みたいものである。

山林の経営、管理の要員として、あるいは山林技術者の養成という大目標を掲げて、目的を明確に持ったごく少数の生徒を、個性豊かな、そして優秀な先生方が教育する……それが木曽山林教育の真髄ではなかったか。

生徒は、この素晴らしい教育に育てられ、自信に溢れ、将来の活躍に希望に満ちて社会に飛び立ったものである。それが山林魂というものではないか。

七十年近く過ぎ去ったことをなんらの記録を参照にしたのでもなく、思い出すままに記したので、思い違いや不正確な点があろうかと思われるが、ご容赦をいただきたい。（了）

黒川渡ダムと神庭先生

三六回　田屋　幸男

木曽福島町の旭町と、黒川渡の境の橋を渡ったところから学校の横まで、国道は弧をえがくように登り坂になり、左側一体が低い盆地になっていたが、ここがダムになった。ちょうど我々三六回卒業生の在学中のことである。

盆地の大部分は畠で、中程のところに一軒家があった。ダムの底に沈んだこの家は、そば屋の「車屋」で、駅に近い八沢橋の近所へ移転していった。

ちょっとした景勝地のようなこの橋の下は、両側が狭い岩壁になっていた為、格好のダムの候補地になったものとみえて、ここからトンネルで導水し、地表に出ることがなく町の真中の関所橋脇の水力発電所に通じていた。

ダム建設も、発電所が作られたのも時代の要請からだったのか、年毎に戦時体制が強化されていく時期でもあった。

工事はまず仮設の橋が古い橋と並ぶように、やや高いところに設けられ、岩盤掘削と発破作業の轟音が長い間、板囲いの中

で続いていた。

工事が進行するに従って、厚いコンクリート堰堤の一部が見えるようになってくると、工事の進展が一層待ち遠しいような気持ちが強くなって、朝夕興味深くのぞき込みながら通学した。

いよいよ工事が終りに近づいて、水門に鉄の大扉が取付けられたある日のこと、私達は足が釘付けになるような感動的な場面を目撃した。それは扉に自動ハンマーで鉄の鋲を打ち込む作業である。

川底の大きな炉の中でまっ赤に焼いた鉄鋲を一人の職人が鉄の大鋏ではさんで、パッと空中に投げ上ると、フワッと上った鋲は野球のベースに正確に投げ込まれる球のように、一定の高さの目印も何もない空間の一点に、一瞬静止しているような状態になる。

十メートル以上はあろうかと思われる上の足場に半身を乗り出すように構えているもう一人の職人が、大きな鉄鋏を両手で持って、それをカチッと受け止めた。

その光景は見ている者をハラハラさせるばかりでなく、息の詰まるような緊張感が伝わってくる。投げる者も受ける者も、その一瞬に全神経を集中している様子は、まさに真剣勝負そのもので、絶対に失敗がゆるされない、その両者の呼吸と技を初めて目にして新鮮な感動を覚えた。

ただそれだけの話だが、七〇年に近い数々の記憶が、春先きの雪どけのように消えて行く中に、この事だけが鮮明に残っている。

ダムが完成して十年が過ぎた。その間にあの戦争が終わり、世の中はまだ荒廃していたが、夏の一日、何かのついでにダムへ行ってみた。水面に投影する緑が美しく、時々吹き抜ける風が気持ち良いので、ダムの手前から学校の演習林に続く山の登り口の小高いところにキャンバスを立てて写生を始めた。

しばらくすると背後に人の気配がするので振りかえると、そこに長身の神庭先生が立っておられた。先生には卒業以来お目にかかっていないはずだったが、あまり話しをするでもなく、「あ、あ、そのまま続けて下さい。」と言われ、いつまでも背後に立っておられた。

在学中、苗圃の中で作業をしていると、同じような感じで、先生がうしろに立っておられた事が思い出され、何となく筆の運びがぎこちなくなっていくのを覚えた。

個性的な神庭先生の印象も、消え残った雪のような記憶の一つである。

（了）

学校と同級会

三六回　森下　准

われわれは、昭和十四年三月、三ケ年の学業を終えて卒業した。卒業生は四七名であった。就職地は国内各地をはじめ、北

は樺太・満州、南は台湾（いずれも当時の地名）へ、それぞれが若い血潮に燃えて巣立っていった。

同級生の中には、一部進学組もいたが就職組が圧倒的で、特に満州や台湾へは林務関係が多く、数人が一緒に就職していった。当時は、国が発展の最盛時であり、卒業式が済んですぐに出発した者も多かった。従って、学校生活を終える感慨を語る暇もなかった。

級友の大半は、数年後にひかえた兵役までの期間を、若い職業人として活躍した。その後、昭和十六年十二月大東亜戦争が始まり、何人かは国外の戦線へ出征して行った。

私は、本校の町内通学生で、寄宿や下宿の体験はなく、思い出もない。しかし、たまたま同級生の一人が、二年生の時から我が家に同居することになり、友人としての付き合いが生まれた。また、町内出身の同級生も何人かおり、それぞれに親しみがあった。

在学中の学科や実習はそれなりにやってはきたが、特に専門の林業科関係の学習は、今の専門学校以上で、勉強に苦労したこともあった。また、戦時中のことであり、教練・勤労奉仕が盛んな時代で、軍装で開田高原の西野で野営し、御嶽登山をしたこともある。

また、修学旅行の記念写真は、横須賀の軍艦上で学生服にゲートル姿で撮影したことも懐かしい。

このような時代であつたが、社会人となって母校の教育の有り難さが身にしみた。それは、先生方の教育に対しての熱心なご指導と、先輩・上級生の愛情ある導き（しかられたことも多い）や山林健児の意地をうえつけて下さったことなどを感謝している。

同級会について

私たち、三六回卒業生は「山麓会」として、昭和五六年母校創立八〇周年を契機に発足した。四七名の卒業生のうち生存者が三三名である。死亡された大半は、大東亜戦争で犠牲になられた方々である。

八〇周年記念式典に招かれた中の何人かが発起人となり、式典前日の十月二四日木曽駒高原の「秀山荘」に集まり、第一回山麓会を開催した。同級生は、年齢的に永年勤務者であり、それぞれの立場にあるため大勢の出席者とはならず、参加者は二〇名であった。

四二年ぶりに会った級友たちは、卒業アルバムの顔と見比べて年輪の隔たりを感じ、懐かしさにふけった。

それ以後、次回開催地や幹事を決め、毎年開催している。県外の友も多く北海道・東北・関東・愛知・岐阜各県などでも開催してきた。近年は、お互いの健康を配慮し、配偶者や家族の付き添い同伴で集まり、これまで十九年間続けている。同級会には、ご長命であられた神庭英先生も生存中はお顔を見せて下さった。

この同級会の記録を残すことになり、参加者の寄せ書きに開催地の主なスナップを、日義村出身の画家であり同級生の田屋幸男氏の絵筆で残している。この寄せ書きは、山麓会二〇年の歩みとして、来る百周年の日に母校へ寄贈することにしている。

同級生の中には八〇歳を越える者もおり、同級会の継続開催はなかなか大変と思うが、集まることが励みとなるのではないかと感じている。

これまでの中で、平成二年山麓会の折りに会員の自分史（誌）をつくることになり、それから約半年、母校九十周年記念の年に冊子「燦路久」（さんろく）が刊行された。

原稿の纏めと校正は田中辰男、ワープロ印字を森下准が担当し、製本屋に仕上げてもらって完成した。これは、記念に母校へ寄贈させて戴いた。

少子化社会といわれて久しい。地域の差もあろうが小中学生が減っている。かつては人口増により中学校・高等学校を増やして対処してきたが、今日では中学生が少なく、高校の学級が減っている。

少子化現象の先には、どんな社会が待っているのだろうか。場合によっては、高校統合になるのではないかと心配されている。しかし、山林学校は地域に愛されてきた伝統と歴史ある学校であり、なくしてはならないと思う。いろいろの問題を乗り越えて、本校の存続されんことを熱望する。

今回、創立百周年の記念すべき事業を行うに当たり、実行委員会の各位には事業の企画・莫大な寄付金の募集とこの実行等並々ならないご努力に深く感謝し、記念事業の大成をお祈り申し上げるものである。

（了）

思い出の記

三七回　宮下勝三郎

平成十三年木曽山林高等学校の一〇〇年記念誌発行の運びの由、誠にお目出度う。事務局から寄稿の依頼があったが、多くの先輩・後輩が文章を寄せられていると思う。道外れと思われる節があると思われるが、山林学校時代の昔の環境（周辺事情も含めて）の一部を紹介し、最後の結びで将来にむけての学校のあり方、希望等を述べたいと思う。

ちなみに私の父は第三回、次兄は第三五回、私は三七回卒業と、山林学校一家である事を申し添え、本文（随筆）に移ることとする。

大工の治助さん

（随筆集より）

山蒼く暮れて夜霧に灯をともす木曽福島は谷底の街

これは太田水穂という歌人の詠んだ短歌です。木曽福島とい

うのは、信州の御岳山ふもとにある谷底の街でございます。

この街は、昭和二年五月十二日、六百戸を焼くという大火にあいました。おかしなことで、火の出た所から近くの寺に火が移り、その寺から谷底にある四方の寺に、寺から寺へと飛火をして、その四方の寺から六百戸をとりまいて延焼してしまうというような大火でございました。

私は当時、木曽幼稚園の園児でございましたが、小沢という産婆さんの息子の勇チャンという年長組の方に手をひかれ、泣きながら家に帰ったことを覚えております。

私の家は歯医者をしておりましたが、その後大手町という所に普請をいたしました。その家は現在でも七十数年の歴史をもって、そのまま建っております。三河家の三軒隣り。

総桧造りの三階建で、部屋は全部で七つあるが、その他に診察室・技工室・階下の一部には暗くて遠くが見えないほどの大きな物置があったことを今でも覚えております。

この家の普請にあたって、下條治助さんという大工さんが造ったのですが、そのときの思い出話をしてみたいと思います。

治助さんの家は「車や」といいまして、現在治助さんのご長男（寄稿時故人）の方が、主人となって創業三百年という歴史を持った看板を出して、木曽福島の街の中心部で「車や」というそば屋を経営しております。木曽路を訪れた人が、必ずこの「車や」のそばを食べるのを一つのおみやげ話にしております。

治助さんの家は、木曽川の上流の黒川渡（山林高校の坂下）というところにありましたが、水車でそば粉をうつという仕事をして、製麺をしておったわけでございます。その「そば」をうつという仕事を始めてから今日に至るまで三百年というのが、創業三百年という事でございます。

その治助さんのいた黒川渡の家は、今は中部電力の水力発電用のダムの底になっております。私共の学生当時工事完了。

私の家は先程申し上げたように歯医者をやっておりましたので、この三階建ての家が全部出来上がるとすぐに開業しなきゃいけないという事情がありました。家ができてからもしばらくは、治助さんは毎日のようにわが家に来て、家のあちこちを造作したり、修理したりしておりました。

仕事が済むと、いつも裏背戸に面した縁側に斜めに座って、夕方ちびりちびりとわが家で振舞うお酒を飲むのが治助さんの楽しみのようでした。

お酒は地酒の「七笑」という酒を好んで飲んだようでございます。七笑という地酒の木の香りが、鼻につんとくる、そのよい香りを、今でも私は思い浮かべます。

二合びん一本飲むのが治助さんの定量のようでございました。私の祖母はいつも治助さんのそばに座って、治助さんにお酌をしながら、いろいろと家のことについて打ち合わせをしておりました。

ほろ酔いかげんでじっと一点を凝視しながら、次の造作をどうしようか、次の材料をどういうものを使おうかと考えている

目には、真剣に打ち込んでいる眼差しが見えました。

治助さんは、鮎の焼いたのをきれいに骨だけ残して食べるのがうまかったし、胡瓜もみやワカメの酢のものを手のひらの上にさえ箸でのして、つるっと口に含み入れて、そしてお酒をそのあとぐっと含むような動作が今でも目に浮かびます。

治助さんは、本当に仕事に生き、仕事に死んだ人だと思いますが、その仕事のしっぷりについても、長尺ものの柱に鉋を掛けるときには、一度二度木をなぜるようにして鉋をかける。

上から下の方までずっと歩くようにして鉋をかけます。その鉋の削った木が本当に一定の幅で、一定の薄さで、途中で切れることなくまさしく十二尺ものは十二尺の長さにきれいに削れていくのが私には本当に面白く、いつも子ども心にそれをそばで見ておりました。（中間省略）

祖母がちょっと天井裏を見てくれないかと言っても、治助さんは一杯のお酒が入っているときは、今日は一杯入っているから明日来たときに見ると言って、高い所に上るということはしなかったようでございます。自ら律した安全対策だったのでしょう。

二合ビンのお銚子一本を飲み終えた治助さんは、小さな声で木曽節などを口ずさみながら、とぼとぼと家路へつくのをよく見かけました。

白い鼻緒の雪駄をはいた治助さんの歩きっぷりは、まことに雪駄の底に磁石がついて鉄板の上を歩いているようにさえ私には見えました。地に足がついているとはこの事だと思いました。

（中間省略）

治助さんはまた、太子講という講を作りまして、実はこれは何か宗教的な講のようにみえますが、そうではなくて大工さんばかりの集まりで、大工仕事の勉強会・研究会をやっていたそうでございます。

私の家でもこの太子講をやったそうですが、私の家を造ったあとに講中のみんなを集めて、この材料はどういう材料を使ったとか、この造作はどういう造作をしたとか、一つ一つ問題を出来上がった家の中で、みんなで研究をしたということでございます。

田舎ながらも盛んに技術の勉強をしたそうでございます。また、だいじな材料を使うときなどは、その木を小屋掛けをして、日陰干しにして時間をおいて、十分に日陰干し出来たところでそれを使うような、一本一本の柱にも大切な配慮をしたようでございます。

現在と昔とでは労働条件・道具・建材・器具・設備・工期の問題等大変違いますし、木造住宅の他に、もちろん鉄筋コンクリート造りのビルをたくさん造っているわけでございますが、如何に時代が変わり、環境条件がいろいろ変わっても、真の技能者の「人様の魂の器」であるべき「住まい」をつくる心は一つだと思います。現在の手抜き建売工事など別次元に思われます。

私は、治助さんの大工さんとしての生きざまを見ていると、夕方仕事が済んでからお酒こそ振舞ってもらっているけれども、十分に客とのコミュニケーションをよくし、納得がいくまで話し合ったというようなことなど、仕事に打ち込んでいる仕事師の心というものが、あらゆる所作に写し出されていたのではあるまいかと思います。

安全という事についても、治助さんは治助さんなりに、お酒が一杯でも入ると絶対に仕事場の高い所に上らないというような自己保全を守り抜いたこと。また太子講の勉強会・研究会なども治助さんのような立派な大工の仕事師根性をみんなに植えつけようとした心の現われではないかと思われます。現代工事が一顧に値する必要があるのではあるまいか。

その治助さんも昭和元年四月、胃潰瘍を患い最後には狭心症を併発して、五十八歳でこの世を去ったと聞いております。私の家の棟を上げたのが治助さんの最後の仕事だったということでございます。（随筆集終わり）

今の山林高校の側のダムの湖底に沈んだのが治助さんの家のあった所である。松島の田んぼといって、福島小学校のスケート場として使ったのも下条家の隣にあった。

私が随筆の一文を載せたのは、山林高校の昔の時代の姿を知っていただくのが一つと、もう一つ下條治助という仕事師の真摯な姿に、今われわれが思いをいたす必要があるのではないかという意図によるものである。

昭和二年の大火から七十年は経ったが、百年も経たない間にどのような大変化があったのか。昭和の初期、ラジオは何十軒に一つ、電話も私の家へは近所の人が、自分の家のものの如く借りに来る時代であった。

今はラジオ・電話はおろか、テレビ・自家用車が各戸所有が当たり前であるし、満月に兎が餅をつくといわれた月へも宇宙船で行くことができる。また、宇宙の各所へ人工衛星が飛んでいる。旅行社が宇宙旅行の計画を立てるのも二十一世紀初頭にはおきてくるようになるだろう。

時代は、社会的にも大きく変わっている。金融界の大統合、情報産業の大発展と拡大。企業形態の大きな変化、企業における人材の求人の仕方、われわれが想像する以上に大きく膨らむことは難くない。貨幣の世界統一なども、今の経済学者の諸説以上に現実味がある。

そうした大きな社会変革の中で、青少年の教育問題はどうであろうか。不登校、学校離れ、国旗国歌（これは近来解決したが）の問題等々。学生の問題は父母にあり、教育者にありと論議やなすり合いばかりしている場合だろうか。

自由と拘束のバランスの中で、青少年はどう対処すべきか。山林高校の教育問題もこのあたりを直視して、本当に高校生が自らを磨き、自らどのような変化にも順応できる個々人の在り方が必要かを考え、幅の広い、弾力と包容力のある人材に育っ

てほしい。

私は、心から諸先生方、生徒たちの在り方にこれ等を見据えた教育を期待することや切である。旧態依然たる山林高校から大脱皮し、二十一世紀を迎えるように祈ってやまない。（了）

紀元二千六百年・射撃で優勝したこと

三八回　田沢　兵司

紀元二千六百年、即ち昭和十五年の四月には、三年生に進級した。昭和十二年に中国の盧溝橋（ろこうきょう）事件に端を発した日支事変が次第にエスカレートして暗い影が拡大されていた。出征兵士を見送るために授業を中断しては、木曽福島駅に出向いた。駅頭では日の丸の小旗をふり、軍歌で壮行した。若い兵士を送るたびに、明日は我が身と体のひきしまる思いが、日がたつにつれて強く感じられてきた。国民精神総動員運動による日常生活の締めつけも、日に日に強くなった。暗い世相の色濃い中、紀元二千六百年の奉祝行事が、秋に盛大に行うとの、わずかながらの明るいニュースが伝えられた。これまでに戦争の影響で、東京五輪や万博の開催予定も返上されていた。

こんな中、毎年初夏に行われてきた体育行事の相撲大会は、例年通り福島町の役場前の広場で行われることになった。この大会は相撲が好きであったといわれる明治天皇が、明治十三年六月二十六日、地方巡幸の折、福島町に宿泊されたことを記念して、昭和初期から、毎年この日に、木曽中学校、福島青年学校、一般と我が校の四チームが対戦するもので、応援をまじえ、熱狂的場面が展開されてきた。

特にリーグ戦での五人一組による木曽中と我が校との対戦は白熱化し、見応えのある場面が話題をよんでいた。このため五月中旬からは相撲の練習と応援の練習に別れて猛練習が繰り返される。

新入学の一年生は、特に鍛えられるのがこの時期である。我が校はここ四年間連敗を続けて意気が上らない。

何としても記念の年に勝ちたいものである。

当日は朝から雨だったが、例年の通り大熱戦を展開、見事五年振りに勝つことができた。校内外に明るいムードがただよって、創立四十周年の記念の年に花をそえることができた。

相撲大会が終ると各種の体育県大会の出場をめざして練習に熱が入る。陸上競技、柔道、剣道、弓道、庭球、そして新しく射撃も加わることになって毎日練習することになった。

射撃は三八式歩兵銃による伏射（ねうち）距離三百米、五発発射して一点～十点の的の命中合計により点数が決められ、競技は五人一組で合計点数により争われた。

秋の大会は十一月六日、第三回長野県護国神社大会（当時中央では明治神宮大会として全国大会が行われた。現在の国民体育大会に相当する。）として県内の男子校四十数校が全校出席

して、松本市の射撃場で開催された。

一人が五発を発射、五人一組で競技にのぞみ、見事団体優勝をすることができた。個人成績では、上位五名に我が校では入らなかったが、どんぐりの背くらべではないが、五人が上位にまとまって入ったとのことだった。優勝の賞状を手に、抱きあって喜びあった。

射撃の練習は本当に地味である。中島豊作先生の指導により綿密にコツコツと進められた。据銃（きょじゅう・射撃の時目標をねらうために銃床を肩につけて銃を構えること）の練習は地味であるが、据銃をして発射する瞬間の集中が大切である。繰り返し、繰り返し根気よくやった。実射の練習は学校から徒歩二十分程の杭の原にある村の射撃場で、夏以降月に数回づつ行われ、それぞれが自信をつけていった。

福島町伊谷の水無神社に夜静まり返った中を詣で、神前に正座して精神を集中、気持ちを整えることもやってみた。部員七名が心を一つにして行動を共にすることにも心がけた。俺が俺がの気持ちでなく、一人一人が精一杯やろう、抜け駆けはだめということで、あくまで、チーム一丸を心がけたことがよかったと思われた。松本からの帰りの車中は、これ以上ない喜びと、お世話になった方々への感謝の気持ちでいっぱいだった。

この後、さらに十四師団（宇都宮師団）管下、長野県南信地区の二十数校による同様の射撃大会が同じ松本市で行われ、ここでも団体優勝することができた。

射撃部員は、大島辰夫、川上賢、鈴木佳六、田沢兵司、児野只雄、原清次、三尾貫次、の七名である。

射撃の優勝は青春の思い出として、心に深く刻まれ、生きる力となった気がした。

紀元二千六百年の奉祝行事は十一月十日より五日間、東京をはじめ各地で盛大に行われたとの報道がされ、つかの間の喜びであった。

（了）

思い出の記

四〇回　名小路淳郎

私は迷った。当時十四歳、高等科二年。幼い時から小柄で虚弱児、風邪をひいてはよく学校を休んだ。よその工業校も考えたがこれは家の経済が許しそうもない。

家から通えて実習とやらがあって身体も鍛えられよう、それに第一、中学は月謝が一月五円だが当校は三円三十銭。頼みの父は四七歳現職であっという間に他界、残された六人の姉弟をみる母はさぞつらかったであろう。

子供心にここまで考えたかどうか定かではないが、友人も多く進むというので決めた。家の近くのT君も一緒、同じような境遇で以後卒業するまで「雲居に聳ゆる御嶽のふもと」の木曽路の狭間の学校に通い、学ばさせていただき鍛えてもらった。

先輩は皆シャキッとした実習服だが私達はピョロピョロのスフ、地下足袋も脚絆も代用品のような物だったが、鉈だけは上等の物を買って貰って腰につけた。

初めは苗圃（最初聞いた時は何の事か分からなかった）で檜の小さな苗を植え替えた。地歴・代数・幾何等は何とか皆について行けたが、林産等「林」の字のつく教科は全く分からず手こずった。

教えをいただきながら大変失礼だが、当時の先生方は、仲間同士ではほとんどあだ名、アボ・ニコ・ポン・チャン・ライオン・イワシ・ラッコにマップという如く、お一人ずつ皆その特徴を見事に捉えていて妙というか申し訳ないというか。職員室をノックして「ニコ先生おいでですか?。」と言ったつわ者もいたとか。その先生方もご存命の方は数える程となってしまったが、その先生方のご健勝と、他界された恩師のご冥福をお祈りする次第である。

さて、暫くすると応援歌の練習が始まる。町民相撲大会の為である。先輩が石段の上に立って大声で「ガイカーソレッ駒の高嶺を雲居に望み」と、何の事か訳も分からず、ただ蛮声を張り上げるだけ、声が小さいと容赦なくピンタが飛ぶ、音程などどうでもよくただ大声だけ、おかげで声もつぶれた。

三年だったかに私も一曲作った。今でも歌われているようだが「山紫に」である。三番まで作ったように思うが、そこはそれ耳だけで代々伝えられるので文章も誤りが多い。「山紫に水清き木曽路の春も去りゆけば」までは良いが、次の「再びめぐる聖戦に乾坤共にどよむかな」であったのが「健魂共によどむかな」になっては悲しい。

淀んでしまってはげんなりである。次の「散らさで敵を帰すべき」も「散らされ敵を帰すべし」になっているらしく苦笑を禁じ得ない。

思えばこれも青春の一断面でただただ懐かしく思い出される。先輩が必死に振る赤や黄の旗と共に……。町役場前の本大会の夜、大雨の中でもひるまず行われた対校戦、勝っては泣き、負けては尚大泣き、汗と涙と大雨、静まり返った町内を隊列を整え校歌や山紫を歌って引き上げた感動はもう二度と味わえないと思えば寂しい。

苦しい実習にも楽しみもあった。最奥が一林班、ここへ行けば全く世俗と隔絶されていて、先生の目の届かない所では、枝打ちそっちのけで木に登ってアケビや山ブドウをとって食べた。

木の梢の方にだけが熟しているから、そこを食べ尽くすと木をゆすって隣の梢を引き寄せそこへ移っては食べた。まさに山猿である。蛇もとった。一度に蝮を三匹もとったが、後どう始末したのであろうか。

林班も最南端の楊弓場に出ると上田小学校や女学校が丸みえで、測量では機器を悪用して交替で覗いては興じたものだった。特にレベルのレンズは倍率が高く優秀であったが、像がさかさまだったのが惜しまれる。

期末テストには泣かされた。何週か前に全教科の日時と出題範囲が黒板に張り出される。先輩から譲り受けた教科書には「何年度出題ヶ所」と朱書してあって助かった。

私の教科書等巻末に「初代誰々、二代何エ門……」と列記されていて、私で六代目というのもあった。

昔は物を大切にしたものだ。先輩とのきずなも深かった。応援歌の時は恐ろしいが普段は優しかった。私は柔道部に入ったが下手に投げられた時など「痛かったか？」と気遣ってくれた。

このような平和で青春を謳歌できたのも二年まで。配属将校が代わったり、先生方も征かれるようになると、戦況は急速に慌ただしくなってきた。「銃後の職場は君を待っている」という訳で、次に三年は二学期で打ち切り、繰上げ卒業。

私は受験のため三月まで家居だったから連日のように大切な友を駅頭へ送りに行った。満州や北海道に赴任する仲間も何人か送った。汽車の窓から乗り出して手を振る友の顔が、涙でぼんやりしか見えなかった。

各地に散った友は、そのまま入隊、出征され戦病死された方もある。今こうして五十数年前の回顧録を記すことの出来る幸せを亡くなった友に申し訳なく思う。存命の同級の諸兄、亡き友の分まで生き抜こうではないか。

遥か遠い青春の一端を駄文に連ねてこの項を終わりたい。

（了）

創立一〇〇周年に思いを寄せて

四〇回　大日方英雄

日本三大美林の一つ「木曽ヒノキ」の里に生れた木曽山林高等学校が、ここに一〇〇周年を迎えられたこと、まずもって心からお祝い申し上げたい。

ご案内のとおり、本校は、わが国最初の林業の専門学校として開校され、林業教育を中心に、質実剛健の校風を受け継ぎ数多くの有為な人材を世に送り出してきた。

全国各地から集いし同窓生は八〇〇〇名を越え、地元木曽地方ばかりでなく、全国各地において力強く活躍し、各界の発展に貢献しておられることは誠に同慶の至りである。

振り返ってみると、いくつかの大戦と困難な時代を体験し、また戦後も政治・経済・社会が激動し続けた一〇〇年であった。そして今、二十一世紀という大きな節目の年を迎えることになった。

さて、近年経済成長のめざましい発展と、生活の利便性の向上のなかで、反面環境の悪化が人類生存の危機までもいわれるように、地球的に深刻な問題となっている。「二酸化炭素」の増大による危惧一つをとらえても、まさに今国際会議で論議され、その削減について「森林」の受け持つ有効性が話題の一つの焦点になっている。

このように、森林→林業（育成活動）は、この地球環境保全に極めて重要な位置付けにあり意義をもつものである。

わが国の林業が外材依存度八〇パーセントと、異常とも思われる状況のなかで低迷し、経済活動的には大変困難な時代ではあるが、「森林」に対しての国民の関心や期待は大きくなってきている。

このことから、今疲弊している森林に活力を与え、社会資本としての「森林」の充実を国民全体で計ることが重要な時代でもある。

私たちはそのことに携わるものとして、森林の整備として公益的機能の増進や、環境に優しい、循環型資源としての木材資源等の活用を、それは「山」のお手伝いとして、また「山」からの賜物として戴きながら、「山」の豊かさが真なるものとして進めることが大切と思うのである。

そしてその実践は、体験活動の教育から生れるもの、その教育がなんといっても重要なこと、更にはこのことが、国際的に、いや地球的に極めて重要視されなければならないことから「山林教育」の必要性と継続性を、自信と誇りをもって進めていかねばならないと思う。

私事であるが、私は当県の農山村に生れ、「山」とふれあいのなかで過し、また先祖伝来の山林所有の後継として、森林を慈しみ育て、今もそのことに情熱をもって実践している者の一人である。そしてまた、この教育を望んでいる者の一人である。

二一世紀に向けて、益々のご活躍を期待申し上げ、日本の文化は「森の中から生れたもの」。その継承に遺憾のないよう共々研鑽して参りたいと思うものである。

（了）

追想

四一回　浜　武人

わが母校木曽山林高等学校が創立百周年を迎えることを卒業生の一人として喜びにたえない。私共百名が入学を許可された昭和十六年四月当時の学校は現在の建物ではなく、木造二階建校舎で、校門からみると玄関や校舎には趣があった。

応募した受験生一人ずつ面接試験をうけた時の校長は石田恭吾先生であったが在学中渡辺勇先生にかわられた。

山林学校の三年間の必修科目は一般科目が修身、公民、国語、漢文、作文実習、英語、三角法、物理、歴史、体操、武道、教練の十二科目、林業科目が造林、保護、森林利用、木材工芸、林産物製造、林政法規、森林土木、森林経理、測量の九科目で、この外に実習が必須となっている科目がいくつかあった。

部活には剣道部、柔道部、野球部、陸上部、弓道部、銃剣術部、海洋班（水泳）、滑空班（グライダー）の八つがあった。

それぞれの科目については担任の先生方が実に熱心に講義をされ、そして実習のある科目についても同様の教えをいただい

た。すでに亡くなられた先生方が多いが、すべての恩師について改めて心から御礼を申し上げると共に、個人的な見解で恐縮であるが、私の印象に残っている何人かの恩師についての思い出を記してみたい。

私共の担任で教頭の重本先生は京大当時ラグビー部で怪我をなされたということで足が御不自由であったが、森林経理の名講義をされ又植物にも詳しかったので、後述する神庭先生とともに植物名の指導をうけた。

先生は私共の卒業後新設された京都府立大学教授に栄転され、定年後京都府立女子短期大学学長を経て最後には京都市立植物園嘱託となられた。私は先生に植物園を案内していただいた思い出がある。

重本先生の後、教頭となられた神庭先生からは造林学及び同実習を徹底的に教えていただいた。背の高い先生が胴乱を肩にして裏山演習林でヒノキとサワラの見分け方を一人ずつ教えていただいたことは忘れられない思い出である。

造林学の講義は専門学校級であり、実習では苗畑で床作り、施肥、まき付、日覆、除草、床替、山行苗の梱包まで教えていただいた。先生の講義と実習は卓越していた。県内の実業学校の校長になる話があったが、私は一生を山林学校に捧げると伺い一段と尊敬の念を深くした。

小柄な松原先生からは、山に生きるものにとっては重要な測量を詳しく教えていただいた。い組とろ組を五名程度ずつに分け組長が指名された。

学校周辺や演習林で平板、コンパス、水準儀、トランシット測量等の指導をうけ、さらに野帳からケント紙への製図方法、面積計算、誤差修正などの教えを受けた。卒業生の中には先生の教えを生かし測量士補の資格を取った上、測量士となって独立した人が何人もいる。

先生は退職後東京の大学に進学した子供さんの希望により郷里王滝村から居を東京に移された。お別れに王滝村までいった日が忘れられない。

丸山先生からは国語を教えていただいたが、文章の書き方もこまかく指導いただいた。私共寄宿舎生にとっては先生が舎監長を長く務められたことが忘れられない。

英語の原（深澤）先生はリベラリストであったが難しい英語を分かりやすく教えをいただいた。戦時中山林学校で英語の講義が受けられたのは、私共の時、学徒動員がなかった為である。

在学中は大東亜戦争中の為、軍事教練教官は支那事変に召集され重傷をおって退役された左足不自由な傷痍軍人、陸軍中尉三尾先生であったが、教練は極めて厳しく、ゲートルを巻き兵器庫から三八式歩兵銃、村田銃を取り出して校庭に整列してみるといつも先生は先に立っておられ藁人形を銃剣でさした。

擲弾筒を投げたり実践さながらの訓練であった。しかし間もなく軍隊入りの決まった私共は真剣にこれを受けた。毎年松本連隊の将校による厳しい査閲もあり、校長以下全校がこれに対

応したが戦争体験のある三尾先生のお蔭でいつも査閲成績は上位であった。

三八式歩兵銃による実弾射撃訓練も受け、松本連隊射撃場で行われた長野県下中等学校射撃大会には篠原、森（高木）、下島（浜）の三名が選手として出場し、五発で五〇点満点のところ三人平均四十五点で第三位の賞状を受けたが、このときの三尾先生の喜びようは今も忘れない。

三年生の八月甲種飛行予科練習生として高坂、田澤、林下、平田、林（亀）、加藤（務）、山崎、古谷君ら八名、肥後君が陸軍特別幹部候補に志願され、校長以下全校生が木曽福島駅まで武運長久を祈りながら盛大な見送りにいった。幸い終戦後全員が無事帰還されたのは何よりであった。

次に寄宿舎についてふれてみたい。山林学校が林業関係では全国的に有名であったためか、私が入舎した時は樺太、関東、岐阜県、長野県の各地より五十数名はいっていたが、規則は大変厳しく、丸山先生が舎監長で、長浦、松原、渡辺の各先生方が必ず宿泊を共にされた。

六時起床、掃除、舎監による部屋ごとの点呼、舎監と一緒の朝食、終わって登校、昼食にもどり、放課後は六時の夕食までは自由でこの間洗濯、入浴、外出をおこない、七時から九時まで自習時間であったが、消灯時間に制限がなかったので勉強はでき、汽車通、下宿、自宅通の諸君よりこの点だけは恵まれていた。

上級生と下級生の上下関係は厳しく、会った時挨拶しないと叱責を受けるのが常であった。なお私の部屋は三年生の室長が一人、二年生が二人、一年生が二人の五名構成であった。

ここで同じ釜の飯を食べた人とは長く交際を続ける人が多く、私も一年生の時、勉強の指導や激励をうけた室長とは五〇年たった今も年賀状の交換をしている。アルバム委員に選ばれた私は、寄宿舎及び学校の状況を古田写真館の主人に依頼して撮ってもらい卒業間際に全員に配布した思い出もある。

山林学校などの実業学校には高等農林への推薦入学制度があり、本校から宮崎、鳥取、岐阜、三重、東京、宇都宮、盛岡などに合格者があって、多くの先輩が入学して木曽山林学校の名を一層高めた。

私の同級生も中邑、小林君が東京農専。下島（浜）が宇都宮農専へ、林（亀）君が長野農専へ進学したが、古川君も東京農業教育専門学校に進学し、卒業後長野県内の実業高校を経て第十九代の木曽山林高等学校の校長に就任された。

蘇門会百年の歴史の中で卒業生が校長となられた事例はない。歴代の校長に比し勝るとも劣ることなく、好評の校長として二年間在籍されたことは、私共同級生としてこれに過ぎる喜びはなく、蘇門会員一同の誇りと名誉である。

さて同級生の卒業後の就職状況についてみると、前記小林君が長野県林務部長、山本君が東京営林局の総務部長、高木君が札幌営林局経理課長、高坂君が長野営林局監査官、奈良尾君が

伊那営林署長、桐野（松原）君が大町営林署長、林（亀）君が高田営林署長（順不同）、その他林野庁、営林局署の係長となって活躍された学友が何人かいる。

韓国出身の南君も卒業後韓国へ帰られ、林野庁の課長まで出世し活躍されたが、現在はアメリカに移住し、医者となっているご令息の所に身を寄せていると聞いている。

昭和十九年四月、山林学校に三年間長野県林業技術員養成所が併設（定員二〇名）された。この養成所の卒業生の一人、駒ヶ根市出身の宮下國弘君が目覚しい努力の末、長野営林局を経て林野庁に転勤、労組の役員を体験後、林野庁森林組合研究所総務部長に昇進、この後林野庁に戻り労務、後厚生課長になられた。

同君は、蘇門会員ではないが私共と同じ恩師から学び、記念誌に名を記し同氏の功績をたたえたい。

林君も長野営林局計画課にいて一生を森林土壌調査に従事し、その業績に対し日本林業技術協会賞を受賞された。同君はこの後同協会の主任研究員となり、国際援助事業員の一員として遠く南米コロンビアの森林土壌調査に数名の人と三回も派遣された。地味な君であるが、すばらしい活動に拍手を送りたい。

昭和五四年四月山林高校の西に長野県林業大学校（県立）が設立された。私はこの大学（定員二〇名）の開設当時から樹病学の講師を拝命し十三年務めたが、山林高校からは毎年五名ほど合格者がおり成績は良好であった。第一回卒業生はすでに林野庁、営林局、県で活躍している。小さな大学であるが、元講師の一人として学費の少なくてすむ同大学への進学も勧めておく。

終わりに木曽山林高校の未来について所見の一端を述べてみたい。現在地球の温暖化が世界中で問題となってきて、一九九七年十二月の京都国際会館で世界数十カ国から政治家や科学者が多数集って、国際会議が開催された。

議題は地球を包む二酸化炭素が増加して温暖化を起こし、これが原因となって世界各地に異常気象を起こすようになったので、これを如何にしたら少なくすることが出来るかというのが議題であった。

この結果ＥＵ（ヨーロッパ）七％、アメリカ六％、日本が五％少なくすることを決議した。つまり人類は二酸化炭素を出来るだけ排出しない車を作ること、石炭を燃料とする火力発電を少なくすること、そして二酸化炭素を吸収して酸素を放出する森林の増殖と保全を計ることの三つを可及的速やかに実施するという事となった。

石油や石炭は地球を汚染するが、森林は地球を守る大切な資源であることが再認識された。

この大切な森林を造成することを学べる木曽山林高等学校の存在は重要であり、永遠である。百年前の明治時代に本校の建設を決断された関係者の慧眼には改めて脱帽する。

あらゆる生命の源、森林育成の重要性を強調し、拙稿を終え

る。

〈追伸〉

私共は昭和十八年十二月繰り上げ卒業をしたので、蘇門一八会と名ずけたクラス会を現在もおこない旧情をあたためている。

（了）

母校での思い出

四一回　長谷川智彦

私は四一回目の卒業生である。在籍は百人、亡くなられた方は現在のところ二七名である。卒業は戦時中のことで繰り上がりとなり昭和十八年十二月になった。

そして昭和十九年一月には外地へ就職となり中国へ行くことになった。同級生には、韓国人もいた。

私は汽車通だったので、学校帰りに、よく駅の裏で先輩から鉄拳制裁を受けたが、その先輩も今では故人となってしまった。

授業中、松原先生から雑談を聞く機会があった。先生は「君たち戦いに行ったら逃げろ。」と言われ、当時としては、勇気ある発言だと思った。それに女と酒は気をつけろとも言われた。

教科では漢文のことが印象に残っている。その事が現在の古文書の研究に役立っているのではないかと思う。

昭和二二年復員、そして二五年学校へ勤務することになった。こんなことになるんだったら山林時代もっと勉強しておけばよかったと思ったが後の祭り。それから教員資格を取得せねばならなかったから大変であった。

参考までに単位のことにふれてみる。通信教育（慶応大学）二六単位、公開講座、認定講習四七単位。合計七三単位取得する。内容は、

○一般教育科目　人文（理論）生物学、社会（憲法）法律、自然（物理）

○教科専門科目　外国史、美術史、体育原理、地理学、国文学、東洋哲学、日本文化史、日本史（教育研究を含む）

○教職専門科目　理科、職業、社会、教育心理学、児童心理学、学習指導法、道徳教育、青年心理学。

最初中学校だったので、中学校の免許をとろうとしたが、次に小学校へ勤務することになり、中学校の単位が、無駄になってしまった。結局八年間かかって二級普通免許状取得。いわゆる教諭となった。

一級普通免許状（校長資格）は年数がくればよいことで、とにかく取得できたのはよかった。なにしろ三三才までは、勉強とのたたかいであった。幸い好きな道だったから耐えることができたのではないかと考えている。以上、勉強のことばかりの想い出となってしまった。

（了）

技術者の誇りを胸に

四一回　林　信一

一、戦時の卒業

地元の中等学校には母校のほかに木曽中学があった。なぜ山林学校（当時）を選んだのかと問われれば、現今のように偏差値に左右されたわけではなく、もっぱら「質実剛健」の校風に魅かれたためである。

入学した昭和十六年の十二月、軍閥に牛耳られた日本は、対米・英の太平洋戦争に突入してしまった。直接の影響は、敵性言語であるとして英語学習の中断となって現れたし、三ヶ月の繰上げ卒業となったが、級友の中の数人は、すでに予科練を志願して軍人となり、卒業式には出席しなかった。

忘れられない恩師は、造林学の神庭英先生の温顔であり、またクラス担任であり、さらに軍事教練担当の教官三尾貫三陸軍中尉である。

二、就職から定年まで

ある上級学校への進学に失敗したため、木曽地方帝室林野局に就職したが、終戦前の三ヶ月を海軍特別幹部練習生に志願し、猛訓練と防空壕掘りに明け暮れた。敗戦がもたらした皇室財産の国への移管で林政統一が行われ、創設された長野営林局勤務となった。以来定年までの四三年間の公務員生活の大半を森林土壌調査に捧げることが運命づけられた。

戦前からの大政正隆博士の研究が実って、日本の森林土壌の分類法が確立されたのにもとづき、全国の森林について土壌調査事業が一斉に着手された。長野営林局では昭和二五年頃から試験調査係が担当し、後に土壌調査係が実施した。

日本三大美林の一つと謳われた木曾ヒノキ林を手始めに、大政博士始め旧林業試験場の竹原秀雄博士や松井光瑤博士ら研究者の指導のもと、調査員は技術を身につける一方で調査成果の蓄積が徐々に進んでいった。「木曽谷地質図」を作成された東京教育大の柴田秀賢教授からは地質学の手ほどきを受けた。学者・研究者の現地指導を受けたり、土壌学や地形学・地質学・植物学・森林生態学などに関して、全国各営林局の調査員が一堂に会しての現地協議会や中央研修を通じて、学問・技術面で実力を養う機会にめぐまれたのもこの時期であった。

学者・研究者との接触を通じて、その博識に感服するとともに、飾らない人柄に接し、ときにY談も交えるユーモアに溢れた人間性にも触れて親しみを増していった。また学者への敬意は学問への憧れを強くし、特に自分に欠けている数学・統計学や英語の知識を身につけたい、という欲求が膨らんできた。

通信教育は、社会人が何かを学習しようとする場合、実に有り難い制度である。長野西高校の通信課程で英語・数学その他の単位をとり、高校卒業資格を取得し、ついで法政大学文学部

地理学科の通信課程に学び、とくに英語の学力向上を目指した。夏期スクーリングで真面目に努力すれば、自宅学習だけでは思いもよらない実力を養うことができる。

大学の卒業まで五年を要した四二歳の卒業生であったが、卒業の際には優等賞に次ぐ努力賞を総長から受けた。また都内大学地理学科の卒論発表会に法政大学を代表して発表した。卒業の年には英検二級に合格することもできた。

技術面では、最高の国家資格である技術士（林業部門）を取得できたのも、大学の通信課程の成果といえる。以前は理科系の旧専門学校以上を卒業した者でないと、技術士本試験を受験することが許されず、その前に予備試験を受け、合格する必要があった。

最近になって技術士法の改正があり、予備試験が廃止されてから、技術士試験の合格が我われの身近にも輩出してきたが、以前は予備試験の分厚い壁が障害となって我われ低学歴層の挑戦をしりぞけてきた。技術士本試験合格者名簿でみるかぎり、林業部門で予備試験を通過して技術士となったのは意外にも筆者だけのようである。これも大学・高校の通信課程での学習抜きでは考えられないことである。

この結果がもたらした波及効果として、学歴社会の真っただ中で長い間悩まされてきた「学歴コンプレックス」から私自身を解放することができた。

数学の基礎にたって統計学を学んだことも、職務上好結果をもたらした。上司のF課長はスギの造林にとくに熱心であったが、時に度が過ぎることがあった。たとえば伊那谷のスギの造林上部限界として、標高一三〇〇メートルを彼が主張したことがあった。

もしもこれが採用されたら各所に造林の失敗個所が続出したであろう、危機感を抱いた私は、統計処理を使って真っ向からその無謀なことを証明し、F課長の主張を撤回させるのに成功した。

常日頃から異常に権威主義的傾向がつよく、部下に罵詈雑言を浴びせてはばからない彼、彼に添わない部下の主張などほとんど受け入れたことのないF課長であったが、一言の反論を許さず彼を説得できた。学問の力が実証された例である。

国有林の土壌調査の進行にともない、長野県の奥地周縁部を占める国有林の土壌の実態がうき彫りになってきた。長野営林局の森林土壌分布の特徴は、地域差がはっきりしているところで、木曽ヒノキ林を主とする木曽谷では、強酸性のポドゾル化土壌が多く約四割を占める。

とくに一部は湿性ポドゾル地帯で、土壌条件がきわめて不良であること、中・北信には浅間山をはじめ火山が多いことから火山灰を母材とする黒色土が広く分布すること。日本アルプス上部では、乾性および湿性のポドゾル化土壌が多いことなどである。標高があまり高くない一般の山地では、褐色森林土が主体をなし最も広い分布面積を占めている。

これらの土壌はさらに土壌型に細分され、その分布図の土壌図と説明書を調査報告として刊行し、森林施業に活用されている。地域施業計画の樹立の際は、土壌と標高の組み合わせを考慮して土壌調査係が樹種選定基準を決定している。

このように旧林業試験場の学者・研究者のご指導をうけて発足し、のちに関係の先輩・後輩の皆さんの協力のもと、筆者が中心となり半生をささげて推進したことで蓄積された森林土壌調査の成果は、湿性ポドゾル地帯の更新不成績地の調査をはじめ、かずかずの造林成績と土壌との関連についての調査研究の成果とあいまって、国有林経営の基礎資料として、重要な役割を果たしている。

昭和六一年には、過去二〇年間の調査成果を総合し、統計処理を行って、信州カラマツの造林不成績地の土壌の理化学性を研究した論文に対し、「日本林業技術賞努力賞」を授与された。この受賞に関しては、同じ四一回卒業の畏友農学博士浜武人氏から応募するよう勧めていただいた。このほか同博士には陰に陽に職務の上でお世話になった。

三、定年後は地球の裏側で発展途上国援助の一端を担う

定年退職後は日本林業技術協会の森林測定部長小池茂樹氏の勧誘を受け、同協会の主任研究員として国内では新潟県内の公団造林地の現況調査を行った。またスキー場や発電所の開発に伴う環境影響評価の業務も林野弘済会の委託を受けて行った。

国外では政府開発援助（いわゆるＯＤＡ）の林業調査団の一員として、森林土壌を担当し、南米のコロンビアとアルゼンチンの両国で調査を経験した。

これらスペイン語圏での経験から、スペイン語に親しみ、長野冬季五輪では英・西語の語学ボランティアとして、研鑽をつむと同時に、新たな人脈を獲得できたことも忘れがたい。

四、コロンビアでの経験

コロンビア共和国は、コーヒーと美女とエメラルドの国と要約できる。アンデス山中の標高およそ二千～三千メートルの範囲は、「常春の国」と呼ばれる一年中温暖な住みやすい地域である。何しろ月別平均気温が一年をつうじて一℃以内しか変化しない、朝夕やや涼しいことを除けば一日を半袖シャツで過ごすことができる。

地球の裏側にあって四季の変化も見られないアンデスの山腹には、どんな土壌ができているのか初めは見当もつかなかった。しかし調査に入ってみると、この常春の国は意外にも日本の温帯山地と同じ褐色森林土や黒色土が広く分布していた。これは私自身が現地で確認するまでは一般に知られていなかった事実で、当時は驚きと一種の感慨を覚えたものだった。

この地方の樹木の生長の速さにも驚いた。ユーカリの一種は毎年五メートルも樹高が伸びており、マツ類・イトスギ類なども植えて二十年足らずで利用可能な大きさになり、伐期を迎え

るのには感服した。

五、アルゼンチンでの経験

アルゼンチンで調査したのは、北部のチャコ地域で、グランチャコとして有名な広大な亜熱帯サバンナの大平原であった。私の担当した土壌調査のカウンターパート（技術移転の受け手）は、通称ゴンさんのヴァレリオ・ルベン・ゴン氏で、童顔でデブちゃんの愛称でとおっている好人物であった。私は彼に「モモタロー」の愛称を送った。「気はやさしくて力持ち」の頼もしくも愛すべき人物で、大変な狩猟の名人でもあった。

1、アルマジロの狸寝入り

サバンナにはいろいろな動物が棲んでいた。鹿やピューマ、アルマジロなどである。中でもアルマジロは現生の哺乳類では唯一骨質の甲羅を持つ哺乳類である。ある日サバンナの中で一匹の子犬ほどのアルマジロを見つけて、一人の作業員と一緒に追いかけたことがあった。ところがこの動物は足が短いせいか意外に逃げ足が遅く、たちまち追いついて、あわや手の届くところまで追ったのだが、次の瞬間もう逃げられないと観念したのか、「クー」という悲しげな鳴き声と共に、ばったりと横倒しになって、そのまま動かなくなってしまった。死んだふりで狸寝入りを決め込んだのである。無抵抗な動物の哀れさに胸を衝かれた私は写真を撮っただけでその場を後にした。

2、アルゼンチンの大平原の土壌

調査地一帯のサバンナでは、雨が少ないため、土壌は世界土壌図の分類単位に当てはめると、レゴソルかゼロソルと呼ばれる渇ききった未熟土が大部分であり、植物養分に乏しい上に、きわめて固く、調査のための土壌断面をつくるのに長時間かかった。分析してみるとカルシウムやマグネシウムに富む塩類が白い斑点となって地下深部に広がっていて塩類土が広く分布していることが認められる。この調査では、元林業試験場四国支場長、久保哲茂氏のご助言を仰いで土壌の分類を行った。塩類土は世界的にもやっかいな問題土壌の一つで、取り扱いを誤って農地に不用意に灌漑をすると不毛地と化したり、極端な場合は砂漠化につながる恐れのある土壌である。人類史上でも古代から繁栄したいくつかの文明を衰退させ、滅亡させてきた主な原因は土壌侵食と土壌の塩類化であるといわれている。

六、おわりに

学校を卒業してから現在までの五十六年間を振り返るとき、とくに定年後の地球規模に拡大した舞台で、多面的な活動ができた自由度の高い時期が、人生で最も充実した期間であった。社会人として技術職に徹した自分の半生を省みて、いささかの悔いもなく、心から満足している。

一方戦中派の中でも最後の徴兵検査を経験した年代であり、軍隊や戦争の過酷さが身に染みている。それだけに終戦のラジ

オ放送を聞いたときは心底ホッとしたのが実感である。

とにかく戦争のない半世紀のもたらした日本の経済発展の恩恵は認めるものの、理念も哲学もないままに、日本国をどこへ導くつもりなのかも解らない、常に党利党略を最優先する保守系の政治家には尽きない不信感と疑惑を抱いている。

核も戦争も存在を許さない世界の実現を夢みて、二十一世紀に向かって日本がリーダーの一翼を担うことを願ってやまない。

今後は健康のゆるす限り、地球上の未知自然と人々を訪れながら、好奇心を失わずに生きてゆきたいと思う。（了）

寄宿生活の思い出

四一回　桐野　昭二

一、所在地

校庭の北側、国道三六一号線とに挟まれ、校庭より一段高い所。

二、構　造

木造二階建、旧館一階一～五号室、二階六～十号室、新館二階十一～十三号室（一階は木工室）

三、部屋の造り

板の間　窓側に各人の机、中央に長い勉強机

和室　板の間の左、一段高く、八畳か十畳、上がり口に引出し式下駄箱。

四、部屋の構成

一・二・三年生各二名（新入生は最初、同郷の先輩の部屋に入れてもらう例があった）

五、一日の生活

一日の生活は、起床・掃除（二年生ハタキ、一年生雑巾がけ）・洗面・点呼（室長→舎監へ報告）・朝食・登校・下校昼食・登校・下校夕食・入浴・自習・就寝というサイクルとなっていた。

食事は、夫婦者の人の良いおじさん、おばさんが調理してくれた。時には腹の減った一年生へそっと差し入れしてくれてうれしかったことが忘れられない。一ケ月の食費は二十円から三十円で、三年間トータルすると二千円ほどになる。

食糧事情は悪く、腹が減って困った。飢えたおなかを満たすために、家から食べ物を送ってもらったり、帰省時に持ってきたり、家人が直接持参したりして補給した。初めはお櫃から茶碗へ盛っていたが、一年生の分が足りなくなるためにドンブリに盛り分けするようになった。

舎監の先生が「僕はあまり食べないから」といって生徒に分けてくれたこともある。舎監の先生によっては、食前にお祈りをするように言われたり、玄米飯は「六十回以上噛め」と言われたりした。

演習林で実習のある時は、三食弁当だったし、夜ウドンの時もあった。

寄宿舎の上下関係についてはさまざまな思い出がある。三年生の布団の上げ下ろし、脱いだゲートルの始末、衣類の洗濯と乾燥は一年生の仕事とされた。なかでも柔道着の洗濯は大変な苦労であった。

飯を食うのが遅いという理由から、足を蹴られた一年生もいる。また、新入生が入り、二週間から一ケ月くらいの間に「しぼり」と称するものがあった。部屋ごとに一、二年生を夜間呼び出し、三年生が二年生に対し「一年生の指導が足りない」などといって、竹刀で叩いたり、投げ倒すなどをした。これは一回限りのセレモニーのようなものであった。

しかし、普段の上級生は勉強の面倒を見たり、寄宿生以外の上級生から下級生を護るなど、同じ釜の飯を食う者同士の固いきずなを醸し出してくれた。

寄宿舎にはノミが多く、またシラミの発生もあり、そのため大掃除を徹底的に実施した。ノミと紙に書き天井へ貼ったこともある。また、二年生の号令で一年生が日曜日に便所の汲み出しをした。冬は凍って、モッコで担いだこともある。

夏の夜校庭に全員が集まり、肝だめしをした。寄宿舎の裏を通り、幸澤の山の中まで一・二年生が往復し肝だめしをした。三年生が、要所要所に作った仕掛けに肝を冷やすことばかりであった。

また、「夜中に便所へ行くと、便槽の中から手が出て尻を撫でられる」という怪談が言い伝えられており、気味がわるかった。

朝、窓の下を通学の女学生が通る時刻になると、一斉に窓が開き中には声をかける者もいたようだ。青春の日々を三年間寄宿舎で過ごした体験から思い出として残っているものを書き出してみた。

（了）

在学当時の思い出～学徒動員の体験から～

四二回　藤村　隆

第四二回生は、昭和十七年に入学し、昭和二〇年に卒業した。この期間は、太平洋戦争の真っ最中で、第一学年だけは校舎内でまともに授業を受けることができたが、戦況が逼迫してきた第二学年は勤労動員の日数が多くなり、校舎内での授業がままならぬ状態に追い込まれ、第三学年になるとほとんど校舎内での授業ができなくなった。

恐らく母校創立百年を通して最も波乱万丈の期間ではなかっ

たかと思う。私は、母校創立百周年を迎えるに当たり、五十数年前に遡って当時を回想・評価し、これからの林学の進め方について、何らかの参考に供することができればと念願している。

木曽谷発電所建設工事は、戦争遂行のための至上命令として、地域を越えた労働力を徴用して始められた。このうち、三岳村御岳発電所の現場にはわが校（第四二回生）ほかに、木曽中学校と木曽高等女学校の生徒が動員されていた。

男子生徒は、主として砕石機への原石の運搬、女子生徒は炊事・清掃に従事していた。作業は、演習林の実習とは比較にならぬほど厳しいものであったが、級友達は黙々として働いた。

ここに昭和十九年五月中旬、中国から二八九名の労働者が強制連行されてきた。私は、彼らが衣食住の劣悪な条件下で重労働を強いられ、彼等の多くが犠牲になったことを回想しようとは思わない。

それは、太平洋戦争がいまだ完全に検証されたとは考えていないのに、悲惨さだけを強調するのは本題の主旨ではないと思うからだ。

私がここで強調したいことは、中国の労働者の方々が極限に近い生活の中でも、現場で生徒に接するときは笑顔で「ニイハオ」と話しかけてきたことと、筆談で自分の家族のことや、帰国を望んでいることなどを話してくれたことだ。

その時の彼等のやさしい目は、五十数年を経過した今も、鮮明に私の脳裏に焼きついている。それはまさに一切の偏見を持たない人と人の交わりであった。

私は、林野庁在職中に国際協力事業団（ＪＩＣＡ）の専門家として、フィリピンのルソン島中部パンタバンガン地域の森林造成プロジェクトに参画した。それを決断させたのは学徒動員での体験が動機となったことは否定できない。

きざを承知で告白するならば、五十数年前に中国の労働者が敵国（日本）の発電所を建設するために働かされたが、我が同胞がフィリピンに召集され、飢餓線上で、武器もなければ戦うこともできず、草原を徘徊しつつ死んでいったパンタバンガン地域で、森林造成の指導をするというより、力の限り働いてみたいと考えたからだ。

ところで、パンタバンガン森林造成プロジェクトは、パンタバンガンダム流域の水源涵養のための造林が目的であり、我が国第一号の林業技術協力プロジェクトであった。

林野庁から私を含め当時十一名の専門家が派遣されていた。その中に石崎邦彦氏（第五八回生）と上条邦広氏（第五九回生）それに私と何と蘇門の同窓三名がいた。これはもう偶然に一緒になったでは説明できない神の力で支配されているような気がしてならなかった。

当然のことながら私たち三名は、母校で修得した造林実習を反芻しつつ造林計画を作成したが、この時ほど母校での実習が役立ったことはなかったし、同窓生の信頼感を強く意識したことはなかった。

プロジェクトが反政府共産ゲリラ（ＮＰＡ）に襲撃されたときも、両氏は冷静に対処し危害を加えられることはなかった。また、私は立場上から両氏に厳しい要求をしても全て率先して受け入れてくれた。

話を学徒動員に戻そう。第四二回生は、発電所工事に動員されたほかに、北海道の釧路市に近い標茶村に援農隊として派遣された。当時は木曽福島から約三〇時間かかる遠隔地で、現在ではブラジルに行く時間距離である。

初めて乗った連絡船に胸をおどらせ着いたところは開拓間もない僻地で、電気もなく、食物は南瓜が主食でかつて体験したことのない厳しい生活であった。

約三ヶ月そこで働いたが、この時の苦しかった体験によって海外に出ることにそれほど抵抗を感じなかったし、開発途上国での生活に思ったより不自由を感じることが少なかった。

蕎麦を刈っている所にキタキツネが遊びに来たこと。川幅二・三メートルの浅瀬に鮭が遡上して来たこと、ヒグマが家畜を襲いに来て罠にかかったことなど北海道の援農でなければ遭遇できない貴重な体験もした。

以上のように、第四二回生の体験したことは、決して喜ぶべきことではなかったが無駄ではなかった。そこで私は母校の実習について提言したい。

今日のごとく地球環境の保全が叫ばれ、国際的な林業協力が必要になっている時はない。このような時代の要請に応えるためには校舎内の学習も重要であるが、熱帯地域での造林、熱帯降雨林の天然林施業などフレキシブルな実習を計画してもよいのではないかと思う。

また、海外に出ることによって異文化に接し、異民族の人々と心と心の交流によって得られる無形の収穫は計り知れないものがあると思う。

（了）

今も生きる山林で学んだこと

四三回　原　豊和

木曽の五木は「アネヒサコ」

昭和四八年の初夏、私が上伊那地方事務所林務課長のときのこと、前日に岡谷市で関東甲信越の十県知事会議があり、当日は午前中箕輪町にある県営苗畑と駒ケ根市の光前寺を視察する行事が行われた。

この苗畑視察の記念に地元知事のみやげとして、他県にない苗木を用意してほしい、と秘書課を通じて知事の要請があったので、いろいろ検討した結果、わが母校山林の校歌にもある木曽五木の苗木を用意することにした。

この五木の苗木から、後述の「アネヒサコ」のエピソードが飛び出したという訳である。

木曽から取り寄せた五木の苗木には、それぞれ名札をつけ水

ゴケで根を包み、所長車のトランクに積み、駒ケ根市で解散の時差し上げる予定にしていた。

当日私は担当課長として、十ヘクタールの県営苗畑における苗木養成全般と、養成中の各樹種について説明し、質問にも何とか対応できたのでヤレヤレと思いながらご一行を貸切バスへ誘導しようとしたその時、突然西沢知事から「林務課長、おみやげに用意した木曽五木の苗木をここで披露してくれ。相手は知事も同伴のご夫人も林業の素人だから、できるだけ分かりやすく説明すること。」と、予定になかった事を言われ、しかも「できるだけ平易に」と条件までつけられて少々慌ててしまった。

幸いその瞬間、二五年も前の山林学校時代の事が脳裏に浮かんできた。

それは、山林一年生のとき神庭英先生が「造林」の講義で、「木曽の五木は秋田の杉、青森のヒバとともに日本三大美林の一つであるから、林業を学ぶものは必ず覚えること」と前置きされた上、次のように教えて下さった。「木曽五木の覚え方は、樹木の価値からいえばヒノキであろうが、この場合覚えることが第一だから順不同でよい。まず、五木の頭文字をとってこれを繋ぐこと。アスナロのア、ネズコのネ、ヒノキのヒ、サワラのサ、コウヤマキのコ、これを続けてアネヒサコとすれば必ず覚えられる」と教えられたことが昨日のことのように思い出された。

私は、瞬間「そうだ！これでいこう」と度胸を決めたら、不思議にもずっとリラックスした気持ちになり、漫談調に「アネヒサコ」の頭文字を使って五木を説明する事ができた。

「知事様方、奥様とご一緒ですので、多少憚りますが、西沢知事から特に判りやすく説明をとの指示でありますので、男性ならば、一度聞けば必ず覚えるようにご説明いたします。」と前置きをして、まず最初に木曽五木は日本三大美林の一つで、長野県の誇りでもあることを、それから苗木の現物を手に、ヒノキから始めて、順々に各樹種の名前・特徴・用途などを説明し、「ここからが肝心のところです」と強調してから、「五木の頭文字、アスナロのア、ネズコのネ、ヒノキのヒ、サワラのサ、コウヤマキのコ、これを続けると「アネヒサコ」となります。知事様方、木曽の五木は「アネヒサコ」と覚えていただけたと存じますが、いかがでしょうか。」

すると知事の中から「林務課長さん、木曽五木の名前の覚え方をもう一度ゆっくり説明してください」という注文があり、このとき期せずして全知事がメモ帳を出されたのだった。

この漫談調の説明と、最後のやりとりを終始ニヤニヤと見ていられた「ギョロ目のゴンさん」こと、西沢権一郎知事がニッコリ笑いながら「ヨシヨシ」と喜んでくださった。

このことがあって以来、たまに知事とお会いすると私のことを「アネヒサコの林務課長」と呼んで下さるようになり、大いに面目を施した次第である。

ここに紹介したのは、ほんの一例にしか過ぎないが、先生の教え方や覚えるコツは素晴らしかったとつくづく思う。と同時に若い時身についたものは、普段忘れていてもいざという時必ず役に立つということがよく分かった。

今年七一歳になった今、来し方を顧みると、山林学校から進学した宇都宮農専の林学科では、林業関係の専門科目は理論的に詳しく教えてもらえたが、ほとんどは山林学校の復習のようなものであった。

また、社会に出てからは長野県の林務職員として三五年、次いで林業コンサルタント協会の六年間、現役最後の職場は村総面積の九六パーセントを山林が占める故郷清内路村長であった。

この五十有余年の歳月を林業一筋に歩き、今また地元飯伊森林組合理事の末席を汚している。

山林卒業以来、進学先や各職場で、良き先輩・後輩や友人との出会いに恵まれ、大過なく過ごして来られたのも、若き日の山林で学んだ「山林魂」があったからこそ頑張れたものと感謝している。

ここに、創立百周年を迎えるに当たり、母校木曽山林の永遠のご発展を祈念してやまない。

（了）

在学当時の思い出

四三回　植原　昭三

上松町では度々火災が発生し、吾が家も学生時代には二度も災渦に遭遇した。あいにく昭和十八年三月は、最初に罹災した直後で家は焼失し焼け残った土蔵に仮住いをしながら山林学校の受験に応募し、また合格の知らせも土蔵で受け取った事が印象的である。

時は太平洋戦争の最中で、衣・食の欠乏が進み、四月の入学を前にして学生服のボタンや帽章の入手のため先輩の家を尋ね廻り入学の準備をした。

いよいよ入学し一年生になると二年生からの牽制が厳しく毎朝家を出て学校へ着くまでは敬礼ばかりの連続で上級生に会う度に神経をぴりぴりさせられた。

学校の正門の両側は土手が築かれ立派であったが、校舎は古く教室は広いのに照明がなく、雨天の日などは薄暗い感じさえして黒板に先生の書く字が読みづらくなり私は眼鏡をかけることになった。

実習作業が多く、校内敷地、演習林の測量を始め、夏は下草刈り作業等もして汗をかいた事が脳裏に焼きついていて、今なお勤労の精神が人生のおりおりに役立っている。

また、在学中の最大の思い出は、二年生の時、学徒勤労奉国

隊として家を遠く離れ、北海道十勝平野に派遣されたことである。

一戸の農家に二人宛宿泊し、三ヶ月間の農事作業の手伝いをした。文字通りの晴耕雨読で時々部落の学校に集合して軍事教練を受けた。交通の便が悪く広大な村の地域のため学校には馬に乗って来る者、自転車で来る者等いろいろ苦労して集った。

光陰矢の如し、時は流れ当時十五才の私は六五才を過ぎ任期満了により職を去った。

大きくなったら必ず北海道を訪れる約束のため、五十年振りに再会の夢を果たすことができ、万感胸に迫り感激の涙を流した。これも学生時代に鍛えられた勤労の精神と体力の賜のお陰と思い、今は感謝の気持ちでいっぱいである。

今、過ぎし青春時代を振り返ってみるとき、わが国未曽有の終戦前後を在学した者として、勉学の不足はかくすことはできないが、それはその時代の流れの中で止むを得ぬものがあったと思っている。

半生の公務果たせし吾が道を振り返りつつ今を生きゆく

ここに木曽山林高校百周年を迎えるに当り、校訓である、「質実剛健」を心の灯として、たゆみなき母校の発展を願って止まない。

（了）

思い出の記

四三回　坂下　健彦

昭和十八年四月入学、い組ろ組の二学級百人で、小柄な私は一番前の先生の唾のかかる教壇の下で小さくなって授業を受けていた。

法面とか法勾配とか、トランシットの測角のネジの操作。英語の発音の口の開き方などが印象的である。特に校長の渡辺先生の口角泡を飛ばした修身の話が記憶に残っている。

当時は軍国一色の時代で、物事を批判する考えなど全然なく自分も将来は陸軍大将になりたい希望を持っていた。しかし身長が不足で駄目であった。

神庭先生の苗床の床替実習、松原先生の測量の実習、上島先生の特徴ある話し方などは強く印象に残っている。

一度シラミがわいたことがある。衣類の折り目にビッシリついた白い卵には驚いた。また下宿の柱の割目に南京虫がいて、夜になると赤い虫が出てきて噛み付く。痛がゆい噛み口が二つあるのが特徴でなかなか敏捷である。学校でノートを開いたら南京虫がチョロチョロと出てきてビックリして、誰にもわからないようにして潰した。

柔道部で寒稽古があったがあまり強くはなれなかった。

勤労動員は、二年生の時だと思うが北海道の帯広の町のすぐ

隣りの音更という所へ三ヶ月間、農家の手助けにいった。特別列車で新潟を経由、青函連絡船で夜中に渡った。夜であったが、外へは出ることを止められた。

農作業は馬鈴薯の種を落としながら足で土をかけてゆく。大豆の種播は箱の前に小さな車輪のついたものを押してゆくと、二粒づつ一定間隔に落ちてゆく方法など内地では見られない大農経営であった。

馬の爪を切ることがあって、その帰りに裸馬に乗せられたことがあった。始めのうちはゆっくり歩いていたが、そのうち走り出して落ちそうになった。

馬が火山灰の道を一足飛びで走ると背中が波を打つように上下する。気持の良いものである。この時に乗馬のコツを会得した。

二年生の秋だったと思うが、今度は御料林のヒノキの木材搬出で野尻営林署の伊奈川の奥へ動員された。ループ式の桟橋、これは曲線の所に平地がないので、ヒノキ材を組み立てて桟橋とする方法で、空木岳の中腹まで蛇行して昇って行く作業軌道である。

台車に積んだ大きなヒノキ丸太を三人程度で、曲線にさしかかるとスピードを上げて通り抜ける「乗り下げ」という命がけの仕事である。前で脱線すれば、間でブレーキ操作をしている人は潰されてしまう。真ん中で脱線すれば、前は引き抜かれ後ろは潰されるというまことに厄介な仕事である。

幸いに事故は一回もなかったが、私は一度機関車が下ってくる時、前に付いている木炭ガスを発生させる装置に乗っていたところ、連結が切れて走り出したことがあり、スピードの出ないうちに飛び降りてしまったので助かった。

次に、この山奥では岩がゴロゴロしていて傾斜が急な為、運び出す木材を使って小さなダムを沢山作り、ダムとダムの間は修羅にして、できれば滑るように水を流す。ダムから引張り出して滑らせて次のダムに落とす「小とび」を使っていた。これは小谷狩といい、珍しいものを見た気がする。

昭和二〇年八月終戦となり、学校へ帰れることとなった。帰る途中、大桑駅で広島に不思議な爆弾が落とされたと人が話していた。情報は早いものだと今になって思う。

三八式歩兵銃で五発の弾をつめたり、背のうを背負ったり、銃剣を装着したり、寝転んで銃撃の目標を定める等、教練に余念がなかった。

朝全校集会で集まった時左向けをしてもとに戻った。その時配属将校がツカツカと私の前にきて右足を軸にしたか、左足を軸にしたかと聞いた。私は右足と答えたら黙って行ってしまった。

終戦後の二月頃だと思うがアメリカ軍のジープが校門から乗り込んで来てバックした時の車の速かったことには驚いた。その後武器庫にあった武器はグランドの中央に大きな穴を掘って埋めてしまった。

一、山林で学んだこと　　ヒノキのように真直であること
一、山林高校に期待すること　天下の山林でありたい

（了）

100周年記念誌に寄せて

四三回　倉野　敬蔵

四三回生の在学期間は、昭和十八年四月から二一年三月であって、まさに大東亜戦争末期で例えば次のように、日本が追いつめられ始めた時期であった。

18・1・2　ニューギニア・ブナ島守備隊玉砕
2・7　ガダルカナル撤退
3・2　朝鮮に徴兵制法公布
4・18　山本五十六連合艦隊指令長官搭乗機ソロモン上空で撃墜され戦死
5・12　アリューシャン列島アッツ島守備隊玉砕
（日本は以後この海域の制海権・制空権を失う）

私の父はしがない菓子職人であって、御料には何の縁も知人のなかったが、木曽谷が御料林で占められていることや新開村に山林学校があることは知っていて、簡単に山林学校から御料を考えていたようだ。

高等二年になると宮沢先生の担任となり、この人が父と極めて馬が合ったのか時々家庭訪問してこの事を話題にしており、私の頭はいやおうなしに高等科の早くから山林→御料で固まっていたが、これが簡単でないことを父は後で知ったようである。

一、授業

入学したものの、前述のような背景であったので、学校側も大政翼賛会行事の付き合いに追われていて、常に授業を中心として専念できる状態でないことが生徒にも伝わってきて、教室の空気はじっくり勉強できるムードではなかった。

私事で恐縮であるが、国語（丸山先生担当と記憶しているが）のとき、一つの課題の解説が終了した時と、次の課題に入る時、私が立って通読するよう言われ、朗読する楽しみを感じたことを記憶している。

授業に対する真剣さは、先生によって異なっていて、林学関係の神庭先生、担当は生物だと思ったが重本先生、国語の丸山先生の場合は割合静粛であった気がしているが、幾何、測量の松原先生、英語の原先生となるとどことなくザワツクといった具合いであったと記憶している。

二、実習

実習の精神こそ「山霊ハ英傑ヲ生ム」という山林草創の心であったことを具体的に理解できたのは、卒業後いろいろと考えたり反省するようになってからのことである。在校当時は、

「実習は神庭道場であって、ここでの点数は全体の成績を左右しかねない」という神庭念力と戦うのが精一ぱいでこれが生徒の本音であったと思う。

それは「実習組長」をやって来て実感したことで、先生の目が届くうちは組長の指示も掌握も効率よく機能するが、所用で先生の姿が消えると要領のいい奴は手を抜き始め、中には「文句あるか」という目付に豹変してしまう番長格がいたことを記憶している。

実習の成果として「製図」の提出があり、A・A′・A″・B・Cの採点をして作品が返却されるのであるが、私には一度も返却がないので先生に聞いたところ「お前の作品は後輩のために教材として保管している」ということで安心したことが思い出された。

三、恩師

私にとってすべての先生が恩師であるわけだが、特に神庭先生から受け取った「神庭道場」の念力は、私の体に染込んでいて気が滅入る時思い出し恩師として偲んでいる。

四、勤労奉仕

(1)北海道援農奉仕

19・3・7　閣議で学徒勤労動員の通年実施を決定

出動地　北海道河東郡音更村（現在は音更町）

期間　19年5月下旬→8月上旬（三ヶ月）

農家一戸当り二人一組で寄宿し、その家の農作業に奉仕するものである。私は椎茸栽培の手伝いの都合で不参加を余儀なくされた。帰校後の土産話は、

1、狭い木曽谷から行って、はるか地平線まで農場が続いている広大さ

2、広い道がまっすぐに続いてこれまた雄大なり

3、内地の学生で道産娘にもてたこと

4、人柄がおおらかであったこと

この内3、4、の意味は大きく、前年の川上郡標茶町（四十二回生）の場合もそうであるが、あちらが（土地柄か道産娘かは?）好きになってしまい、援農奉仕体験がきっかけで長男でありながら北海道へ転勤永住してしまった人がいた。

私のお袋を通じてその人の母親から話しがあり、私にも帰郷を促すよう頼まれたことも記憶している。

(2)木曽谷御料林奉仕

出動期間　十九年十一月→二十年八月十五日

出動地　木曽地方帝室林野局管内出張所のうち、福島、野尻、三殿、妻籠の各出張所の御料林内に点在する事業所、作業所に班構成で配置され、終戦まで学校を離れて指定された宿泊施設に寄宿して通年奉仕することとなった。

配置された事業所等は図2－1のように国鉄沿線と駒ケ岳側御料林内所在のものであったように記憶している。

作業の種類、伐木事業所では

立木調査（伐採予定林内の立木の測定とその材積の計算）。

架線集材の手伝い（材木＝伐倒木を枝払い寸法に切った材＝の、つり上げ、つり下ろし作業の信号＝始めてよい、離れろ、動かしてよい、止めろ、下ろせ、受け取れ等の合図＝を旗振りで知らせる作業）。森林鉄道の保線作業の補助。

貯木場では山から林鉄で搬入された材木の検知（寸法の測定、材積の計算）、保線の手伝い、機関車運転の手伝い等。

分担区苗圃では、床替の手伝い（苗令別撰苗、根切り、雑用等）。

また南の方では「松根油の採取」等が行われるようだ。

図②－1　木曽谷における御料林奉仕先

事業所等／出張所	伐木事業所	貯木場	苗圃	分担区
福島	大柵 黒石			
野尻	伊奈川	野尻 須原		須原
三殿	柿其	三殿	大原	三殿 柿其
妻籠				蘭

いずれにしてもこれら作業は、基本的には補助作業であった。一ケ所に長期滞在でなく、政策的に移動があったと思うが、私の場合、福島の黒石事業所で、主任が四二回の青木道一さんの厳父であられたことを記憶しており、次の記憶は、伊奈川か、柿其かはさだかでないが、三七回の木村正さんがパリパリの技手補の主任であったことが思い出される。

いろいろと指示を受ける中で「自分も御料に入れば、こんな仕事につくのかな」と思ったことや、事業所の物資係の人が生徒にタバコをくれるので喫煙者が心配になり、係の人に「タバコをくれないよう」頼んだ事、そして、大豆の入った「ご飯」を腹いっぱい食べられたときの感触は、別世界のように思ったことを憶えている。

五、教練

この学科は、私は常に一〇〇点であったので何も苦はなかったが、古い三八式歩兵銃の現物（実銃といった）を与えられ、小柄な私は腕も短いので甲種合格した者の使う実銃は重くて困った。特に、寝撃ちや匍匐（ほふく）前進のときは銃を支える両肘が痛くて放り出したくなるつらさであった。小さい生徒のための木製の軽い銃を持った生徒がうらやましかったことと重なって思い出される。

配属将校は林陸軍中尉で、何度か呼び出されて「兵役志願」を詰め寄られた。しかし、私の父は日蓮宗信者で敗戦論者であ

ることを知っていた私は、家に帰ってそのことは言いにくく、中尉との間で困惑したが、のらりくらりしている中に中尉が南方へ応召となり、事無きを得たことを記憶している。

六、終戦

「玉音」八・十五正午ラジオを通じて「終戦の詔書」を放送。私にとって玉音をどこで聞いたかは定かではないが、奉仕隊という集団であったから、ラジオ施設のある最寄の野尻、須原、三殿の貯木場あたりにそれぞれ引率集合されて、御料の従業員らと一緒に聞いたと思う。

私はただ空しく「終わったか」と聞いたような気がするのみで、これからの世はどうなるのか、自分の将来はどうなるのか等の具体的な不安は、学校に帰って通学するようになってからであったと覚えている。

七、戦後の学校事情

学校当局もガタガタであったと思うが、とにかく戦争に関係ない林学関係の原論的科目だけは、今までの遅れを取り返すべく神庭先生を中心に継続努力され、遊ぶ者は放っておいて必死で勉強したと思っている。

その中でも、英語担任だけは水を得た魚のように元気よく雑学をしゃべっていたように記憶している。こうしている中に三月となり、進学組も決まり私も御料局就職の内示を得ることができ、卒業となって一〇〇名が巣立った。

※昭和十八→二二年度間は校誌等資料焼却皆無の中、拙文をご賢察いただきたい。

この原稿をまとめるにあたり、北信在住の四三回生（本南清人、小幡文顕、水野直、上野佳宏）各位には、忙しいところを快く長電話にお付き合い下され、貴重な感触を与えてくれたことに深謝いたしたい。

（了）

御料林への勤労動員

四三回　今井　弘幸

北海道音更村への援農から帰って間もなく、今度は御料林へ勤務奉仕に行くことになった。数名の仲良しグループに分かれて、それぞれの伐木所等へ配属された。

私は野尻駅の真向かいにある長通伐木所へ行くことになった。いろいろの仕事をさせられたが、一番多くやったのは保線の仕事である。「旦那」と呼ばれていたその道のベテランと一緒に森林鉄道を見廻り、枕木を入れかえたり、石を入れたり、貨車やガソリンカーが事故なく通れるように整備するのである。

野尻出身の細田旦那さんと一番多く仕事をしたと記憶している。伐木された木の検尺にもよくかり出された。伐木され玉切られたヒノキの大木の太さを旦那が検尺し、それを紙片に記録

していくのが私の仕事である。

旦那が何尺何寸と呼ばれるので、それを復唱しつつ間違いないように記録していく。その様子からこの仕事は「ウグイス」と呼ばれていた。

樹齢三百年以上もあろうか、見事なヒノキ材は集材機をあやつる機械屋といわれていたお兄ちゃん達によって、林鉄の終点に集められ、そこから台車に積まれガソリンカーや木炭車によって野尻駅まで運ばれ、やがて列車に積まれ都会に送り出されていった。「飛行機や造船の材料になるってよ」と言われていたが、本当に役立ったろうか、名古屋あたりの工場に置かれている中に空襲に会い焼失してしまったのではないか、もったいないことをしたものだと今にして思う。

二回程死に目に会った。一つは木炭車の一酸化炭素中毒。当時ガソリン代わりに木炭を燃料にして走っていた木炭車は、朝早く行って木炭をがんがん燃やして熱量を上げておかないとスムーズに走れない。

いつものように一人で車庫へ行ってやっている中に、今で言う一酸化炭素中毒になり人事不省で倒れてしまった。間もなく後から来た人々に助けられ事なきを得たが、もう少し時がたっていたらあの世行きであった。

もう一つは、ガソリンカーに乗っていた時だったが、突然線路を支えている支柱や桁が折れてガソリンカーもろとも二～三メートル落下してしまった。

幸い落ちた所に大木が横たわっていて、それに支えられて谷底まで転がり落ちずにすんだが、もしあの大木がなかったら、確実に死んでいたはずである。

勤労動員中に事故死した級友もいたわけで、正に死と隣り合わせの仕事を黙々とさせられたわけである。

時期は忘れたが、三月頃であったろうか、今度は与川伐木所へ配置転換になった。長通伐木所と違ってまったくの山の中、自家発電の装置が事務所の横にあり、かろうじて電灯のある生活ができた。

仕事は同じようなものであったが、集材作業などが加わり危険度は増していた。事実、東京から動員されていた大学生が一人、集材作業中ワイヤが切れてそれに巻き込まれて即死した事故があった。

一人息子を亡くしてなげき悲しむ母の姿を葬儀の日に目撃して何とも言えない気持ちになったことを思い出す。

長通伐木所では感じなかったが与川では食糧不足が日に日に深刻になり、御飯というと大豆の中に米粒があるような御飯で、しかもドンブリにこそっと盛られているというみじめさといったらなかった。育ち盛りの年頃、しかも現場まで一時間も歩いていく山中の重労働ときてはたまったものではない。

空腹に耐えかねて、朝現場に着くとすぐ昼の弁当を食べてしまい、昼は水を飲んでがまんするという日がしばしばだった。楽しいことは一つもなく、ただただ空腹に耐え働いた与川で

あった。

八月十五日の夕方、現場から宿へ帰ると炊事のおばさんが、「日本が戦争に負けた」と言ったので「ウソツケそんなバカなことがあるか」と敗戦を信じない私達だったが、夕食の時所長さんが涙ながらに語ったことにより現実のものとなった。戦争に負けてこれからどうなるか、さっぱりわからないまま、山を下りてきた。

木曽山林学校に学んで三年間、しかし本当に落ちついて学んだのは一年の時だけ、二年からは勤労奉仕の明け暮れで、三年生の八月終戦、戦後もほとんど授業はなく、時が来たので卒業になったという三年間だった。

戦時下の非常事態と言えばそれまでだが、仮に学び得たものはなくとも、学校の伝統である「質実剛健」の気風だけはいつしかしっかりと身について、それが卒業後の生活の各所には生かされて今日あるを思う時、三年間は決して無駄ではなかったと思うのである。

（了）

学徒動員が残した教訓は何か？

四四回　平田　利夫

一、学業復帰まで

学徒動員は、戦時中は日本全国で行われ、我々木曽山林学校の生徒も学業を捨て、「天皇陛下のために命を捨てる」覚悟で（そのことにはなんの疑問も持っていなかった）、当時の御料林の仕事をやるために駆り出された。そして、毎日働くこと以外の楽しみもなく、まして学問をする暇もないくらいの忙しさであった。

従って常識的にも、客観的に見ても「灰色の青春時代」に半分が割かれる事になって、昭和二十年の敗戦を迎え、山林学校の校舎へ学業復帰して、耐乏生活下の勉強を始めた。

二、実務経験から学んだもの

今、昔を回顧すると様々な思い出が重なるが、我々の行ってきた仕事はすべて無駄であったかとなると、確かに灰色ではあったけれども、反面考えてみると「実務経験」には役立ったことを否定できない。

仕事の内容まで一から説明は出来ないけれど、上松出張所黒沢伐木事業所での経験項目を拾ってみると、主要作業では、機関車の運転助手、集材機の信号手、玉掛け手伝い、目拾い（計測手）、ドンキーエンジンの釜炊き、除雪等があり、雑用（雑役）は、砂焼、共同風呂焚き、薪製作、米搗き、水汲み等ほとんどの女子で出来ない仕事は何でもやらされた感じである。従って得た知識も豊富であった。

上松運輸出張所の修理工場へは、福島からの通勤であり、主な作業は木材運搬車（台車）の車輪抜きで、オイルポンプで一

日百五十本程抜いた記憶があるし、鋳物工場での車輪やブレーキ等の製作にもたずさわった。

これ等の経験は、年齢的に最も知識を頭脳吸収する年代としては頭の訓練と蓄積には欠けたが、やはり多くの知識を吸収したのは確かであった。

三、学徒動員の総括

学徒動員の結果を総括すると、得られたものは一口に言えば「実務経験」であって、多くの実習生がその後の仕事や日常生活の血となり肉となったはずである。

私的にはなるけど、私の場合は一時学徒動員の結果が大いに役立つことになった。

それは長野営林局作業課の生産係長時代に、「全幹集材」という立木を伐倒したまま、集材して、盤台上で造材を行う画期的な仕事を推進した。この時は全国から視察者が来たり、原稿の依頼、映画のシナリオ作り、編集に従事し技術知識を活用出来たことである。

もうひとつは労安法（労働安全法）の規制改正により、集運材作業の安全のために、作業索に安全率が決められたり、主索線下の作業が排除されたり、台付けロープの取り付け等、集材・運材装置の作業に力学を取り入れた規制が行われた。さらには運転手には国家資格のある者でないと仕事が出来なくなって国家試験が行われ、同時に講習も行われた時に実務経験が役立ったことである。

これらのことは、皆にすすめられて一冊の本にまとめ、林野弘済会を通じて出版販売して一万二千部が全国に配布された。一部は英訳されて韓国にも渡ることになった。

四、充実してほしい「実務教育」

以上の経験に照らして、これからの時代の山林高校の教育について考えると、これだ、これしかないと頭に浮かんだのは「実務教育」を充実して欲しいという願いである。

もちろん、この必要性は母校百年の伝統に生かされており、全国で卒業生が有名になったのは、測量に直ぐに使えることが第一であった。

これからは更にそれを一歩押し進めて治山、林道の設計と積算、監督を行える技術を身につけさせれば、更に一段とどこからでも採用されることになるだろうと確信する。

その理由の最たるものは、日本の森林面積は国土の三分の二を占め、林業は採算割れとなっても山は残っている限り仕事は絶えない。山があるかぎり林業は永続する。

これに加え、全国の林業教育校が減少する傾向であるが、各都道府県、市町村では設計と積算の出来る技術者は、いくら設計を民間委託としても必要不可欠である。

積算が出来なければ予定価格も出来ないし、入札執行も出来なければ、仕事にならないで行政機関が機能麻痺に陥るからで

ある。

だから木曽山林としては、この行政需要に応えるための実務教育を充実すれば、再び全国的に注目される流れになるであろう。

私は林野庁で、さらには民有林の実務経験をしながら全国を行脚しているから余計にその思いが強い。この転換充実はすぐにでも出来そうである。

五、将来への展望と課題

さらに将来を展望すると課題は大きい。一つの提案となるだろうし、池の中に一石を投じる中身であるが、その理由と展望は次のようになろう。

二十一世紀では少子化がますます進んで、今の山林学校の定員確保は出来なくなる情勢を踏まえ、既に学内検討は全国募集の体制に移行する方向を出されていることには敬意を表したい。

私はさらに飛躍して中学校から高校の一貫教育を全国募集して全寮制とし、進学したい人は長野林業大学へつなげてはどうかと考える。

大変に難しい課題ではあるが、今後二〇年までには実現して欲しいと願っている。

もちろん教育内容は前記四に示したように「職場ですぐに使える技術者」で実務教育本位であろう。

世の中はよいアイデアがあっても実現にはいろいろと苦労することも知っているので、この課題は多くの理解者を必要とするであろう。

資本装備は行政法人も可能だろうし全く望みが無いとは言えない。教育委員会等行政の理解を得ながら、地元の町村との調整を図り、「蘇門会」が推進役を買って出る場合もあると考え、この問題がさらに進展することを期待している。（了）

歳月は茫々たる彼方に
――寄宿舎生活のことどもなど――

四四回　田中　欣一

私たちの時代背景

私たちの時代背景であった「ゼイタクは敵だ」、「月月火水木金金」、「一億玉砕」から「一億総懺悔」「新生日本」への時代に転換した。

私が木曽山林に生徒としてお世話になったのは、昭和二〇年（一九四五）八月十五日、太平洋戦争が終戦という日を迎えた年の前後であった。敗戦でなく〝終戦〟の二文字が紙面を大きく飾ったことに、少年ながらも戸惑いを覚えたが、敗者であっても国民感情としては、それが詭弁であることを承知しながらも、どことなく安堵の思いが手伝って、戦後五十余年経た今日なお、〝終戦〟は巧みにまかり通っている。

いずれにしても、アメリカを主とする連合軍の前に、大日本帝国は惨敗した。私は思想も教育も政治も生活も、すべては根底からの大変革を余儀なくされた日本国最大のいわば未曽有の激動期に、多感な少青年時代を木曽の地で過ごした。

歌は世につれ世は歌につれ

歌は世につれ世は歌につれ、とはよく言ったものだが、敗戦のその日まで私は軍国少年そのもので、

・若い血潮の予科練の　七つボタンは桜に錨（荒鷲の歌）
・花もつぼみの若桜　五尺の生命ひっさげて（あゝ紅の血は燃ゆる）
・銀翼連ねて　南の前線（ラバウル航空隊）

などなどをありったけの声を出して歌っていたが、敗戦によって日本の空は虚脱感におおわれ、疲弊この上なく、ボロをまとい、空腹をかゝえ、シラミにくわれながら、みんなヨロヨロと歩いていた。まだ硝煙の匂いがいたるところに漂い、戦闘帽以外に帽子はなかったような時代であった。そんなときに流行ってきた歌が、

・今日も暮れゆく異国の丘に（異国の丘）
・赤いりんごに唇よせてだまってみている青い空（リンゴの唄）

であった。リンゴの歌はかつてなかった新鮮なリズムで、多くの人の心をとらえたものである。

あゝ腹が減ったなにか食べたい

私の木曽山林学校時代は、何かといえば「あゝ腹が減ったなにか食べたい」そんな思いが目の前の全てであった。

しかし、そんななかでも、戦いに敗れたことの、重苦しく腹の底からしぼり出すような悲しみはどうしようもなかった。

でも「負けるべくして負けたのだ、これでよかったのだと」自らを鼓舞するような、新しい時代がやってきたのだという期待感のある喜びも生まれてきた。

こんな混濁と惑乱と清新の思想は、何もかもがいっしょくたになって、一日にして日本の空を覆い、日本人はかつて経験したことのない覚醒を促されたのであった。

そして、それは木曽谷をも、木曽山林学校をも、その寄宿舎の一室をも、怒涛の如き速さと力を持って埋め尽くしたのであった。

王滝村で玉音放送を聞く

私たちは寄宿舎の薄暗い電灯の下で、鬱屈したまま展望の開かれない未来について、ヒソヒソとボソボソと語り合ったもの

である。

昭和二〇年八月十五日の正午、私は勤労動員の仲間たちと、王滝村の大鹿にあった森林鉄道の保線区の一室のラジオの前に、どこからともなく集ってきた大勢の大人たちと、いわゆる玉音放送を聞いた。

その日は今日でも語り草になっている、うだるような暑さの日だった。雑音でよく聴き取れないラジオから、天皇陛下の「忍び難きを忍び、耐え難きを耐え…」は辛うじて聴き取れた言葉であった。

居並ぶ正座の人々の肩がふるえ、嗚咽が小波のように広まるなかで、居たたまれなくなった私は、停車場に何台もあった木材貨車の陰に行って哭いた。

人々はガックリ肩を落とし、もはや為すすべを知らず、ことばを失い方途を失い、軍国少年の夢は一朝にして潰え、その感情はそのまま寄宿舎の一室の空気を支配したのだった。少しでも暑さから逃れるために、ズボンの裾をまくりあげていると、藁ぞうりを履いていた素足の脛に、ノミが幾つとなく飛び跳ねるのを感じながら、軍国少年であった日々が、何と空しいものであったかに気付かされ、今や取り返しのつかない日々への愛惜の思いが募るにつれ、慙愧の臍を噛んだのであった。

戦前・戦中と戦後の狭間の中にあって、時代思潮の変貌について行けなかったり、抵抗・反動・やぶれかぶれ・左翼・右翼など、それらごちゃまぜの坩堝（るつぼ）の中で、衣食の絶対不足に礼節はすたれ、不穏な行動が目につくようになると、百鬼夜行の末世だと歎く教師や、不和雷同と怠惰をたしなめ、自らを恥じよと壇上で絶句しながら訴える教師もあったりした。

私もまた、混沌の時代に流され、溺れ、模索し……そんな中での学校生活であり、寄宿舎生活であった。以下、その寄宿舎生活のことどもの一端を記してみたい。

寄宿舎生活のあらまし

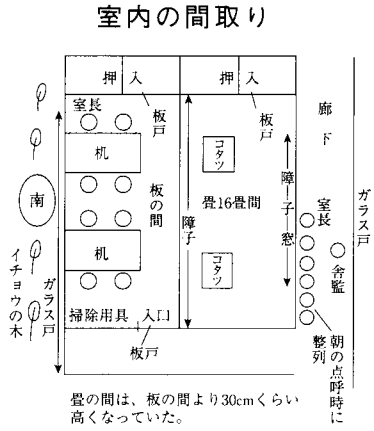
最初に寄宿舎の平面図と室内について図示（図2－2）しておく。学校とは渡り廊下続きで、南棟は校庭に面していた。南棟と北棟は共に二階建であったが、二階については一階と同様であり省略する。記憶ちがいがあると思うが、まあ当たらずとも遠からずというところでお許しを願いたい。後世、何かの参考になるやも知れず、という思いを持って記した。記述の大方は敗戦前についてのものであるが、食糧事情や市岡先生についてのものは、戦後にまたがるものもある。

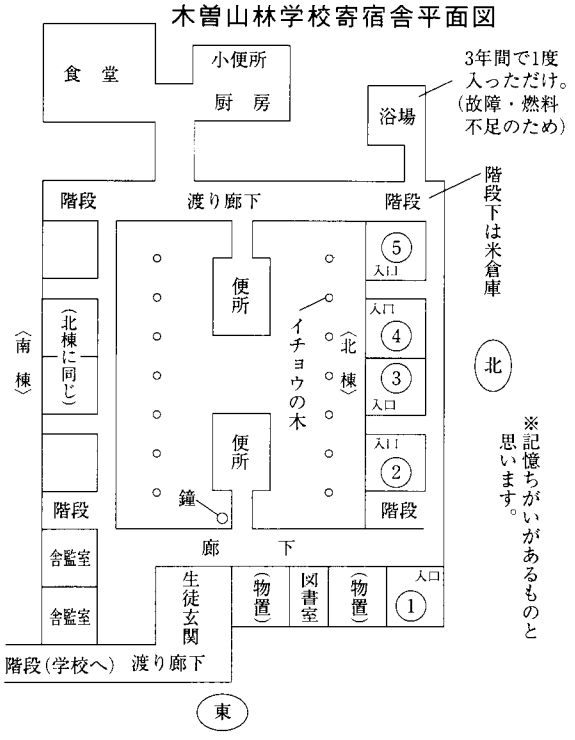
生活の様式　キビキビとテキパキと

1、何をするにもダラダラとは許されず、大きな声で「はいっ！」と返事をする。テキパキと素早く、礼儀正しく。

2、道を歩く時は、二人以上の場合は二列縦隊で歩調をそろえて歩く。上級生に会うと挙手の敬礼をする。教師に会うと「歩調とれ、頭ァ右っ！」の号令をかけて挙手の礼をする。

図2－2





北棟・南棟は共に2階建。2Fについては略。
昭和20年当時は寄宿生用として13室が当てられていた。
1室に6人～7人が入室。室長・寮長を置く。
朝の清掃が徹底していて、舎内は清潔であった。

行き過ぎたところで「なおれっ！」の号令。号令は前列右側の者がかける。

3、朝、登校時には生徒玄関で脚半（ゲートル）を着用する。

4、用事等で他室訪問の際は、ノックをしてから入室し、入口で「第十号室田中欣一、○○さんに連絡があって参りました」というように告げる。

5、娯楽・遊びに類するもの一切なし。テニス・野球・卓球・バスケットボールなどボールを手にしたことがなかった。

6、起床・食事等の合図はすべて鐘をもって伝える。（鐘の位置については、図2－2を参照）

7、町の銭湯へ行くなど、通常は下駄。靴は容易に入手できず。もったいないので大事にした。靴下の着用は冬季にもなし。勤労奉仕中、作業は冬も素足で穴の開いた地下足袋で通す。あるとき、どうしてその気になつたかは思い出せないが、一人で桟・寝覚の床へ歩いて行った事あり。往復下駄。

8、朝、登校前にはコタツ布団をたたんでヤグラに乗せ、ヤグラごと部屋の隅に移動し、灰で炭火を覆い、灰を小十能で押さえる。退校し寄宿舎に帰ったら、直ちにコタツの火を起こす。（冬期）火の用心には万全が期された。

朝の仕事

1、鐘の合図でガバッとはね起きる。

2、布団の片つけ、身支度を素早く整え、直ちに清掃。

3、清掃時の水は真冬でも冷水。氷を叩き割って水を汲んで来る。主として一年生は雑巾がけ、二年生は箒、三年生ははたきと片つけをした。清掃時間は約十五分間だつた。皆飛びつくようにして無言で作業した。一年生の中には冷水のため霜焼け、皹、指が爛れるものもみられた。

4、清掃が終わると、直ちに上半身裸になって乾布摩擦をしながら自室廊下前に整列。

5、舎監が巡回して点呼を受ける。点呼中は直立不動。室長が「敬礼」の号令をかけた後「第〇号室総員〇名現在〇名異常なし」等の報告をする。舎監によっては「〇〇ッ目玉が動くッ」などと気合いを入れる。

6、その後一年生はお茶をいれたり、上級生の用事を言いつけられたりして座る時間がなかなか持てない。

7、朝清掃がいき届いて、舎内はきれいさっぱりする。

食べ物事情

1、食糧事情は次第に悪化していった。校庭は南瓜畑となり、樹木の苗木畑も野菜・大豆などが植えられた。但し生徒の口に入ったことは一度もなし。

2、講堂は床を剥いで機械工場となり、前庭には地下壕が掘られ、いよいよ戦時体制となる。「本土決戦」が合言葉となる。

3、朝早く演習林に栗飯を作るため栗拾いに行く。演習林には上質の山栗が多かった。

4、演習林にはリョウブの葉を採りに行った。葉を蒸しそれを廊下に並べて乾燥させ、乾燥したものを両手で揉み粉末を作る。それを米とかき混ぜて炊く。

5、当時の朝食は、ご飯は丼に軽く一杯、塩汁、たくあん二切れ程度。昼食は献立表には五目飯とあるも醤油で味つけした程度のもので、丼に軽く一杯。夕食はご飯一杯、塩汁とおかず少々。弁当の場合は大豆ご飯。腰に弁当箱を下げて昼食時に開いてみると、豆飯は固まって弁当箱の隅に三分の一から半分位になっていた。

夏の暑い日、土手に腰を下ろし、足を川水に入れて食べようとした時、誰かが「おいッ、今日はひと粒ずつ食べよう」と言い、思わずみんなが「うん」と答えて食べはじめたことがある。泣きながら食べたように思う。

6、階段下の米倉庫から米を盗み出し、こたつの炭火の上に弁当箱をのせて炊く。炊きご飯の匂いが廊下に漏れないようにするため布団をかぶせて炊く。

7、食べ物が手に入ったら（せいぜい炒り豆程度）、人に見つからないようにこっそり食べる。一番安全な場所はかくし（ポケット）に豆を入れて便所で食べることだった。夜、布団の中で音を立てないように、こっそり食べる者もいたが「あいつは食っているな」は暗黙の了解であった。

8、それ程逼迫した食料事情であったが、鐘の合図があって食

堂でみんなで食べる時は、舎監の長話の後姿勢を正し、戦陣訓の冒頭を唱和した。「第一、敬神神霊上にありて照覧し給ふ…」大根の千切りにしたものが二・三本パラッと塩汁のため茶碗の底に見え、もうすっかり冷たくなっていることが多かった。

上級生のこと

1、上級生は善くも悪くも権威があり、威張っていた。威張るのがよくいて恐ろしい存在であった。

2、しばしば下級生へのリンチ（いじめとは違って陰湿ではなかった）があった。「あいつは生意気だ」「挨拶がなっていない」などの理由をつけて下級生を呼びつけ、集団で怒鳴り散らすことが多かった。

3、私が上級の通学生から受けた実例……鬼無里村出身のY君とある一室に呼ばれ、口々に「態度がなってねえぞ」などと怒鳴られた上、腕立て伏せを「一ッチ、二ィッ」と号令と共にやらされた。私は三十数回でダウン。Y君は四十数回まで続けていた。そこへ寄宿舎の上級生であった高知県出身のMさんが入ってきて「もういいっ！やめさせろっ！」と助太刀に入り、通学生とやり合う。Mさんの度量に敬服感謝し、思わず落涙したことがあった。

市岡先生のこと

1、物理担当の若き教師で、分厚い度の近眼鏡をかけ、顔青白くやせ衰えてヒョロヒョロとして、歩くのも大儀そうだった。衣服に事欠き、袖や胸元は垢でテカテカしていた。食糧難時代の申し子のような人だった。

2、校庭周辺の植えこみの中にあった桑ズミを、人目をはばかってこっそり食べていた。授業中、窓からそれをしばしば見かけることがあった。

3、授業は壇上にフラフラして立ち、話すのがやっとというふうであったが、話の内容は斬新で示唆に富むものが多かった。発想が豊かで、板書に味わいがあった。学ぶことの楽しさを教えてくれた。

4、舎監をされたことがあり、夕食後舎監室に先生を訪ねて話を聞く機会があった。広島に投下された原子爆弾の事にふれ、それは極めて破壊力のある新型爆弾であり、恐るべき兵器であることを説かれた。当時、原爆については報道も詳細にはされず、その被害度についても不明に近かった。

5、冬のある日、倉庫から盗み出したわずかな米を持って、福島町にあった市岡先生の下宿先を訪問した。炬燵の炭火にアルミニューム製の弁当箱で飯を炊く。二人で半分ずつ食べた。おいしくて、先生大いに喜ばれた。談ずること少時の後、先生は小さな紙片を取り出すとそこへ「Art is long, life is short. 芸術ハ長ク、人生ハ短シ」と書かれたもの

を下さった。教師間ではどんな存在であったことか。私にはたまらない魅力であった。

6、後日譚。市岡先生は大阪の方から赴任され、山林学校に二年在任して横浜の方へ転任後若くして亡くなられた由。確かなことはわからないが、知性の輝きのある忘れ難い教師の一人であった。

（了）

寄宿生活と勤労奉仕について

四四回　石井　拓男

（寄宿舎のことについては、第四章に掲載したので、ここでは勤労奉仕の部分を載せた。）

寄宿生活と切り離して語れないものに学徒動員・勤労奉仕があった。山林学校の場合当時の御料林へ行くのが主体であった。六月から七月にかけて、学徒動員の嵐に巻き込まれて二年生は北海道へ、三年生は御料林等へ。

私たちも御料林（五人から十人くらいに別れて）へ勤労奉仕に動員された。私たちは王滝村のうぐい川事務所へ行って下刈り作業に従事した。山林の下刈り作業はかなりきついものであったが、宿舎で御飯を腹いっぱい食べられるのが何よりであった。寄宿舎の食糧確保にもこの動員によってある程度のストックができたのかもしれないと、今思えばそんなことも考えられる。

八月に一旦学校へ帰り地獄の寄宿生活が始まった。夏休みがあったのか記憶にない。九月には演習林のクリ拾い等もあった。

十一月になったらまた勤労奉仕が始まり、王滝村のうぐい川事業所へ二十年二月頃まで行った。夏の暑さの中と違い王滝の寒さは格別のものがあった。作業は作業軌道の整備（計画線の測量刈払い・桟橋の架設・枕木敷・レール固定等）、伐採現場・雪橇運搬集結場所の検知・今ではとても許されないトロッコでの木材運搬のブレーキ係等、学校の授業では覚えられない実務をやらされたが、これらは後々のためには貴重な体験となった。

しかし王滝の寒さは大変に辛いものであった。二年生の四月からは熾烈な戦争末期になっていて、王滝の大島事業所へ一ヵ月行って木炭機関車の運転助手をやっていた。

五月からは妻籠の額付事業所に終戦の八月までいた。王滝に比較して妻籠の事業所では、南国特有の明るい人たちに囲まれて天国に近い待遇で、戦争中と言いながら、七月になると事務所の庭で毎晩火を焚いて、その周りで盆踊りの輪ができた。従業員の大部分は十五歳から二十二歳の女性で、仕事や戦争を忘れるような楽しいこともあった。後で聞いた話では、配属された場所によって仕事の内容やら待遇の違いが大きかった。

この勤労奉仕中に痛ましい犠牲者があったことを特に記録したいと思う。岐阜県明智町出身の臼井君が集材作業中に暴走し

た木材に頭部を強く打たれて即死状態であった。場所は妻籠長者事業所で、私たちの隣の事業所であったので夜飛んで行きお通夜に参列した。翌日、葬式が妻籠であり南部方面へきていた生徒が参列した。実に気の毒であった。その後、彼の名前は忽然と消えてしまったが、この百周年を機会に彼の名誉回復を是非お願いしたい。

（了）

思い出の記

四五回　征矢　隆

母校を巣立ってもう半世紀も過ぎ去った。第二次世界大戦の末期、昭和二〇年四月に入学し、戦後の昭和二三年三月第四五回生として卒業した。

偶然にも戦中戦後を通じて在学し、軍国時代の封建社会から戦後の自由と民主社会へ転換する黎明期の、激動と混沌のなかで学校生活を過ごした一人である。

卒業後、五〇年以上を過ぎた現在、在学中の記憶もぼやけかけてきたところであるが、この機会に、薄れ行く記憶を呼び覚ましながら在学当時の思い出を中心に記してみたい。

生家が母校に近い上流にあり、幼い頃から県道下に拡がる校舎群を眺めていた。明治生まれの叔父や兄、親しい従兄が卒業していることもありためらうこともなく進学を志し、戦時中の

●コラム　歌に託して

回想詠

四四回　小川　幸治

上級生と共同所有の歩兵銃朝昼夕の手入れ厳しき
銃口から螺旋の筒を磨くとき冷たきものが背筋を走る
昭和十九年四月入学後、二年生と共有
作業員兵にとられて学徒動員怖ひ思ひし間伐作業
昭和十九年六月大桑村須原の裏山にて
戦ひに繋がる思ひなきままに女学生等と苗圃の草取り
昭和十九年六月大桑村阿寺の苗圃にて
山小屋の梨元宮泊まる夜は発電水路へ落葉除きに
昭和十九年十月上松町赤沢備林にて
発電所工事現場の虜囚等は虚ろな目をして屯してをり
昭和二十年二月頃王滝村氷ヶ瀬にて
学舎に帰りて見れば床を剥ぎ工場となりし教室空しき
終戦となり二十年二年生二学期から学業へ

歌詞文集『蔀戸』（平成元年）より

非常色に塗り固められた木曽山林学校へ入学した。

一、在学当時の思い出

（一）戦時下の学校生活

1、軍事体制

第二次世界大戦における日本軍の敗色は濃厚で、入学時には沖縄戦が始まり、アメリカ空軍B29による日本本土空襲が頻々と激しさを増していた頃である。「本土決戦」「一億玉砕」など、激烈な標語が当然のように受け止められ、我々にも国土防衛隊の別名があつた。

校舎の一部は、軍需工場に徴用され旋盤等工作機械が据え付けられていた。毎日の朝礼は、ラッパの合図で始まり、校長の訓辞は決まって緊迫した戦況と非常時の心構えに触れていた。

スパルタ教育の時代である。軍事教練の時間では、軍人勅諭の暗唱で厳しく絞られ、また先生、上級生に対する敬礼が大変であつた。

挙手の悪さで注意を受けようものなら、いつ怒鳴られ殴られるかわからなかった。まさに「君子危うきに近寄らず。」で、先生や上級生に出会うことをできるだけ避けるように注意していた。

2、晴耕雨読

入学後間もなく、二・三年生全員、戦時下の学徒勤労動員で帝室林野局（戦後は営林局そして現在の森林管理局）の各事業地へ出発した。

我々新入の一年生が留守を受け持った。苗圃の管理から、演習林の植樹等二、三年生の分まで分担し、天気の良い日は実習に明け暮れた。「晴耕雨読」と称し、雨の日は、実習で潰れた学習時間を挽回するため長時間授業が続いた。造林、測量など専門科目の外、国文・漢文・数学・英語・物理・東洋史・西洋史等教養科目が一杯並んでいたが、この時期、英語の授業が行われたことは特筆ものであった。

軍の言論統制令により英語など敵性語の使用が禁止され、学校での英語教育もままならぬ環境下である。林学の術語教育が名目であったことを聞いた。時間割は少なかったが、ローマ字に取り組めることに好守心を持ち単語の暗記に励んだことが夢のようである。

実習で、大平山演習林への植樹は、戦時中の環境を彷彿させる。各自割り当てられた本数の苗木を背負い、鍬を担いで四列縦隊を組み、学校から演習林まで、福島の町内を進軍ラッパと軍歌の連唱で行進した。

今の時代では想像もつかない光景である。同級生の中にもラッパ吹奏の名手がいることに感心した。

戦況は、B29による本土空襲が日を追って苛烈さを増す中、

沖縄は占領され、いよいよ非常事態到来を覚悟せざるを得ない状況にあつたが、鬼の上級生が不在のこの時期を、我々一年生は、比較的伸び伸び学校生活を過ごす事ができた。

3、終戦

やがて八月六日広島へ原爆が投下され、満州ではソ連軍の進攻があり、続いて長崎の原爆投下を知らされたときは敗戦をはっきり意識した。八月十五日、遂に戦争は終わった。

今後はどうなるのか、不安と虚脱感が交錯するなかにも、戦争から解放された安堵感や喜びが大きかったことを覚えている。昭和二十年八月、夏休み中の出来事であった。

（二）戦後の学校生活

終戦後、アメリカを主とする連合国の支配下におかれた日本に対する占領軍最高司令部（ＧＨＱ）は、強力な占領行政により、自由と民主化施策を進めているが、教育の自由化はその最先端にあったものと思う。

九月から始まった第二学期は、勤労動員から帰った二・三年生を含め全学の生徒で埋まった。

ＧＨＱの政策を反映した指導によるものか、生徒全員による集団討議の訓練等もあり、自由と自主の模索を反芻しながら、戸惑いつつも比較的平穏に新しい秩序に生まれ変わったと感じている。

戦時中徴用された校舎も復旧し、一学年を終える頃は学習環境も整ってきた。しかし、戦争に打ちのめされた戦後の経済は、悲惨であった。生活必需品に事欠き、特に食糧事情は最悪であった。

インフレは容赦なく進み、国民生活は窮乏のどん底にあった。混沌とした日本経済に活況をもたらしたのは昭和二十五年から続いた朝鮮戦争による特需景気で、それまでは何にしても大変な生活苦にあえいだ。

このような環境下ではあったものの、混沌とした一学年時代を除けば、二・三学年の二年間は比較的落ち着いて学習に励むことができ、この混乱期を考えれば、まだ幸いであったと思っている。

1、授業の思い出

「造林」…神庭先生による看板科目であり、育苗から森林造成まで三ヵ年にわたり幅広い授業を受けた。

樹種の特徴や主要林業地と施業の特徴などは素養として後々まで役立ったものである。温厚な先生の独特の語り口調とともに思い出深いものがある。

「土木、測量」…土木と測量は、三角関数や構造力学に関わるので神妙に取り組んだ。特に土木は、熱血的な授業で有名な上島積善先生であった。

先生は、戦争に召集され戦後暫くして復員してきた。戦後の与えられた自由のなかで安逸を貪っている我々の生活態度を苦々しく思っていたようである。機会ある毎に、自由と責任、他人への思いやりなどを厳しく説教された。

今でも、裏山演習林での周囲測量や興禅寺山での林道設計の実習と製図、橋梁設計での曲げモーメントに悩やまされたことなどが思い浮かぶ。

「林産化学」…先輩である奥村英吉先生から木材の化学的利用について、製炭から紙パルプ製造までを学んだ。

当時、樹を植えて育てることが林業と思い込んでいたので、林産に対する意識は低かった。パルプに至っては想像もつかなかった。

王子製紙中津川工場を見学して、初めて目にした装置産業の規模の大きさに仰天した。林業に関連する領域の広さを初めて体験するとともに「百聞は一見に如かず」を実感した思いが残っている。

先生からは数学も学んだ、微積の世界で難問に手こずる我々に「何だ、こんな事も解らないのか！」とライオンの咆吼にも似た叱声が飛んだ。卒業後も、折に触れお会いしている懐かしい先生である。

「体育」…戦後の虚脱状態も抜けきれない昭和二十一年、日体大出たての新任、竹内清先生が着任した。

全く空白状態にあつた体育を短期間の間に、バレーボール、バスケットボール、サッカー、テニスほか陸上競技に至るまでスポーツの基本を教え込み、秩序を整えられた気迫と行動力に完全に脱帽した。

体育で鍛えた精悍な風貌と併せ、寒中の体育館で凍るような寒さの中を、ランニングとパンツの真夏スタイルで我々を指導した姿が忘れられない。

とかく専門学科のみに気を取られて、教養科目を疎かにする傾向があって、教養科目担任の先生から「君達は教養科目を馬鹿にしているが、将来必ず後悔するときがあるぞ！」と叱られた。今なお、身に沁みる一言である。

2、新制高校への切り替え

ＧＨＱの占領政策により学制が改められ、昭和二十三年四月から新制高校に切り替わる事となつた。

我々は旧制で卒業するか新制高校へ進むか二者択一を迫られることになった。当時としては、実社会へ出るならば一年でも早いほうが良いとの先生の薦めに従って旧制で卒業し営林署へ就職した。新制高校へは約半数の同級生が進んだ。

このような波乱に満ちた三年間であったが、我々級友のきずなは固く、卒業後間もなく生まれた羊午会と称する同期会を、この頃では毎年一回は開催し互いに消息を確かめ合っている。

二、今も生きる山林で学んだこと

就職先が、林業を営む現業官庁である。膨大な全国組織の中で、奥行きと幅広い仕事の大要をつかみ、自分の位置づけを理解するまでには相応の時間が必要であった。

養成期を経て経営管理の現場責任者、部門責任者と経験を積み重ねる中で、母校で学んだ素養が直接あるいは常識的に役立っていた。

やがて本庁において林業振興及び木材関連行政窓口の一端を担い、国内及び国際的に比較的幅広く取り組む機会を得た。

その後の第二の職場は、木材、木造住宅関連の技術開発を主とする公益法人で過ごし、現在はその延長線上とも言える国産材の需要推進に関わる業務に携わっている。

振り返ってみると、厳しくも充実感に満ちた仕事人生であったが、母校で学んだ意識が、潜在的に精神面の支えになっていたことを今も感じている。

三、山林高校に期待すること

国内の森林は資源の充実期を迎えているが、健全な持続を図るためには、計画的な木材生産が必要であり、循環を担って需要に結んでいる林産部門の充実が重要な鍵となっている。

需要の主要分野は住宅資材関連であるが、昨今、建築基準法の性能規定化と住宅の品質確保促進法が制定されたことにより、製材品等木材製品の場合も、他の工業資材同様に品質・性能に要求される条件が厳しくなり、製造者責任が重くなることを予想している。

営業面の対応に於いても同様に、相応の知識を要することなど、従来の加工・流通体制を揺るがす大きな変革の波が押し寄せている。

地域では、県産材の振興を図るための資本装備に力を入れているが、一方で、時代の流れに対応できる人材配置がないと折角の投資も効果を発揮出来ないことになる。今後、川下の充実を図る上でこの部門を担う人材の教育が必要であり、加工施設、木材乾操、材料力学、化学材料等に関する素養を身につける教育が急がれていることを痛感している。

この面の教育を、山林高校における現在の林業科、インテリア科に加え、仮称木質材料科または木材工業科として設置されるならば、林業に関わる川上から川下まで一貫した人材教育が可能となり、これらの人材を輩出する効果は地域林業の振興に大きく寄与するものと考えている。実現を期待し、あえて提案する次第である。

（了）

昭和二〇年八月十五日の記憶

四五回　鈴岡　利男

この日は夏の太陽がジリジリと照りつける暑い日であった。我々の四五回卒業生は昭和二〇年四月に入学したが、満足な服も無く、食糧も貧しく敗戦の色濃いことも知らず、ただ戦争に勝つ心構えのみで、勉強した記憶もないまま勤労奉仕に明け暮れていた。

八月十五日、この日は夏休みであったが福島町の数人で炭焼小屋の整備のため学校へ来ていた。十一時頃、神庭先生が「今日十二時に天皇陛下のお言葉がある」と云われ、十二時に職員室の廊下で放送を聞いた。

しかし雑音も多く何を話しているかわからず炭焼小屋へ戻って作業を続けていた。神庭先生が来て「どうも戦争に負けたらしい」と言われ、作業を中止して帰宅した。

ちょうどその日は小学校の同級会があり、福島小学校に集まっていた。開会の言葉もなく先生の話があった。先生は涙を流しながら「日本は戦争に負けた。日本は悪いことをしたのだから君達は米国へ奴隷として連れて行かれるかも知れない、その時は冷静に行動するように」という内容だった。

皆ポカンとして何も食べずに解散した。友人数人で山へ行って持参した弁当を開き、「そのうちに殺されるかも知れない」などと話した。

これが終戦の日の記憶である。それから相当長く学校は休みだったと思う。十月に入って復員して来た年齢の高い人が入学して来た。学校は軍事工場となっていて床はコンクリートが張られ旋盤機が置かれていた。

何故かグライダーまで置いてあったという。いつの間にかこれらが片付き、加速度的に新しい文化が入って来たように思える。

今考えると戦争の残影としては食糧のなかったことくらいで学校内は校歌が「み国の五木」に改正され、制帽にジャバラを入れ、自治会が結成され、映画観賞会、討論会、演芸会等も開催された。

自治会は充実していて部も数多くあった。中でも相撲部は強く全国大会にも出場した。そのためか応援歌はよく練習させられ上級生のシゴキの場でもあった。

戦いに敗れ、これからの日本はどうなるのかと心配した我々の青春時代も案外早い期間で円滑に改革が行われ、民主主義という新しい畑の中に溶け込んで行ったように思える。

現代の高校生を見つめながら今思うと、八月十五日を境に戦争という時代の考えを捨てて何か新しいものへの目標を求めていた気骨と協調性があった。

私の人生において高校時代は色濃い人生の一頁であり、良い思い出である。

終戦・卒業より来し方五〇年を振り返り

四六回（高校一回）　山口　毅

あの終戦後の激動の時代に卒業して五〇年、私達の級（旧制卒は四五回、新制卒は四六回）は昭和二〇年四月に百名程が入学し、昭和二三年三月に五九名が旧制中等学校卒で、昭和二四年三月に四七名が学制改革による新制高校卒という過渡期の変則的で二ヶ年にわたって卒業したのである。

就職も進学も二ヶ年にわたり、あの激動の時代だったから卒業時に就職決定した者は少なかった。卒業から三～四年経過した頃の進学、就職状況を把握してみると次の通りとなっていた。

進学　旧制高農へ（昭和二三年）二名
　　新制大学へ（昭和二四年以降）七名

就職　国有林の営林局署へ　五七名
　　小学校などの教職員へ　五名
　　県庁関係　三名
　　民間会社等へ　十～十五名
　　その他自家業へ　五～十名

これから見ると半数以上の者が営林局署という異常な状況である。営林局署は木曽谷を主とした長野営林局管内、北海道、名古屋、東京営林局管内である。

これには当時、国の林業機関である林政統一が昭和二二年に実施されて、御料林、北海道有林などが国有林に統合され、国の特別会計制度の基に戦後の復興資材としての木材増産計画が進められた。

国有林事業は拡大の一途をたどり林業技術者の要員が必要となり、いまだ公務員試験制度が確立されていなかったから、地域的に木曽谷で林業技術者として本校卒業者の現地採用が行われた背景があった。

それにしても営林署職員の養成機関の如く本校生徒が多量に営林局署に就職することとなり、卒業以後三～四年を経た時点で私達卒業生の半数以上が就職したことは異常なことであった。

その後、国有林事業で木材生産、造林、林道土木、治山の各事業団の技術者集団の一員として活躍し、大部分の者が国有林事業で定年まで勤務し終えた。

進学については、終戦後の学校事情から学力は低く、進学希望者は独自に受験勉強に努力し、新制大学になってからは推薦入学制度もなくなった中で新設の国立大学の林学科方面に進んだのである。

教職員方面に進んだ者は五名と多かった。木曽山林卒の学歴だけで苦労したことと思うが、独学で教職員として県下の小学校に勤め得たことには敬意を表したい。

ここでM君のことを述べておきたい。彼は卒業後東京に出てさらに進学勉強して中央大学教授に栄進した、数年前に現職のまま物故したことは惜しむところだ。

民間会社、県庁関係方面に進む者、その他自家営業をする者など各方面へ、それぞれ厳しい社会情勢の中へ進んだ五〇年を振り返り「木曽山林」がどのように影響を与えたか、各位の全体像を眺めながら回顧し総括してみる。

私達は、昭和十二年支那事変勃発の年に小学校入学、昭和二〇年に木曽山林入学で軍国少年として育った。林業を学ぶ動機で入学したとはいえ、強制的軍人志願・軍需工場への徴用回避、さらには復員軍人生徒の入学もあり、学校に身を置くことにより、社会の動乱を避けていた面もあった。

戦中、戦後の激動の時代を木曽の谷間で過ごし得たことは、青少年期を誤りなく過ごすという面から見れば安全であったかも知れない。

卒業後の生き方を方向付ける就職問題は過半数の者が営林局署に職を得るという事情にありながらその後の動向を見た時各自各方向で活躍した姿が浮かびあがる。

戦後の復興、高度経済成長時代と共に歩んで働き、バブル経済崩壊と共に現役から去るという巡り合わせの年代であるが、級の者全員を眺めて見れば、皆々大過なく卒業以来五十年を生き抜いて現職を去り余生を楽しむ年代に入っており、まあ華々しい人生ではなかったかも知れない。

しかし今日を迎え得たことの原点は、あの激動の時代を「木曽山林」で学び生活し、就職し、友を得、職場では同窓の先輩に恵まれたことなどにあったと考えるところである。

私たちは、戦後五〇有余年林業界や他の社会で、官民共々の世界で、底辺での働きではあるが、何らかの貢献ができたのではないかと自負するものである。

これも本校における学業と先生の指導、同級生の友情、学校の伝統などの総括ではないかと思うのである。

なお、私達同級生は羊、午歳生まれであるので、四五回にからみ「羊午会」と名付けて、卒業以来十回余に及ぶ級会を催し友情を温め、あの激動の時代における学生時代の思い出を語っていることを付記しておきたい。

（了）

思い出

四六回　松岡　英吾

学校創立百周年おめでとうございます。

光陰矢の如し、と言われるが、年月の過ぎ去ることの何と早いことか。昭和二四年に卒業してから既に五二年、半世紀を経ているわけである。従って記憶が定かでないことが多いが、入学当初のこと、厳しかった上島先生のことを記して私の役目を果たしたい。

入学当初のころ

過日引き出しを整理していたら、半罫紙に万年筆書きの次の

ような入学許可書が出てきた。

入学許可書

右者本校第一学年ヘ入学ヲ許可ス

昭和廿年拾月六日

長野県木曽山林学校長　　渡邊　勇

追テ十月八日ヨリ出校スベシ

十月に入学許可となった理由は、私が軍隊帰り（海軍少年通信兵）だったからである。私と同様十月の入学者は、山口毅君、岩原善幸君、丸山達雄君（上記三名は陸軍少年飛行兵）山本勉君（海軍飛行予科練習生）の四名であった。

上級生の中にも幾人かの軍隊帰りがいた。また一級下の青木、邑上、梶原の三君もそうであった。いずれも軍服に戦闘帽姿で登校していた。それ故一目で軍隊帰りであることが分かった。

私は軍隊帰りという特別な意識はなかったが、当時は軍隊帰りで目標を見失い、自暴自棄となり警察沙汰を起こす人もいた。予科練帰りに多かったのか「予科練くずれ」などと称し、特別な目で見られていた。

それ故軍隊帰りは、入学当初警戒的な目で見られていたのかもしれない。しかし、軍隊帰りの私がこれは軍隊以上だと感じたことが一つあった。

全校生徒が校庭に集合する時、校庭の端の方にたむろしている三年生に向かって、校庭の昇り口で脱帽し「お早うございます。」と最敬礼に近いおじぎをするのである。すると三年生が「おッー！」とどら声を張り上げる。

私は軍隊とは違った異様な威圧感を受けた。終戦間もなくであり、まだ戦時中の習慣が残っていたのかもしれない。民主的な考え方が遂次浸透したのか、二年生になる頃はそんな光景は見られなくなっていた。

当時、体育館や川沿いの理科室のあった棟は床がはがされ、旋盤と思われる機械が設置されていた。

戦争遂行のため、校舎の一部が工場になっていたのである。記憶が定かでないが、機械が撤去され元通りの校舎になったのは昭和二十一年度中だったのかもしれない。

何しろ終戦直後のことで、政治犯の釈放、戦犯の逮捕、天皇の人間宣言、労働運動の激化、農地解放、帝銀事件、等々混沌とした社会情勢が続いていた。

物資も乏しく、教科書は新聞紙を折りたたんだ様な粗末な物で、ナイフで切り開いて使用するといった具合であった。しかし、何か自由で開放感があり、今までとは違った日本を築き上げなくては、と希望に燃え、日本の将来像について話し合ったりした。

厳しかった上島先生

当時おられた先生方は、いずれも個性的で忘れられないが、

叱られたことで思い出深いのが上島先生である。

二年生の時のこと、初めて演習林の地図を仕上げ提出した翌日のことだった。「おめーらは地図のかき方も知らんのか。地図はなあ北を上にして書くもんだ。北を下にして書いている奴がいる。」と、私も下組の一員だった。

「徹夜で仕上げたのに！」とくやしかったが、それ以降地図を見る目が変わっていた。有り難い指導であった。

また、私達の班で分担地区の測量を終えた直後、錘を落としてしまった時のことである。班長をやっていた関係上、私が職員室へ参上「先生錘を無くしてしまいました。」と報告したとたん「もう一度捜してこい。」と大カミナリ。

皆で「バルサの奴……」とブツブツ言いながら現地へ戻り、地面に這いつくばって捜したものである。夕方の演習林内は暗く見つかるはずもない。

叱られるのを覚悟で帰校し「幾ら捜しても見つかりませんでした。」と報告すると、先生は低い声でつぶやくように「物はなあ大事にしなきゃいかんぞ。」と一言いわれた。

その一言が私達には効いた。物を粗末にするのを目にすると、今でも先生の言葉がよみがえる。

また、林道設計のレポート提出の期日について「〇日の夜十二時までだ。」と厳しい口調で言われた。当時は「夜十二時まで」とはおかしなことを言うくらいにしか受けとめなかったが、実社会に出て、初めて提出期限を守ることが如何に大切なことかがわかった。提出期限の文字を見ると、必ず上島先生を思い出す。

上島先生は「黙って俺についてこい」とばかりにぐいぐい授業を進められた。私達は夢中でノートを取った。迫力のある先生であった。

「人間何事も気迫を持ってことに当たれ。やるべきことはきちんとやれ。」そんなことを教えられたように思う。

厳しかったが懐かしい先生である。その先生も今は亡い。

（了）

学校新聞をめぐる思い出

五〇回　楯　要

私が入学した頃、木曽福島町内には男子校二校と女子校一校の三校があり、当時三校合同の新聞部を作り機関紙を発行していた。

二年生の時、私は本校の新聞部長となり、たまたまその年が本校創立五〇周年記念の年で、記念事業の一環として校内新聞を発行しようということになり、三校新聞部から独立して木曽山林高校新聞部、を発足させた。

その夏、第四号発行の頃、いわゆる桃色事件が地方新聞に報道された。この一件は刑事事件となって、本校へも聞き込み調

査がなされたので、軟派学生など戦々恐々としていた。

事件の内容は他愛のないもので、夏地元の中学卒業生がキャンプをした時、女の子のオッパイを触ったとか触らなかったとか程度の話であったが、警察の捜査が余りにも執拗にやられたので、神聖な学園を冒とくするものだとして我が新聞部も立ち上がった。

紙面の全面（といってもタブロイド版だったが）を関連記事とし、「男女交際に断」「桃色遊戯はウソ！」という見出しで論陣を張り印刷へ持ち込んだ。

当時、新聞の印刷は、地方新聞の松本支社へ依頼していた。数日してこの支社の編集長から「わが社を誹謗した記事を載せた新聞は印刷することができないので引き取ってほしい」という電話がかかってきた。

私の方も「記事の内容によって印刷を拒否するのは、言論の自由を否定するものではないか」とくいさがったが「とにかく印刷できないからお返しする」の一点張りで、ついに引きさがらざるを得なかった。

しかし、このままでは言論の自由や報道の自由を否定されることになるということで、第五号に第四号記事と全く同じ内容に、新聞部長名で「第4号廃刊」の見出しでコメントを入れ、他の印刷所で発行した。

今思うと、私が印刷する方の立場であったら矢張り同じ理由で拒否したと思う。若かりし頃の、一途な言動に苦笑するほかない。そんな一時代のほろ苦い思い出である。

余談になるが、それから一ケ月ばかりして、この地方新聞の新聞記者が転勤になり、記者と親しかった教師から「荷物の運送の手伝いでついて行ってくれないか」と言われ、同級生と二人で荷台に揺られて、転勤先の臼田まで行き、帰りに小諸城址の藤村の詩碑を懐かしんできた。

桃色事件記事が転勤の原因であったかどうかは、今となっては知る由もないが、ちょっとほろ苦い出来事であった。（了）

勝利を知らない野球部

五〇回　栩秋　一延

なぜ山林高校

第五〇回卒業生は戦後の食糧事情のよくない昭和二五年の入学で、新制中学の第一期入学生徒である。

同級生は新制中学一年から過してきたので、年齢は皆同じと思っていたが、多い人や静岡・岐阜の人もかなり居た。

私の山林高校へ入学する動機は不純であるが、単純である。戦後間もない中学時代は野球の隆盛期で、ジャガイモを食べながら夕方暗くなるまで、学校のグランドで球を追いかけていた。木曽郡の中学校大会には全校あげて応援にかけつけるほどの、盛況ぶりであった。

私は長男のため家の農業の後継を父からいわれ、自分でもその気になって高校は農業高校と思っていたが、木曽からは農業高校へは通学できず経済的に無理かと思っていた。

ところが私はサウスポーでピッチャーもできることから、木曽西高校は当時野球部強化のため、中学校の大会で良さそうな者を学校へ集め、三～四日硬式野球の練習をさせた。

それだけと思っていたところ、十二月頃に木曽西高校の監督達が家まで来られぜひ受験をしてもらいたいとスカウトがあり、同級生に話すと家へも来たとのこと。こんな上手な人ばかりの学校の野球部へ入ればレギュラーになれないと思い、木曽であと野球のできる高校は山林だ、農業高校も家から遠いことだし、とりあえず山林で野球をしようと山林高校を選んだ次第である。

野球部

何とか入学し（入学試験で落ちた人が居たように記憶している）野球部へ入部した。朝の通学は南部の人と一緒でほとんど寝ていたので、特に女学生（東校）は知らない。

帰りは最終列車。学校の授業は何とか受けたが、試合の前日は教室からこっそり抜け出しグランドの桜の木の下で寝たこともあった。腹がへった時は四時間目前に弁当を食べたりした。

四月・五月は一年生全員応援歌の練習だが、野球部は免除された。だから応援歌は野球部の練習をしながら覚えた。

硬式ボールの硬さに慣れる頃には、グローブをはめた右手の甲の紫色の内出血はとれ、どんな強い球にも手が馴れてきた。ピッチャーは毎日ランニングと二百球の投げ込みだ。グランドから黒川方面へ出る道が少し傾斜しているので、そこがブルペンだ、その後フリーバッティングに時々投げた。

部の予算が少ないのでボールを家へ持って帰り繕いもした。合宿は何回もしたタヌキ御殿でマネージャーは食事係だ。監督と夜の語らいや仲間と寝るのが楽しみであった。

木曽西校とは練習試合でなかなか勝てない。それよりも思い出に残っているのは木曽西校グランドで打ったホームラン、ライト側にあるポプラの中段から上をぬけたホームランであった。

それから一年生からピッチャーであることから、私はだいぶ天狗になっていた。ある練習試合で投手交代でセンターを守らされ、わざとセンターフライをヒットにさせた。これには相手チームからも、ブーイングされた。このことは私にはよい目覚ましとなり、野球は一人でやっているものではないと強く反省した。

二年生でエースになり、春の大会が桜の咲く松本県営球場で開催された。野球の盛んな頃なのでどんな組合せでも観客は大勢いる。歓声はすごい、ブルペンではまずまずの調子であったが、一回の表マウンドへ、「プレーボール」第一球をどこへ投げたか覚えていない。

すっかり「あがり」ボールのスピードはない。この時からずっと悩みつづけた。どの試合でもブルペンでは調子は良いが、

マウンドへ上がるとスピードがない。

したがって変化球勝負となる。長いインニングはもたない。五～六回から打たれコールド負けだ。したがって試合のある一週間前には、下痢ぎみになり体力が落ちる。夜はよく眠られない。そんな繰り返しでもあった。

遠征は一年に一回は行った。思い出すのは高遠でいただいた高遠饅頭のおいしかったこと、高遠高校のグランドの試合で私がセットポジションで足を上げた時、女学生徒の声で四人連続フォアボールを出し逆転負けをしたことなどである。

遠征に行けば行った日に一試合、次の日にダブルヘッター（二試合）、これだけ投げれば一日二百球投げ込んだ肩でもまいる。肩の痛みとは三年間付き合ったが、一度は肩の痛くない時に投げてみたかった。

人生のささえ

このように好きで入った野球部で、勝利の楽しさを知らずに苦しさの思い出の多い部活動は、卒業後の人生には大きな花丸であった。

自分の六十年の人生の中で今まで対処した仕事、人間関係は、野球部の頃の心の思いに比較すれば、苦しいとか辛いことなどあり得なかった。何時も前向きで成果が悪くても明日がある、次がある、人には人の立場があると思えば、その人にも何時かは自分の気持が通じる時があると思って頑張ってきた。

人間形成の基となるような多感な高校三年間は、自分の持っている力、自分なりの努力が必ず次の人生に生かされる。高校三年間カットした人生はない。

特に木曽の山の中に生まれ都会の人達と環境のちがいから、人生に対してコンプレックスを持ちやすい人が多いかと思うが、自分は自分なりにできること、今日より明日の方がより良くなると自信の気持をもつことが大切であると思う。

高等学校三年間の野球部での葛藤が、今までの人生を支え、これからの人生も木曽山林に感謝の気持で過すことができるのではないかと確信している。

（了）

思い出の記

五二回　半場鬼久男

山林高校開校百周年に当り、在学当時の回顧をとの依頼を受け記憶を思いおこすと、古い歴史と伝統を持つ学舎が懐かしく脳裏に浮かんでくる。

しかしながら記憶というものは年と共に薄れ行くもので、その薄れ行く記憶をたどってみるに、当時は世相も悪くわが国の最も貧困な時代ではなかったかと思うが、それだけに昭和二七年入学以来卒業までの三年間の記憶が折々よみがえってくる。

まずは、希望と向学心に燃えて入学した頃の学生服と下駄履

き姿。若き時代のダム周辺の時間外活動。それに演習林での測量・測樹・下刈り・間伐植林等の実習。夜を徹しての炭焼きや汗と泥にまみれての苗畑の除草。ノルマとしての薪運び等様々思い出していると、やはり恩師や友達の顔が浮かぶ。

生徒自治会の活動、部活動、さまざまな思い出が頭をかけめぐり懐かしい思い出ばかりである。今では望んでも味わうことのできない、これらの貴重な体験は懐かしい思い出としてだけでなく、これまで歩んできた我が人生の血や肉となり大きな支えとなっている。

卒業以来、約半世紀になろうとしているが、常に身心を以て事に当り、ますます近代化されていく中で新しい姿に脱皮していく必然性が生まれ、自然とその気運が高まり力を尽くしていく、これがわが山林魂ではないかと思ったりしてもいる。

また毎日毎日の生活にばかり気をとらわれがちな私達は、過ぎ去った日々の生活や事柄について常に反省することが必要ではないだろうか。

それは社会の発展過程においても、我々の学校での歩んだ道程においても同様に過去のよい点はさらに伸ばし悪い点は捨て、将来どのようにして最良の方向に育っていくのかを模索し、よりよい安定生活ができるよう努力していきたいものである。

さらに長い歴史を振り返って思うに、我が国の林業に対し専門知識や技術等様々な分野で技能を身に付けた人材の育成がはかられるよう願望するところである。

私も卒業と同時に上京し、木材業を職業とし精神的にも肉体的にも多少の苦労も経験してきた。その日々の集積によって、社会人また会社人としていろいろな人間関係も幅ができ、生活の基盤が徐々に整えられ、サラリーマン生活四二年間を過ごす事ができたと思っている。

これも林産業の知識・技術を駆使できる職場、いわゆる関連産業へ進みえた故に、学校で学んだことが多少なりとも社会への貢献につながったのではないかと実感する。

今までの苦労が今後の人生にプラスになり、高齢化社会に向け心豊かで明るい人生を送り余暇活動ができれば幸いと思う。

母校に対しては、今後の林業教育のあり方について、大きな期待を抱いている。即ち、産業界における著しい技術革新、情報の高度化、経済の国際化などに伴う産業構造、経済構造、就業構造の変化にどのように対応し発展ができるか大きな課題であり期待するところ大である。

木曽という地域の持つ特殊性を見極め、同時に視野見聞を広め、教育に対する社会的期待を裏切らないよう未来社会を展望した創造性の豊かな人材を求める将来像を考え合わせる必要があり、長い伝統の名誉に恥じないよう一層努力されんことを期待したいものである。

また、母校百周年の歴史の重みを迎えることでもあり、蘇門会員の皆様、先生方、在校生諸氏もこの輝かしい伝統を守り、社会に貢献できるよう今後の人生の飛躍を願うものである。

ご健闘を祝しご健勝をお祈り申し上げたい。　（了）

恩師「バルサ」の想い出

五二回　池井　勝行

バルサこと上嶋積善先生は、神庭先生と双璧をなす木曽山林高校の大先生であると同時に、一番おっかない先生だ、ということを入学前に聞き及んでいた。

さて、わたしがなぜ木曽山林高校への道を選んだのか、私事ながら、ちょっと触れておきたい。

我が家の晩餐家族会議では、まず就職が良いとのことである。さらに、もし営林署へ就職ができ、分担区（担当区）主任にでもなれたものなら、それはえらいことだ。広い山があてがわれ責任者となり、サーベルも貸与される。というものだった。

当の本人は、そんな人に出会ったこともないし、見たこともなかったので半信半疑であった。が、誰の作か定かでないが「僕らのふるさと山を守ろう、山の子だ」という標語がふと脳裏をよぎった。「よし！これだ、山を守る人になるのだ」と決心した。

しかし、いざ進路が決まると、拝眉したこともない〝バルサ〟のことが気なってきた。話によると、在学中に一度も叱られない者は「余っ程優秀か、要領のいい奴」とのこと、いずれをとっても該当しない私は、一度や二度のお目玉は甘んじて受けることを覚悟していた。

時は流れ、一年生の夏休み、バルサからの宿題は「B４版ケント紙にゴジック体の文字を三十字以上清書して提出せよ」というものであった。新調した烏口を試すチャンス到来！ということで心が弾んだ。

しかし、アルバイトをしたりの夏休みは瞬く間に過ぎ、残り少なく追いつめられた気持ちで、漢字の辞書とタオルを机上に額の汗を拭きながら、悪戦苦闘の末五十字を書き上げた。

字体は概ね満足できるものとなったし、字数も規定の三〇字よりはるかに多い、ただ気になることはケント紙の約三分の二が余白となってしまったことである。見るからにアンバランスなものとなったことは否めない。

友達のものをチラリ拝見すると、字体も大きく全般に配置よく立派である。タイムリミットとなった以上「まあいいや」と自分に言い聞かせ納得せざるを得なかった。

何日か平穏に過ぎたある日、バルサの授業である。どうもご機嫌がよろしくない様子が全身に漲っているのが伝わって来る。いやな予感がするうちに授業が始まった。それは教科書とは全く無縁な話からで、教科書は開く気配すらない。よく聞いているうちにどうやら宿題のことである。

ドスの利いた声、ボルテージが高まった。「お前らッ昔、軍隊では『針を持って来い』と言われたら、メドのない針でも早

く持ってきたものはよしとされた。今は違うんだ、針と言われたらメドのある針でなければダメなんだよ」と喝破された。

まさに私が提出した宿題はメドのない針だった。顔から火が出るくらい熱くなり、徐々に血がひけて行くのを覚えた。関係のない同級生には全く申し訳がない、何のために先生が怒っているのか分からず、皆ボーっとしている様に見える。

思えば私は全く情報不足であった。その点寮生は上級生などからの情報も豊富であっただろうし、何かにつけそつがなかった。また寮生は上級生、下級生などの日常生活の分別、マナーもきちんとしていたし、特に舎監の先生もいらっしゃり指導も行き届いていたことと思う。よってバルサからの信望も厚かったという訳である。

また一方ではバルサの授業は楽しみな面もあった。教科書から離れ「君たちが社会へ出たら……」とよく社会人としての立ち居振る舞いのことや、言葉遣いのこと、果ては前述の如く軍隊生活でのことなど、お話はいつも示唆に富み、しだいに敷衍（ふえん）する。我々は引き込まれるように聞き入ったものである。

結局私はバルサからのお目玉は、三年間のうち同級生全員を巻き込んだ「メドのない針」一件に終わったが「山を守る子」とはなり得なかった。

もちろん一生懸命学んだ林業経営、森林土木、フーベルの材積計算もトランシット測量のことなど全く無縁のものとなった。がしかし、あこがれであった他部門の公務員としての四十年余にわたり勤務することの出来たのも、いつしか浸みこんだ「メドのない針」が座右の銘となり、幾度かぶつかった困難な壁も乗り越えて来られた。

静かに顧り見るとき、今、われあるのもひとえにご薫陶いただいたバルサのおかげであり、諸先生方からのご指導の賜物であると信じている。

故人となられた上嶋積善先生のご冥福を祈るとともに、改めて諸先生方に厚くお礼申し上げる機会と場を百年誌上で与えて戴いたことに深く感謝したい。

終わりに、我が母校が、国境を越え森林保全のために求められる人材育成の礎となるような特色ある学園として、ますます発展することを願いながら筆を置きたい。

（了）

高校時代に培われたこと

五三回　小林　政幸

私は昭和二八年（一九五三年）本校に入学した。この時代の日本の経済は昭和二五年に勃発した朝鮮事変が休戦に入った年で、特需減退により景気が下り坂になっていた頃であった。

私は東筑出身なので、松本の高校に入りたかったが、父親がわがままな私をみて、生業である木材の事が学べて家から離れた所で修業させるには、またとない学校と考えたようである。

私の中学三年の担任が、ちょうど木曽から来た先生と言うこともあり、私が山林に行くことになった次第である。入学当時はえらい学校に来てしまった、という気持ちが本心であった。伝統の重みが、教育面はおろか、応援歌の練習、上下関係の厳しさ、寮の共同生活の人間関係の大変さや食事の悪さ等で大変なカルチャーショックを覚えた次第である。

学校ではただの一人とて知っている人がおらず、学校の周囲にも一人も知り合いがいない。そんな状態の中で、中学出たてのわがままな人間が、異郷で過ごした三年間は、私の人生にとって大きなインパクトを与えてくれる結果となった。

今、考えれば父親は「可愛い子には旅をさせろ」という気持ちで、この学校に入れたのだと思う。

特に寮生活の中では様々な思い出がある。この寮の運営は生徒による自治制であった。

入学してから間もない日、ある寮生が現金を盗まれる事件があった。寮生一人ずつ、上級生の陣取っている部屋に呼び出されて、「お前が盗んだんだろう」と誘導尋問にかけられて、後味の悪い思いをしたりもした。

また、肝試し大会では上級生の仕掛けた夜の山道を一人ずつ歩かされ、肝を冷やしたこともあった。そして何よりも辛かったのは、寮の食生活が貧しく、若い育ち盛りの者達にとってはかなりこたえたことである。しかし、そこの所は智恵のきく先輩がいてくれて、色々手てだてを講じ飢えを凌いで暮らした。

そんな中での楽しみは、クリスマスである。寮の食堂に校長先生をはじめ舎監の先生を招き、全寮生が集合しこの日ばかりはご馳走を食べ、出席者は肩を組み、応援歌や旧制高校の歌やエッチな歌を踊りながら歌った。

また各班ごとに大部屋で一～三年生が共同生活することを通じて、社会性、協調性という様なものが培われたように思う。

木材業界はこの頃よりソ連材が入って来る時代である。私は三一年三月に卒業し、父親の経営している製材所に入った。ところがその翌年に父親が急逝してしまい、若干十九歳で大変先行きに不安を覚えたが、父の後を継承した次第である。

若くて全く商売の事は解らなかったが、山林で学んだ事はすぐ商売に役立った。この頃の景気は株価が暴落をし鍋底景気と言われる時期である。そして三四年八月には伊勢湾台風があり木曽の山々が風倒木の大被害にあい、大量の風倒木が出てきた時期である。

未熟な木材屋がやる商売は、生やさしいものではない。厳しく辛い日々が続いたが、山林で鍛えられた事が大変役に立ったと思う。

木材を大工、工務店へと売っていたが、価格も絞られるし、支払いもある時払いの催促無し、という様な商売ではこれから先行き大変であると感じ、三九年に住宅建設に大きく転換し、今日までやってきた。

その間、木材業界の若手の集団である木青連の会長をやった

り、その後は地元の単協や、県木連、又住宅協会など業界の役員をさせていただいている。

県林務部や営林局などの職員の皆様と会議などでよくお会するが、大勢の同窓生の皆様が、それぞれ責任のある立場につかれており、私も業界活動をするのに大変心強く感じている。

さて、住宅業界は着工戸数が年百五十万戸台から百万戸台になり、今後は百万戸を割る時代に入っていく時代である。

また、木造住宅のシェアもプレハブ住宅に食われて行くと思われるし、木造住宅も大手ハウスメーカーと地場業者との競争もますます厳しくなってゆくと思われる。

私は住宅というものは地場産業であり、その地に生まれ、その地の気候、風土を一番良く解っている者達が、その地域で取れた木材を始め素材を使って造られる住まいこそ、最もその地域で暮らす人々に適した住まいであるという信念をを持っている。

今、健康問題が言われて久しいが、木材をはじめ有機質の素材こそ、最も人にやさしい家であると思う。また地球環境を守る為にも木造住宅は炭素放出量が最も少なく、消却も楽である。

これからも木材を中心とした住まいづくりを通じて、社会に貢献する企業を目指し、努力をして行きたいと考えている。山林で学んだ事、また出会った人々をこれからも自分の宝として行きたいと思っている。

（了）

思い出の生徒会活動

五六回　今井　豊

山林高校に入学したのが昭和三一年四月である。卒業して四十年余りが過ぎたにもかかわらず、今でも高校生の頃が懐かしくて忘れられない。

山林高校を選んだのは、長男であったためである。当時、木曽で安定した就職先は、山（営林署）か水（中部電力・関西電力）であったと思う。私は木即ち山を選んだ。

入学時、吾々のクラスは五〇名弱いたと記憶しているが、卒業時には三〇名となってしまった。生活が苦しくて学費が支払えず中途退学していったり、病気で亡くなった者もいた。年齢も二～三才位違っていたと思う。

高校生活は夏場は汽車通。冬場は下宿をした。家から三留野（現在の南木曽駅）まで一里余りを自転車を利用したが、砂利道であったから雨の日等は大変苦労をした。汽車には一時間程乗った。窓を開けると、煙と水蒸気に混ざって石炭の粉が目に入った。

下宿は福島の関町で二冬、新開の黒川渡で一冬を過ごした。初めて親元を離れての生活は自由で気楽であった。友達もよく遊びに来たし、また私の実家にも夏休み等土産を持って遊びに来て、蘇南高校の生徒たちとも一緒になって遊んだ。

当時の校舎は、木造で古く、風で倒れないように支えられた棟があった。男子ばかりの学校生活は、殺伐としていた。放課後の応援歌の練習では、気を引き締められた。寄宿生は、先輩に朝から晩までこき使われ、青い顔をして授業を受けていた。

しかし、一年後には天下を取ったことは言うまでもない。一方、あのころの先生は風格もあり頼り甲斐があった。問題が起きても、親を説得して対処してくれた。

さて、私にとって高校の三年間は貴重な経験をすることができた。それは、生徒会活動に全精力を注ぐ立場になったからである。二年生の時副会長、三年生で会長をやらされることになった。

会長・副会長は選挙によって選ばれるのであるが、選挙の結果はいつも副会長は林・工両科から、会長は林科から選出されるのが通例のようになっていた。木材工芸科より林業科の方が二倍も生徒数がいるからである。

しかし、昭和三三年の選挙結果は番狂わせが起きたのである。木材工芸科の私が当選した。当選した理由が二つある。一つは、前年度副会長をしていたので知名度が高かったことと、もう一つは徹底した選挙運動を実施したからである。

わがクラスは、三四名の少数であった。勉強の方では褒められることはなかったが、運動や遊びにかけては一丸となって取り組むクラスであった。

それに寄宿舎生が中心となって、勉強はそっちのけで選挙運動を幅広く展開してくれた成果が実った訳である。その結果前例を破り当選したが、後の年はまた林業科出身が生徒会長に当選している。

当選してからが苦労の連続であった。特に専門部の部長指名、役員の配分では、林業科生が多いのでそれなりの配慮が必要となり苦労した。

当時の生徒会活動は、相撲部をはじめ、多くの部活動が盛んであった。また、本校の行事だけではなくて、東高や西高との交流行事も多かったので気苦労をすることが多かったわけである。

ひのき祭をはじめとする各行事を成功させるために、役員の人たちと夜遅くまで打ち合わせを重ねた。企画を練り、それを実行に移すそれぞれの段階で、問題点にどう対処して行くかに全精力を注いだ。一緒に苦労してくれた役員の顔がときどき思い出される。

しかし、時たまパワー不足のときは、わがクラスに相談すると、ルーム長が中心となって、陰で協力し行事を盛り上げてくれた。

これらの協力体制は、会長職を下りるまで続けてくれた。また、問題点が山積すると、顔の表情もきつくなってくる。このような時、中学の同級生で東校にいた者から「先に立つ者」は表情が大切であることを諭され、健康を気づかう励ましの言葉をかけてくれた。

このように、多くの人たちからの厚意をいただき、会長職を務め終えることができたのである。卒業式の答辞を読み終えた時、これですべてから解放されると思った。

計画通り、国有林事業に就職し三五年余り勤務した。この間、数々の問題に対処してきたが、この生徒会活動で得た経験が自然に生かされてきたと確信している。私にとって高校は理数などの勉強よりも生徒会活動での思い出が強烈である。

最近、同級生から「同級会を早くやれ」との催促がひきもきらない。我々のクラスは全員が高校卒止まりであるから最終校が懐かしいのであろう。ご恩返しのためにも幹事を引き受けている。再会できるのも間近である。悲しいことに、すでに三名が他界してしまった。

終わりに、心の拠り所である木曽山林高校が、末永くご発展することを祈念してやまない。（追伸　昭和四一年の秋に、卒業後八年の近況をまとめて一冊の文集「かんな」を発行した。学校に送付してあるので利用されたい）　（了）

左手（ゆんで）に書とり右手（めて）には鍬を
――遥かタイの地から――

五七回　大脇　昭

バンコクは雨期の終期を迎え、時折シャワーと称せられる強い雨が降っている。

アパートの窓からは林立する高層ビルや富豪の大邸宅の間に、火炎樹、アメリカネムノキ、ターベブイヤ（タイ桜）等の大木が濃い緑の陰を落としている。

私がタイで仕事をするようになってから三回目、通算八年近くになろうとしている。一年中日中は三〇度以上の気候に身体はすっかり馴染んでしまった。

初回は一九八三年から妻、子供二人の家族と共に二年間このタイに滞在した。林野庁から出向して国際協力事業団（ＪＩＣＡ）の専門家として「タイ造林研究訓練プロジェクト」に参加し、タイの王室林野局に派遣された。

タイ国は日本の一・四倍程の国土面積がある。かつてはその七〇％以上が鬱蒼とした森林で覆われた国だったが、その後、他の熱帯の発展途上国と同様に人口の増加や商業伐採、国土開発等によって森林が減少し、森林の危機が叫ばれていた。

わが国は政府開発援助（ＯＤＡ）により、戦争で荒廃した日本の国土を緑に復活させた技術をタイの森林再生に活かすべくタイ国政府と協議してプロジェクトを発足させた。

土地を持たない貧しい農民が森林を不法に伐採したり、跡地へ不法に侵入して焼き畑を行い、数年間トウモロコシやキヤッサバを栽培して地力がなくなり放置されたチガヤ等の草原に造林して森林を再生させる仕事である。

一九八一年から始まったプロジェクトには、日本人専門家六

人がカウンターパートと呼ばれる林野局の森林官と共に、バンコクから約四〇〇キロ離れた東北タイのサケラートという山中に寝泊まりし、技術の開発と研究が続けられた。

第一期の五カ年間は荒廃した草地に森林を再生する大規模造林の技術開発と技術者の養成が主で、タイ東北部に八〇〇ヘクタールの試験造林地が造成された。

当初は自家発電の山小屋に住み、卵焼きが出ればご馳走という貧しい食事をとりながら、炎天下五〇度はあるフィールドでカウンターパートと共に山を這いずり回った。

当時、私達は専門家と呼ばれるものの、それは日本国内の林業の専門家であり、熱帯の林業に携わるのは初めての者ばかりで、タイ側のスタッフと共に試行錯誤を繰り返しながら業務を進めた。

先般、妻と共にその造林地を訪れた。一緒に働いたタイの森林官が日本人専門家が引き上げた後も造林地の拡大と保護管理に努められたという。造林地は四〇〇〇ヘクタールにもなり、十五年を経て、かつての草原はアカシア、ギンネム、ビルマカリン、シタン等の森に変わっていた。私は当時のタイの仲間と肩を抱きあって喜びを分かち合った。

第二回目の滞在は、一九八九年から九三年までの四年弱の期間で、同じプロジェクトの第二期計画の専門家として派遣された。

第二期計画は、一九八六年から九三年までの七年間で、プロジェクト発足当初にわが国の二〇億円の無償供与によってバンコクに建設された「タイ造林研究訓練センター」を拠点に、タイ全土の森林を対象にした造林に関する試験研究の支援が行われた。

わが国の森林総合研究所、林野庁、ＪＩＣＡから研究者等が専門家として派遣されて造林、森林生態、森林土壌、森林経営、林木育種、森林保護の六分野にわたり協力が行われた。

私は森林経営分野を担当し、マングローブの更新及び植栽密度、乾性フタバガキ林における山火事防止施業、混生落葉樹林における天然林保育の試験研究等の指導を行った。

任期の後半二年間は、プロジェクトのチームリーダーを兼務させられて頻繁に訪れる内外の視察者への対応や、十二年間にわたるプロジェクトのとりまとめ等に追われる日々を送った。

一九九三年七月プロジェクトは終了した。第一期、第二期合わせて二八名の長期専門家と、四三名の短期専門家が派遣され、この間に専門家カウンターパートの報告書、研修の教科書、普及のためのガイドブック等が一八五編作成され、日タイ両国の関係機関に保管された。

また、現地には第一期の拠点となつたサケラートのフィールドへ四〇〇〇ヘクタールに及ぶ造林地が造成され、第二期では全国各地に各分野の種々の試験地が造成されて、何れもタイの森林官によって管理と研究が引き継がれている。

多くの日本人専門家と、タイ側のカウンターパートの努力に

よってプロジェクトは、ほぼ目的を達成したとの評価を受けて幕を閉じることができた。

私はプロジェクト終了と共に帰国して、森林総合研修所で後進の指導とJICAが主催する研修で日本林業を学ぶ世界各国の森林官の指導に当たってきたが、一九九五年、林野庁から外務省に異動した。

外務省では二年間「邦人援護」という世界各国で事件・事故を起こしたり、巻き込まれた日本人の支援をする業務を担当した。その後、在タイ日本国大使館勤務を命ぜられて現在は政治、経済、広報、領事等の外交活動を支える総務関係の業務を担当している。

一九六〇年（昭和三五年）木曽山林高校を卒業後、国有林に入り、長野営林局管内、林野庁、帯広営林局管内、高知営林局管内、森林技術総合研修所等二〇回以上も転々としてきた。

この間、海外林業に二度携わり、あげくは外務省に移って在外公館勤務となり、自分の勤務生活の中で最も長い場所がタイとなった。

今振り返ってみると、国内、国外を含む多くの転勤は、仕事の面でも生活の面でも、その都度一年生に戻るという厳しさがあったり、家族に大きな負担をかけることになりはしたが、色々な土地の風物や人情を知ることができると共に多くの知己を得ることができるというプラスの面が大きく、大変恵まれたものだったと思っている。

私が海外林業に携わったのは、木曽山林に学ぶ頃、標本室で見た戦前・戦中に先輩が海外で活躍されて寄贈されたと考えられるタガヤサン、テツボク、ラワン等の南洋材の標本がきっかけと思う。

日本の木材とは異なった感じの標本を見た時、遠い国に思いを馳せ機会があったら海外に出てみたいという漠然とした憧れを持ったことが思い出される。

国内の勤務でも北は北海道から南は四国まであり、比較的長い期間、造林の仕事に従事した。その時に自分のモットーとしたことは「山を歩いて山（木）が何を求めているかを知る」「山は地下足袋で歩き土の温みと堅さを知る」「山を育て守るには、そこに住んでいる人々を大切にする」の三つであった。

これは国有林の担当区主任や、営林署長等を経験するなかで確固たる自分の信念になっていった。私はこの考えの源は木曽山林の厳しい実習を課せる実学によって培われたものと考えている。

一年生の時の真新しい法被（はっぴ）、腰鉈（こしなた）、地下足袋で、校舎周辺の平板測量から始まった実習は、急峻な演習林での多くの科目の実習に発展し、座学から解放される楽しさもあったが、体力的にも厳しく苦しいものに感じた。

合宿による製炭実習での深夜の窯の火の色や、それに照らし出された同級生の顔が四〇年を経た今でも脳裏に鮮明に残っている。

これらの実習によって培われた実務を大切にする精神、体力・知力の限界に挑戦する闘志、互いに力を出し合う協調性が社会に出て仕事をする上で随分と役立ったように思う。

発展途上国では、土に触れたり汗を流す仕事は下級労働者がやることといった感覚が常識になっている。

プロジェクト発足当初タイの森林官も同様な感覚であった。私は技術移転の第一歩としてカウンターパートと一緒に炎天下の草原を汗を絞りながら歩き、土を掘ってそれを握り、山が何を求めているかを考えることから始めた。

この姿勢は、森林総合研究所から派遣されたドクターを始めとする全ての日本人専門家も同じで、我々のプロジェクトで一緒に仕事をしたタイの森林官は女性を含めてフィールドを歩くこと、土や樹液で体を汚すことをいとわなくなり、ひいては現場の作業員の信頼を得ることになった。このことがプロジェクトの成功につながったものと思う。

木曽山林の校歌にある「左手（ゆんで）に書とり右手（めて）には鍬を」の実学の精神は世界中どこでも通用すると信じている。後輩の皆さんは今後色々な分野で活躍されると思われるが、どんな場面でもこの木曽山林の実学の精神を思い出してもらって、これを起爆剤に発展していただきたいと思う。

（了）

思い出の記

五八回　小林　岩男

私の高校時代と言えば、寮生であったのでどうしても寄宿舎にまつわることが多くなってしまう。

昭和三三年四月、入学した当初は四五〇人の生徒のうち、寮生は一三〇人余であったと思う。「望岳寮」は十三室に分れていて、十一室から十三室は研修、実習棟の一部に間借りのような形で特に十三室などは一室に十三人くらい入っていた。

建物は本校舎をはじめ全て木造の古い建物で（工芸科の製図室だけが比較的新しく木造モルタルであった。）まさにうぐいす張りそのもので本校舎も寄宿舎も忍び歩きはできない状態であった。

一年生の時の記憶に残っていることと言ったら空腹と掃除と「ヒッパリ」であったろうか。家から送ってくれる餅は上等なおやつで、何もない時は金属製の弁当箱を掘りごたつの火にかけて飯を炊いてマーガリンを溶かし込んで食べたが、これが卵かけ飯のようでとてもうまかった。

掃除は教室の掃除の他に、寮に帰ってからが大変で廊下を濡れ雑巾からカラ拭きまで特に念を入れ、各室競争でギイギイ鳴る廊下を鏡のように人が映るまで磨き上げた。「ヒッパリ」は下級生に対する上級生の「カツ」である。消灯前が多かったが、

時には消灯過ぎということもあって、小心者の私はそんな雰囲気を感じるとびくびくしていたが、現在言われているような陰湿さはなくカラッとしていて後腐れのないものであった。

そんな中で三〇円から五〇円でする茶話会、「同室会」と称していたが、かりんとうや上質なところでは栗のしずく等はとても美味であった。また同郷会というか、それぞれの出身地による集いもあって伊那会、松本会、安曇会、木曽会等で、県外の愛知、岐阜、静岡は一つであったと思う。

二年生の昭和三四年九月、伊勢湾台風の来襲は木曽谷にも大きな被害をもたらした。寮も倒壊こそ免れたものの停電によって暗闇の不安募る中で寮の建物は危険である（当時寮を含め、木曽山林高校の建物のいくつかには老朽化による倒壊防止の為のつっかい棒が何本もしてあった。）ということで実習室のある棟へ避難した。

まんじりともせずに朝を迎えたが、外へ出てまず目に入ったものは校庭の周囲の大きな桜や本校舎の玄関へ通じる築山の大木が倒れた様子だった。

それを見て寮生一同、よく無事に台風一過を迎えられたとあらためて胸を撫でおろしたが、それから後しばらく実習時間はその片付けに追われた。名古屋を中心に死者五千人を超えた未曽有の大災害であった。

三年は就職である。ほとんどが就職であったからホームルームでも進学の話を聞いた記憶はあまりない。一般的にいわれるよい会社、大きな会社を目指して試験勉強に励んだ。

そして大部分の仲間が国家公務員を受験し、県職も受験した。現在も国家公務員や県職員の中堅幹部として頑張っている。

私も推薦をいただいて運良く合格し、昭和三六年四月一日入社したが家庭の事情で丸一年で退職せざるをえない事になり、お骨折りをいただいた先生や学校に対して今でも申し訳なく思っている。ちなみに初任給は一万三百円であった。

私は良い友達に恵まれたが、先生方も良い先生が多かった。入学式に訓示をいただいた校長先生は古屋先生、貫禄も十分だったし、威厳を感じさせる校長先生であった。担任は一年から三年まで千村先生、ラッキョウのあだ名の通り色白で真面目を絵に描いたような先生。副担任は小林先生、教科は国語であったが、中国の歴史物を朗読されるのを聞くと、もうなんともいえず聞き惚れるというか、吸い込まれるようであった。山岳案内書等で現在もご活躍中である。

アルバイトでお世話になった工芸科の下島教頭先生、腹いっぱい蕎麦をご馳走になった。古川先生は測量の先生でいつも全国各地のライバル校の話をし、社会へ出てもそれらの学校の出身者に負けるなと事あるごとに言われた。ギター爪弾く体育の小野先生、折をみては寮生を食堂へ集めてギターを弾きながら若者の歌を教えた。歌声喫茶が流行だったのもその頃だったろうか。上平先生は若者の相談相手。ヌキさんこと佐々木先生。温厚そのものだった神庭教頭先生。まだまだ多くの先生方。さ

らに寮母の三和さんやお世話になった方々。しかしながら「喉元過ぎれば熱さ忘れる」で、今まで横着をして過ごしてしまい申し訳なく思う。改めて感謝の気持ちを申し上げたい。（了）

五五歳で振り返る高校生活

五九回　相澤　昭人

五五歳の私は、山林を卒業して三七年が過ぎ去ったことになる。勤務している会社は、十年ほど前に定年を六十歳に延長したが、以前のままであれば定年で会社を辞め、郷里である小谷村に帰って、農業のかたわら民宿でもやっている年齢だ。

私が昭和三四年に山林に入学したときは、木造の古い校舎だった。在学中に改築が始まり、三年の後半だけはダム寄りのできたてのコンクリート校舎で授業を受けた。在学中の三年間を寮で生活した我々は、山林らしい木造の校舎や寮で過ごせた古きよき時代の最後であった。

卒業して現在の会社に入社すると同時に、当時会社が所有していた鹿児島の社有林を管理する事業所に赴任し、そこで八年間を過ごすことになった。

山林で学んだ育苗から育林、伐採、搬出、測量、経営まで全てが何らかの形で活用できた時代であり、私にとっては、これだけでも実業学校「山林」で学べたことに感謝している。

その鹿児島山林事業所で働いていたころのある日、新聞で木曽山林で火災があったとの記事を見つけた。それは古い木造校舎の解体中の火災であったとのこと。それを見た途端に私はうれしいような、しかし、その気持ちは自分の中だけにしまって、知らんぷりをすべきような、複雑な気持ちになったことを良く覚えている。

当時の「望岳寮」は一年から三年生まで五〇名ほどが、十三室ほどに分かれて生活しており、私が初めに入った部屋は各学年二名づつの六人部屋だった。

寮は校舎と棟続きで、雨の日も教科書を小脇に抱えて三、四分で教室に到着できた。

寮の建物は学校の敷地の北西で、北側の少し高いところを福島と開田高原を結ぶ県道が通り、その向こうの山裾は畑やりんご園があった。

この北側に立って寮の建物を見ると、外見は校舎と同じガラス窓の二階建であり、中に入ると窓に沿って廊下がまっすぐ通っているのも校舎と同じであるが、その廊下に面した各部屋の窓は障子戸が並んでおり、部屋と部屋の間に廊下が折れ込んでいた。

そこに各部屋の入口があり、引き戸を開けて中に入ると南の窓沿いに板の間があり、自習机が置かれている。部屋の半分くらいが畳の間で、ここは自習室からおよそ三五センチ位高くなっており、自習室との間も障子戸であった。

この自習室と畳の間の段差約三五センチのところにタンスのように引出が付いており、そこを引き出してナタや地下タビ、脚絆、運動靴などを入れていた。

私が山林の火災の記事を見ると同時に思い出したのはこの引出だった。実はこの引出の奥こそが歴代寮生の秘密の空間「パンドラの箱」だった。

そこは一階の天井裏であり、二階の縁の下に当る空間である。「望岳寮」は山林が実業学校であったこともあり、終戦後に戦地から帰った元軍人も入っていたため、軍隊風に厳しい規律や習慣が長く残ってきたと聞いた。私が一年の時まではまだその傾向が強く残っていたように思う。

毎晩のように、上級生が集まっている部屋に、主に一年生であったが一人または二人づつ呼び出され、挨拶や態度について執拗なまでの注意（というよりドナリツケル）を受ける。場合によっては暴力に及んだこともあると聞いた。

そのような厳しい規律と緊張感がある一方、舎監の目を盗んで酒、タバコをのむ、近所のリンゴ園を荒らしにゆく、寮の窓から県道を行く女性に罵声を浴びせるなど、若さの発露か、危険を冒すことに刺激を求めているようでもあった。寮の外から見たら「寮はろくなところではない」と、一事で万事を断じられる状況ではなかったかと思う。

しかし、寮の一年生の時の規律と緊張感の中で自分を鍛え、掃除、洗濯など自分の身の回りのことは自分でする習慣など、社会に出てから振り返ると、他では得ることのできないよい体験をすることができたと思う。

特に、寮の日常生活の場における出身地も人柄も違う先輩、同僚、後輩との触れ合いは、実社会に出る前の貴重な体験になった。

寮の部屋の引出の奥である「パンドラの箱」の中は、歴代の寮生が残したウイスキーや酒のビン、タバコの吸殻のビン詰や缶詰など寮生の青春のシンボルが眠っていた。その量はどれ程のものだったのか、神のみぞ知るである。

私は遠く鹿児島の地で小さな新聞記事を見ただけなので、火災の原因は知らない。

ただ、この火災によって「パンドラの箱」はついに開かれることなく、灰塵に帰したとすれば、私の思いがかなったことになり、そこに何らかの意志が働いたような不思議な気持ちにもなる。

とかく世間は、一事で万事を断じる傾向にある。（了）

在学当時の思い出「寮生活」

六一回　丸山　秀夫

私の郷里は、長野県松本市である。当時、松本から木曽福島まで国鉄（ＪＲ）で約一時間半ほどかかった。通学には無理で

あり、私は、入学当初より「望岳寮」に入ることになった。

寮は、そのころ十二室か、十三室あったように記憶している。各室には、三年生一名、二年生二名、一年生二名から三名の計五から六名が同居する格好で生活をしていた。寮生も総勢八〇人近くいたこととなる。いろいろな年齢層が一室で生活することは大変なことで、いろいろなことが思い出される。

昭和三六年入学した当時、三年生が随分年上に見え、おじさんに見えたことが印象深く残っている。入学した私とは二才違うだけなのに、今思うと不思議な気さえする。

そんな中での生活であるが、郷里を離れて生活している者同士、家族的な雰囲気があった。自習時間が終わる夜九時になると、近くの駄菓子屋さんに買出しに下級生が行き、皆そろってお茶を飲んだりした事を思い出す。夏休みで郷里へ帰った後などは、お土産等が加わり一層賑やかなものであった。今にして思えば、どれも楽しい思い出になっている。

結局私は、三年間寮生活を送ることとなった。三年生のときは、寮長として寮生活を送ったが、時代は変わってしまい、入学した当時の上下関係は既に崩壊していたように思う。

私は、この寮生活をきっかけに、郷里松本を離れることになり、その後四年の学生生活を送り、社会に出ることとなった。

今も両親は高齢ながら、郷里松本で暮らしている。郷里を離れ、勉強すること、生活することは、私のその後の人生に大きな糧となったことは間違いがないと思っている。今、人生の半分を終わってみると、青年期の多感な時代を郷里を離れ、生活できたことは貴重な体験であり、両親にも感謝したい気持ちでもある。

また、高校時代の学業が活かされ、変わることなく、そのまま私の生涯の仕事になり、時代の要請を受け、追い風になっていることにも感謝している。

（了）

思い出、そして後輩に望む事

六二回　大嶋　剛

創立百周年をお祝い申し上げるとともに、一世紀にわたる歴史の一部に在籍させていただけた事に深く感謝している。

今回、投稿の機会をいただいたのを機に、ほぼ三十年ぶりに黒川のダム湖畔に立って見た。湖面に浮かぶ母校を眺めていると、大きく様変わりした正面玄関からダム側にかけ、雨水に削られたジャリ道の水準測量をした事。そしてダム湖が夏は水泳、冬はスケートリンクに変わった事など走馬灯のようによみがえってくる。

三年間私たちの担任であり、また母校の先輩であって後に教育功労者として叙勲を受けられた古川先生のわが子に教えるような厳しくもあり人間味のある授業。

包容力のなかで何度も見捨てず繰り返し教えてくださった

佐々木先生。

誠実に日々一生懸命教えてくださった千村先生。

校庭整備などをしていると一緒になって汗をかいて下さった上条校長先生。

そして各々の先生方を思い出せば思い出すほど何故あんなに丁寧に教えていただいたのに、何故あの程度のことが理解できなかったのか、と日々淡々と過した青春の一部を情けなく、一抹の寂しささえ感じ、恥じいるこの頃である。

勉強以外の思い出、素映会、そして下宿生活。私の入学した一九六二年までは男子校であった。（翌六三年からは女性が入学されている）男子校ゆえの上下関係、多少の粗さもあったと思われるが、そうした中で学年を越えて裸になろう、赤裸々な自分を映し夢と未来を語ろう……。

そんな提言をし発足したのが素映会であった。リーダーとして指導してくださった当時三年生の野田一雄さん、二年の向井功さん、同じクラスの和田宗男さん。

十数人のメンバーだったと記憶しているが、人生論から恋愛、政治論まで時間を忘れて語り合ったことを懐かしく思い出すことができる。もっとも表向きはコーラスグループ。

当時女子高だった東校との交流会など下駄を履いて活発に動き回ったものであった。

確か、野田さんが長野営林局、向井さんが前橋営林局、和田さんが国際航業だったと記憶しているが、野田さんが若くしてお亡くなりになった事は残念でならない。

私は在学中、学校の裏手に下宿生活をしていた。二千年の今でこそ電車で松本、木曽福島間は四〇分程度だが、当時、ＳＬで一時間四〇分程かかったと記憶している。

通学には多少無理があるので、母校の先輩だった原さん方に下宿させていただいた。隣りのお宅には先輩の花田勝彦さん、後輩の野村正之さん、金田貢さんがおり、花田さんの下宿の小母さんから度々野沢菜の漬物を丼一杯いただき、夜が白むまで話した事を思い出す。

花田さんは温和ながら大変な見識を持った理論家であり、彼から日本の核兵器の有無、当時くすぶりはじめたベトナム問題など多方面にわたる興味がこの頃養われた。また私自身一番沢山本を読んだのもこの頃と記憶している。花田さんと野村さんが三井農林、金田さんがＪＴＢ。そういえば金田さんは、部屋を訪ねるといつも短波のＶＯＡを聞いていた事を思い出す。

素映会であれ下宿仲間であれ、各々の方々が自らの将来に明確なビジョンを持っていた事に今更ながら感心してしまう。

情報化社会の中で現在は、コンピュータとコミュニケーション、通信とネットワーク、情報の世界である。

価値観の多様化は情報量によるものであり、その情報は書籍であれメディア、インターネット経由であれ何処でも誰でも簡単に入手できるものである。

入手情報の量、質をどのように受けとめ、判断し処理するか

によって結果は大きく変わってくるのも現代社会の特徴である。要は情報入手の機会平等のある今、自らの結果は自らで導きだせるものと私は考えている。

地球温暖化であれ環境問題であれ、後輩の皆さんが多くの情報に接し、国際社会を含めたいろいろな事に興味をもたれ、目標に邁進する中で研鑽と自らに対する投資を継続されるよう勧めたいと思うことしきりである。

最後になったが、二十一世紀を迎える母校のますますの発展をお祈り申し上げ筆をおきたい。（了）

思い出の記

六五回　藤村　好男

初めに

私は昭和四〇年四月から四三年三月まで山林に在学した。昭和三九年に東京オリンピックが終り、各家庭に急速にテレビが普及した頃である。

私は王滝村の出身であるが、当時通学時間帯の定期バスがなく、王滝の仲間達は寮や下宿に入った。おんたけ交通は私達の一年生の夏頃より定期便化した。

下宿生活

私は下宿をしたが、十五才で親元をはなれ他人の家庭にやっかいになることは、井の中の蛙が大海へ出るようなもので、礼儀もしらず初めはかなり戸惑ったことを覚えている。

私は、古川彦次先生の実家にお世話になったが、家庭的で朝夕の食事も家族全員と同時に取らせていただき非常に良い経験をさせていただいた。

古川家は前々より下宿をされており、生徒の扱いになれていてくれたことや、一年先輩の森本一美氏（三岳村）も同居しており、皆様に色々教えていただくことができた。

一年生の時はホームシックになり、当時は電話がなかったのでよくハガキ（当時一枚五円）を家へ書き、親からも励ましの手紙が来た。

各学期の中間、期末試験の時は夜遅くまで勉強をして、下宿のナベを借りラーメンを作って食べながら、先輩から誰々先生はここから問題が出るとかいった情報交換をしながら試験勉強をしたことなど良い思い出である。

なお、当時の下宿代は、三食付で五千五百円であったが、弁当まで作っていただき下宿の皆様には苦労をかけたことが多かったと思われる。感謝の気持ちで一杯である。

黒川渡ダムのこと

山林には水泳大会があり、演習林へ行く木製のつり橋の少し

下流で川幅が五〇メートルくらいの場所に特設プールが作られた。

コースは三コースで下流に向い流れに沿い円弧を描いていた。学年対抗やクラス対抗戦が行なわれ、私もBクラスの選手として出場させてもらった。

皆で頑張ったが、特に和木守君（上松中）などがすばらしい泳ぎをしていた。クラス対抗ではAクラスの家高紀夫君（王滝中）、清水紀良君（福島中）らの追い上げでわずかに負け、残念だったことを覚えている。

応援席は校舎南側のダムに面した木立の中で全員が観戦した。この水泳大会は在学中なぜか一度しか開催されなかった。

冬になると黒川渡ダムは結氷するので天然のスケートリンクが作られ、体育の授業でスケートが行なわれた。

中学の頃は田んぼに水を張った小さなリンクと下駄スケートしか経験がなかったが、ここで初めて靴スケートなるものを履き楽しくすべった。

後でわかったが、私達が使ったスケート靴は歯の長さがロングと呼ばれる難しいスケートだった。

体育の担任の小林秀人先生の滑りに私達はうまいものだと感心していたが、志村芳明君（福島中）などもうまくなっていた。

就職試験

三年の夏頃からは就職試験がたけなわになった。私も二回挑戦した。最初のK建設試験のことが強烈に印象がある。

試験は新宿であった。東京へ行くのは初めてであったし、当時の北村倉太教頭に山林の代表で行ってこいと激励され、宿を紹介していただき簡単な地図一枚で東京へ向った。

新宿で山手線に乗り換え、高田馬場駅で下車し、地図の宿を捜したが、人の多さと雑居家屋に面食らった。

宿の方に明日の試験会場への道順を教えてもらったが、今考えるとよく行ったものとつくづく思い出す。結果は散々であったが東京の活気と生活力を見ただけでも勉強になった。帰ってから北村教頭に東京のことが勉強になりましたと報告したら次回は頑張れと叱咤激励された。

私は担任や多くの先生方のおかげで現在の会社に就職できたことを大変感謝している。

終りに

この文章を書きながら、約三〇年前のことが色々想い浮かんできてたいへん懐かしく思っている。

昨年（平成十年）私達同期も何年ぶりかの同級会を開催し再会を喜びあう事ができた。同じ学舎で勉強した仲間は良いものである。百周年おめでとうございます。

（了）

今、思うこと

六五回　桝田　千秋

年を重ねるごとに年月の流れの早さをつくづく感じるこの頃である。殊更、長い人生の中で悲しいとか辛いことよりも楽しかったと思えるときは、あっという間に過ぎてしまうものである。

私にとって木曽山林高校で過ごした三年間は、あの時だからできたであろう楽しい体験が数多くある。

黒川渡ダムでの水泳大会、先輩たちと泊り込みで夜も寝ないで、材料にするラワン材などを乾燥させる実習もあり、今の学生諸君には想像もできないことであろうと思う。

机に向かっての学習については「先生、お母さんゴメンナサイ」状態であった。通学に靴を履きたくてもなかったので、下駄をつっかけ、思い切りかっこうをつけて歩いていた当時の自分を想い出し苦笑することもある。

けれどみんなが満足に何も買ってもらえない時代であり、恥ずかしい思いは全くなかった。上松町に住んでいたので当然汽車通学であったが、まともに座席に坐ることなどほとんどなく、デッキにつかまったまま蒸気機関車に乗り、真っ黒い煙を思い切り吸い、木曽福島に着いたときにはススだらけであった。あの時の煙の匂いをとても懐かしく思っている。

そして私の学生時代を語る上で忘れてならないのが、友だちとの出会いである。それまでは学校というとあまりいいイメージを持てずにいた私なので、怖い先輩や他校の生徒とのトラブルがあっても、仲間としての心のスクラムを組める友だちと巡り会い、私はそれまでの暗い自分との決別ができたのだ。

人にはいくつかの転機があると思うが、今私にとっての人間関係の基礎は山林高校時代であったと断言できる。

私は趣味で絵を描いているのだが、東京で個展を開いたときには、Aさんが仕事の合間をぬってほとんど毎日来てくれたり、本当に至れり尽せり世話になってしまった。そうすることがさも当り前の様にである。もちろん木曽からもわざわざ足を運んでくれた人もたくさんいた。

そんなC組はまだ一人も欠けていないのが何よりも心強い私である。個展、受賞などみんな自分のことのように喜んでくれる。ただただ感謝である。

最後になってしまったが、恩師の日向先生の存在は、私たちにとってかなり大きな影響を受けていることを忘れてはならないのだ。

当時はハチャメチャな私たちにかなり手を焼かれたと思うが、今ではみんなの良い所ばかりを覚えていて下さり、一人ひとりに心をかけていただき、本当に有難いと思っている。

同級会で、先生のお元気な姿を見られることは私たちにとっても大きな喜びであり、励みにもなっている。

日向先生（チャボ）いつまでもお元気でと願っている。

わが母校の木曽山林高校様

たくさんの思い出

たくさんの友だちをありがとう！

（了）

思い出の記

六五回　穴山　信光

振り返ればもう、三十四年前になってしまっている。

工芸科に入学、高校に通い始めた。中学校時代の生活と違い、他人の家で生活をするようになって修行と学業の両立が、当時の私には大変なことだと思われた。

服装は、学生服に手さげカバン、ゲタを履いての通学で、当時上下の挨拶がきびしく、ビクビクしながら登校した。特に、応援練習のしごきは、忘れられない。工芸科は、一クラス、女子は二人、林業科は全員男子という時代であった。

クラスの友人や、先生と次第に親しくなり、一年生、二年生、三年生と進むうち、良い作品が製作できるようになり、とっても授業に力が入りはじめるようになった。他の教科も同様であった

特に工芸科の主となる家具作りには力が入った。今も二年生の時の作品、片袖机、三年生の時の食器戸棚は、三〇数年経っても愛用している。自分で設計、施工したものは捨てることが出来ない。また教科書も工芸に関する本と、製図板、T定規、三角定規、コンパス等、当時の思い出がつまっていて今日も保管してある。

卒業して、まったく違う道に進んできたが、生活の中における、家具、家屋の設計、施工等が気になるものである。林業や工芸に、縁が遠くなったかと思うが、現在は、木曽の裏側の林業や工芸に関した町、裏木曽付知町に住んでいる。この町も営林署関係で、とっても盛んな町であった。

国内における山林の問題は、いろいろあるが、林・政のことばかり考えてきた今日、保水力のない山林になってしまった。早く、保水力のある山に、生きものの生活できる山に戻さなくてはならない。美しく清らかな水が、永遠に流れ出るような山づくりに努力して行かなければならないと思う。

木曽山林高校で学んできたことは、私達の生活の中でいろんな面に密着し生きている。

木曽山林高校、大学で学ばれている皆様、学んだことが、自分にそのまま生活に関係してくることを深く考えて、より以上の責任と、誇りをもって努力してほしいと思う。

（了）

私のタンスは今も現役です

六七回　内山　文彦

平成十三年に我が母校木曽山林高校は、百周年を迎える。

私が在学したのは、わずか三年なのに、母校が百周年を迎えるとは、驚きでもあり、また大きな喜びでもある。

私が山林高校で学んでから、三〇年が経過した。我々の学生時代は、高歯の下駄を引きずって通学したものであった。恐い先輩がいて、応援歌の練習で昼食もゆっくり食べていられないような事もあったのに、なぜか学校へいくのが楽しくてしかたがなかった、そんなことを覚えている。

在学中の思い出は、なんといっても実習授業である。私は工芸科で学び、作品を作り出す喜びは山林ならではのものであった。

卒業後、私は一貫して木材関係の仕事に従事してきた。最初はギター作り、その後額縁作り、そして木工へと進んできた。かたくなに木材関係の仕事に就こうと思ったわけではないのだが、なぜか木と接していると安心していられるという気がする。そんな気持ちは山林で培われたものであろうか。

私には三人の子どもがいる。それもすべて女の子。まさか我が子が山林へ進学するとは思ってもいなかった。そのうちの三女が山林へ入学した。山林へ進学したいと言い出した時には正直いって驚いたが、山林を出て今でもよかったと思っている私にとっては大きな喜びであった。

我々の時代はまだ女子生徒はクラスに数人しかおらず、男子校のイメージが強かったのだが、現在では男子と女子の割合が約半数、時代も変わったものだと思う。

しかし、娘の入学式のおり、三〇年ぶりに母校を訪れてみて驚いた。私が教えていただいた先生方が、いまでも山林で教鞭をとっておられた。大変なつかしく、そしてうれしいことであった。

私は今でも、山林在学中に制作した整理タンスを使っている。垢ぬけしないデザインではあるが、丈夫で長持ちしているところをみると、当時の山林工芸科の技術はなかなかのものだと誇らしいような気がしてならない。

林業の大切さが見直されている現在、我が母校木曽山林高校が、二百年、そして三百年と歴史を重ね、ますます発展していくことを祈ってやまない。

（了）

●コラム　親子孫三代　山林一家

本校には、親子孫の三代にわたり本校卒業という、いわば「山林一家」がある。例えば、木曽福島町新開の三尾家や王滝村の西路家がそれである。他にもそのようなご家族があると思われるが、ここでは三尾家、西路家をご紹介したい。

三尾家

六四回　三尾　秀一

祖父貫三は、明治三〇年生れ第十二回の卒業生である。学生時代に演習林岩ヵ沢東地籍（四林班）一帯のヒノキの植栽をしたという。今は九〇年生の立派な林となっている。

支那事変・大東亜戦争と二度中国大陸に引張りだされ、両事変の間、帰国し母校の教官を数年勤めた。

戦後は村長一期・森林組合長二期勤め昭和四九年に亡くなった。その間余暇をみて自分の山林の手入れを楽しんでいた。

父貫次は、三八回の卒業生である。このクラスは五〇名採用の最後のクラスだったという。在学中は大沢林道上（一林班）の雑木林を冬のストーブ燃料用として伐採し、その跡地にヒノキを植栽し、今は六〇年生、これも立派な林となっている。

父は兵役二年、その後農林省食料事務所に三七年勤務のかたわら、地区の共有林（十四戸・五〇〇町歩）の保育に汗を流し、現在喜寿、元気に農業に精を出している。

私（秀一）は昭和四二年卒第六四回、弟の清次は昭和四七年卒第六九回の卒業生である。

卒業式の当日校長先生から親・子・孫三代の卒業生はかつてないのではと言われたことを記憶している。

私は卒業後、長野営林局に採用され、公務員として三〇有余年となり、この間長野県内の各営林署を一〇数回にわたり転勤した。

現在は木曽森林管理署南木曽支署（営林局・営林署という名称が平成十一年三月に改正）に勤務している。

任地ではそれぞれ蘇門会支部があり、多くの先輩・後輩等から指導・助言を、時には心温まる励ましをいただき、支部総会では母校の近況を聞き、校歌・応援歌を会員全員で声たからかに歌い、仕事の面においても地域に溶け込んでの、充実した日々を送らせていただいている。

これも母校の「山林魂」のおかげであり、深く感謝し

たい。

林業・林産業を取り巻く情勢は、今日非常に厳しいものがあるが、蘇門の名に恥じることのない、国民の期待に応えられる立派な森林を後輩に引き継ぐ努力してまいる所存である。

我が母校「木曽山林高等学校」のますますの発展をお祈り申し上げたい。

西路家

八四回　西路　博

祖父孝は二二回卒業生で、山林学校時代は寄宿生であった。卒業後しばらく役場勤務をしていたが陸軍将校として名古屋へ、終戦後は村へ戻り村議や愛知用水牧尾ダム水没地対策委員長など歴任したが、五八歳で亡くなった。

父勝は五〇回卒業生で、福島町で下宿し、本校林業科三年間の学校生活を送った。卒業と同時に地元の営林署に就職した。木曽ヒノキを中心とする広大な原生林と山の深さに感動しながら、失敗が許されない現場の仕事と、公務員である自覚のもとに四一年間勤務の後、平成六年退職した。

退職後も、自分が所有する五ヘクタールほどの山づくりに元気で励んでいる。父勝の山づくり哲学は、「山づくりはその時々に出来るものではなく、山を愛する長い長い歳月によってつくられるもの」である。

山林高校で学んだことを生かし、山づくりに励める幸せをかみしめるこの頃である。

孫の明は八一回の卒業で、博は八四回である。

私は山林高校卒業後、早くも十五年が経過しようとしている。地元公務員として、林業に携わっている中で、本校卒業の諸先輩も多く、日々ご指導・助言をいただきながら充実した毎日を送っている。

この間に体を壊し、仕事どころではない事もあったが、そんな時こそ私を支えて下さったのも「山を愛す」心のお陰と感謝している。

高校時代の二・三年と農業クラブの農業鑑定では全国大会へ出場することができたが、これとても山を愛し人を信頼してきたからだと信じている。

今、森林・林業に関心が高まりつつある中、これから高校を卒業される皆さんと、諸先輩の方々とともども協力し合い、山を愛する心を忘れずに日々努力を重ねていきたい。

在学当時の思い出

六九回　中野　稔

私の入学当時は、真新しい学生服に身を包み、金の徽章を付けた制帽をかぶり、黒の革靴を履き、教科書や参考書、お昼の弁当で膨らんだ革の学生鞄をさげて登下校したものである。

さらに手首には重々しい腕時計。そんな学生姿で、今では考えられないほど、のんびりと走る蒸気機関車の列車に飛び乗り、揺られながら木曽福島駅に着くと、駅から三〇分程歩くのが日課であった。

その道すがら、高下駄を履き、つぶれた帽子をかぶり、つぶれた鞄を脇に抱え、割りとゆっくりと歩く先輩たちを、追い抜きざまに「おはようございます。」と挨拶をしながら学校へと急ぐことも例になつていた。

先輩たちが随分と大人に見えて、これから何が始まるのだろうかと、不安にかられながら、山林高校の門をくぐっていった、あの初々しい気持ちの自分を、今でも鮮明に思い出すことができる。

在学中と言えば、やはり色々な行事を思い出す。それぞれが木曽山林高校らしさであると言っても過言ではない。その行事一つ一つを、今のそれと比べると、胸を張って頑張ったと言えるものだし、今の生徒にはない、何かを感じるものだったと思う。

入学してしばらくすると、昼食時に先輩たちが教室に入ってきて、「全員立て！応援歌の練習だ！」食事もできない恐怖の応援歌練習の始まりであった。

教室での練習では、歌詞を覚え、放課後は校庭での練習。三年生は列の中を回りながら「声が小さい、聞こえんぞ。腹から声を出せ。」「手の振りが小さい、もっと大きく振れ」クラスだけで歌ったり、全校の前で歌わされたり、先輩たちに指導された厳しい数日間であった。

今ではあまり聞かない応援歌練習だが、ある意味では、規律正しさ、連帯の精神などを教えるには必要だったのかもしれない。その正しい方法も、今では忘れ去ってしまった気がする。

五月には強歩大会、今思えば、山菜でも取りながら気楽に楽しめばよかったのにとすら思う。しかし、当時はそんな余裕はなかった。一度、折橋隊道が工事のために、ため息が出そうな下から見上げる峠道、そんな地蔵峠を往復した事があった。

平らな道と違って、気の遠くなるような思いであった。ゆっくりと歩いていると先輩が早く行けと促す。「運動部は走れ、上位に入れ」と命令が出る。

足にマメをつくり、引きずりながら四七キロメートル余りを歩いたように記憶している。関門では梅や氷砂糖、おにぎりなどが用意され、飲んだ水の美味しかったことは忘れられない。

そんな中にもひたすら走り、午後の二時頃にはゴールした生徒がいたと聞いた。

夏には蘇門林の下草刈りがあった。遠足気分で出掛けたのはいいのだが、担当の区域を片づけるのには必死だった。草に絡まれたり、日陰になっている小さな苗木があり、気を使った。木は育つものではなく、育てるものなのだとつくづく感じた。今はどうなっているのだろうか。そのうち、あちらこちらから、「蛇だ、マムシだ」と言いながら捕まえる声が聞こえていたものだった。

秋には山林高校恒例の運動会が行われたが、地域の人達が楽しみにしていたこともあり、ずいぶん大勢の人たちが見学に来られた。

短距離走、長距離走、二人三脚、ムカデ走、障害物競争やリレーなど、多くの種目があり楽しめたが、山林の運動会と言えば、何といっても林業科、工芸科混合で三組に別れての騎馬戦、棒倒し、蛇の脱皮という対戦が忘れられない。

騎馬戦も棒倒しも、最前線に立ち、防御しなければならない立場の下級生は大変であった。練習のときから気迫は充分。肩の脱臼で病院に運ばれたりした先輩がいたりして、また、本番当日は踏んづけられたり、足で蹴られたり、時には拳が飛んできたりで、踏んだり蹴ったりとはこの事か。蛇の脱皮は地道な種目であるが、みんなの気持ちを一つにしていかなければ成功しない種目で、それがまたきれいな種目であった。

こんなところに応援歌の中の山林魂の男の迫力や連帯感を感じたものである。練習のときから、厳しくても辛いと思ったことはない。終ったあとの達成感は、何とも言えずさわやかなものでさえあった。

秋の文化祭は、当時の高校生としては、かなり意味のあるものだったと思う。弁論大会や討論会が企画され、学んだことや自分の主張を述べたり、男女交際のあり方などを真剣に話し合ったものである。

また、文科系のクラブが少なかったこともあり、クラスの発表や、観る機会の少なかった映画の上映があり、今のようなお祭り騒ぎの文化祭ではなかったがその中にも、考え学ぶと言う姿勢があった。

当時はそれなりに熱が入ったし、後夜祭では、デカンショ節の踊りで遅くまで盛り上がり、楽しかった記憶がある。全国の学生歌とも言われるデカンショ節、今の時代にも伝えたいもののひとつである。

学習面では、何といっても実習が心に残っている。一年では家具の基礎学習ということで、工具を研磨するのだが、合格点が厳しく、何度も繰り返したことを覚えている。

また、組手の作成では、与えられた材料を効率よく利用し、幾つかの課題をこなした。鉋の削り屑を、級友と比べあい、削り具合を評価したこともあった。

作品展示即売会では、自分の作った家具が認められ、買われていく気分は何とも言えないもので、作品を仕上げ、完成させるという「達成感」は貴重なものであった。

そして、今とは違い、決して精度が良いとは言えない木工機械をベルト車で動かしていた機械実習室を懐かしく思いだす。とにかく、専門科目が多く、色々な分野の学習をした。

実習や製図はもちろんのこと、家具生産、材料、塗装、工芸、室内の計画、建築、構造力学、工業経営などなど、特に建築関係の学習は、進学先では大変に役立った。

そのまま参考書として利用できたので、随分とレベルの高い学習をしていたものと今さらながら自分自身感心している。

放課後の部活動にも思い出がある。林業科の先輩から、「剣道部を作ろう」と誘いがあり、場所もなく、防具もなく、何もないところから出発した。防具は古いものを探して使い、工芸科の前庭に砂を敷き、稽古をした。

大会に出られる当てもなく、時々、体育館を使わせていただきながら、ひたすらに練習を続けた。今でも剣道を続けていられるのは、その時声を掛けていただいたことが、きっかけとなったと思っている。先輩に対して感謝している。

山林高校での三年間は大変に有意義であった。普通科では味わうことのできない専門の知識や技能を学ぶことができ、それが今の生活の原点になっている。山林高校を卒業したことを誇りとしながら、これからも生きようと思っている。この後に続くであろう卒業生となる生徒も、悔いのないようにしっかりと学び、社会に出てからの生き方を確立できる高校生活を送ってほしいと懇願してやまない。

（了）

在学当時の思い出

七四回　野口　金造

人の一生にはいくつかの岐路があり、その後を大きく左右するというが、私にとって母校に入学したことがまさにそれに当てはまる。

現在、工業（建築）科で教育に携わっているが、自分の人生を母校抜きには語れない。

卒業と同時にその後十五年間、職員としても育てていただいた経緯もあり母校に対しては感謝の念が絶えない。

さて、今回「在学当時の思い出」執筆の依頼をお受けした訳であるが卒業後早二〇年も経過し、時間的交錯と記憶の曖昧さが重なりおかしな点、まとまりのなさがあるかと思われるが、ご容赦願いたい。

期待と不安を抱きつつ入学したのは、一九七四年（昭和四九年）の四月のことだった。林業科はわが国初の伝統を持ち、インテリア科は全国的にもまれな学科で、卒業された先輩方が関連分野で大活躍されていること、周囲からの生徒に対する期待が大きいことを聞き、身の引き締まる思いであった。

当時の母校は先輩後輩の秩序が明確で、質実剛健・山霊生英傑の精神が残っていて、生活面などのしつけは先生方の指導もさることながら、二・三年生から「挨拶の声が小さい、襟章が

付いていない、髪の毛が長い。」などとお説教やらヤキをいれられた。

また、特に印象強く残っていることとして応援歌練習がある。教室で先輩が応援歌を披露し「明日までに覚えてこい。」と言われ、必死に覚えようとするが次の日までには間に合わない。

校庭での全体練習では、巡回してきた応援委員に顔をのぞき込まれ、頭の中が真っ白になって歌えず、当然のようにヤキをいれられ、発声練習から一人で歌うなどの特別メニューとなる。

やっと歌えた頃には日も暮れて、周囲にはずいぶんと迷惑を掛けてしまった。こんなこともあってか、歳がたつごとに記憶が薄れる中でも、「弦月高き」や「凱歌」「いざ来たれ」「勝利」などはいまだに記憶に焼きついている。

上級生は怖くもあり厳しかったが後輩への面倒見もよかったように思う。

学習面で一番の思い出は、実習で家具を製作したことである。二年次まで作品展が年二回で、それに向けた授業が展開されていた。

上級生の作品はプロ顔負けでそれを目標に頑張ったものである。一年生の当初は基本中の基本である工具の名称や使い方を勉強したが、特に刃物研磨は苦労した。

裏押しが難しく、思うように出来ず何度もやり直して、ついにはべた裏にしてしまったり、仕上げたつもりが刃先が丸かったりということが多かった。

授業担当の大西貢先生は妥協を許さず、やり直しの連続であった。指先の皮が剥けて血がにじむ、ようやく合格をいただいたときはうれしかった。

刃物研磨が終了すると、工具を用いて組み手や継ぎ手の練習で、このとき日向昭夫先生から「機械のように正確にできて、素晴らしい。」と誉められ、これがきっかけで自信が持て、実習に対する興味・関心が強くなったと思う。

その後、二年生、三年生と進む中で前述の二人の先生と奥原万喜男先生、柿崎庫之助先生、中野稔先生の情熱溢れる授業（口より先に手や足が出てくるなど）で家具作りをたたき込まれた。厳しい中にも楽しい授業だったと思う。

今でも新聞の広告に家具が載っていたり、ホームセンターなどで家具を見ると、つい構造や材料、塗装、部材の仕上げ具合などをチェックしてしまう。身体に染み込んでしまっているらしい。当時、洋服ダンスや書棚、飾棚といった大型家具は、主な部材にフラッシュ構造を取り入れ、家具の表面は銘木を印刷したシートを貼って塗装をするという技法が主流であった。

塗材も現在のようなポリウレタンではなく、クリヤーラッカーを塗り、仕上げにタンポ摺りと研磨を施していた。今では、こうした技法の家具は、市場ではなくなって歴史化してしまった感がする。

ところで、二年生で製作した整理小ダンスは手元にあり、三年生で製作した食器戸棚は実家に残っている。それを使う度に

少なからず当時を思い出す。「一生もの」の良い記念品である。

思い出はいろいろと多く書き尽くせないが、最後に今感じ、そして思うことは「移り行く時代の流れの中で、母校の歴史の中にほんの僅かではあるが、われわれが存在し、永遠に生き続けて行く」ということである。

二十一世紀を迎え、次代を担う後輩諸君が、この新時代にふさわしい歴史を創造し、力強い旗手とならんことを期待し、また、母校の躍進と発展を祈念申し上げて終わりとしたい。

（了）

次代を任なう山林健児へ

七五回　近藤　千秋

私が「山を愛す」の碑を後にしてから、二二年が経とうとしている。もっとも自分の子どもが高一、中三にもなるのだから当り前の事である。アルバムを引っ張り出して、当時の自分と子どもをラップさせてみるのだが、どう見ても今の子どもの方が、大人びてみえてしまうのは私だけのことであろうか。

現代は物質的に豊かであり、多種多枝に細分化された社会構造の中では様々な職業が成立し、生き方に対する考え方や見方も多様化している。

反面、戦後着実に形成されてきた、日本型の社会（会社）組織並びにシステムが崩壊しつつある。ある意味では自浄作用であり、価値観の相異、年功序列から実力主義へと労働評価の変革がなされたゆえんである。

その結果、子ども達に伝えるべき価値に確信が持てず、躾への自信を失った我々大人社会は、まさに「次世代を育てる心を失う危機」に直面している。今後、我々大人が率先してモラルの低下を是正し、学校、地域社会、家庭、さらには企業、メディア、そして国や地方公共団体が、それぞれの立場から成すべきことを、ひとつづつ実行してこの危機を乗り越えていかなければならない。

文部省は、知識偏重から体験重視への移行を打ち出し、二〇〇二年度（平成十四年度）から実施される完全学校週五日制の下、ゆとりの中で一人一人の子どもたちに「生きる力」を育成することをねらいとして、学習指導要領を改訂した。

「生きる力」とは、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力。自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性とたくましく生きるための健康と体力。と定義されている。

何をいまさらと「山林ＯＢ」は感じる事であろう。この百年の間「山林」は、演習林実習、木工実習などの体験学習の中で、自然との共生、自主独立、協調協和、個性の育成等、当り前に行ってきた事だからではないだろうか。

木曽から世界のＳＡＮＲＩＮへ、というフレーズがあるようだが、アマゾン川上流にも、人工衛星からでもわかるような道路が建設され、環境破壊・環境汚染が地球上どこでも見られる今日、山を愛し、地球の緑と資源を守る人間教育と教授される「山林健児」に期待することは、まさしく国際感覚を養い、地球サミットのリオ宣言、ラムサール条約釧路会議のワイズワースで確認されている、人類の未来に輝かしい環境保全を契るべき実践を行うことである。

松商学園と共に県代表として甲信越大会に出場。１回戦相川高校（新潟）と対戦し敗退。　（巾崎栄・73回・蔵）

近い将来、世界の檜舞台で活躍する後輩たちの姿を夢みて筆を置く。一九九九年九月佳日　（了）

野球部の思い出

七五回　小桂　成人

創立百年の記念誌の発行にあたり「在学当時の思い出」特に部活についてということで木曽山林高等学校の名前の入った茶封筒が届いた。

私は、昭和五〇年四月に入学し五三年三月に卒業をした。卒業回数では七五回で高等学校としては三〇回目に当たる。原稿用紙を前に指折り数えると既に二五年の歳月、四半世紀が経過したのかと自分ながら驚いている。

そういえば、「弦月高き駒の峰、空澄み渡る朝ぼらけ……歴史は長し七〇年」と声を張り上げて応援歌を歌ったものである。

新しく新調した学校カバンを下げて蛇腹の帯のついた学生帽子をキッチリとかぶり、一年に入学した。数日後に中野重則監督の軟式野球部に入った。

三年生が六人、二年生が十人、新入生が七人の野球部であった。グランドは二階建ての学生寮の前に、大きな松の木（現在もある）があり、その前にバックネットがあった。

黒川の流れる方がライトで、フェンスまで七〇メートル位、

レフト側に体育館がはみ出していて、九〇メートル位あったように思う。

一、三塁のベンチは、ヒノキの丸太を半割にしてペンキを塗った手作りでバックネット側の一塁ベンチ後方が二人用の投球練習場となっていた。

狭いスペースを生かすように石を積んで土を盛り上げてピチャープレートがあり、その投球区域内は、小石を並べて仕切られ、白っぽいバラスが敷かれていた。キャッチャーの返球が少し大きいとピッチャーはボールにつられ後ろ側へ落ちてしまうことがたまにあった。

普段の授業の合間の昼休みには、一、二年生が交代でグランド整備をすることになっており、内野を中心にポコンと盛り上がったピチャーズマウンドを、まず下の方からプレートの方へ鉄のトンボで土を円錐形に押し上げながら均した。その後、円をかくようにして内野からベースの外側まで均した。

段々と暑くなり六月に入ると合宿があり、米、野菜を持ち寄って猛練習が始まった。先輩のOB方も肉の差し入れなどを持って応援に駆けつけてくれた。

われわれ一年生は、当番で真っ黒なユニホームのまま山岳部の大きなリックサックを借りて背負い、上町まで買い物に出かけた。練習を終えての夕食は、ジンギスカンの焼肉を全員で囲んだものだった。

その長い鉄板は、トイレからほど近いところにある渡り廊下の横断排水溝のふたを裏にしてザッと洗い「焼けば大丈夫」の一言でガスコンロふたつに載せてやった。

食べ盛りの焼肉会は、肉がしっかり焼けるまで辛抱するものは誰もいない。立ちひざで構えて、もうすぐ焼けそうな肉の上には三、四膳のはしが待ちかまえていて、文字どおり弱肉強食を勝ち抜いて練習に取り組んだ。

その年は、巾崎栄主将を中心に長野県大会に準優勝し、新潟で行われた北信越大会に出場した。秋の新人戦も三連続となる準優勝を飾りシーズンを閉じた。

シーズンオフになると、ユニホームを作業服に着替えバットをスコップに持ち替えて「体力づくり」と称して野球部から土木部に変わった。

シーズン中、雨が上がってもグランドに大きな水溜りが残り練習できないことがあったので一塁ベース盤の下に大きな穴を掘ることもした。

チームの一人を選んで、その身長分をみんなでつるはし、スコップ、竹箕、一輪車を使って何日もかかって大穴を掘り上げ、更にそこから枝線を二塁や外野の方へも堀り進んでから、学校のジープを運転してもらい近くの幸沢川から砂利を集めてきて埋めて表面を仕上げた。その後は水の溜ることはなくなった。

もう一つは、内野の改造に取り組んだ。公式球場ではピッチャープレートからファウルラインまでの傾斜があり内野ゴロやバンドの打球が外側へ切れながら弾むのに、山林のグランド

はマウンドだけがポコンと盛り上がっているので内野のバウンドに変化がなく大会の時に「判断を誤ることがある」とのことから、同じように数年前、先輩が盛り上げてくれたというマウンドのまわりに土を盛り均しては更に盛って、テニス部のローラーを引いて締め固めて理想的な形に仕上げたものである。

この年のチームは、針間主将を先頭に、エース松井さんを擁し内外野の守りも堅く、練習試合では強豪を倒しており「全国を狙えるチーム」と言われたが夏の県大会では勝利の女神は微笑まず、県代表には惜しくも届かなかった。

私が二年生の秋に新体制となって二年生四人、一年生六人のチームで新人戦を行いS校に敗れた。

昭和五一年十月二三日（土曜日）小春日和の暖かな日であった。いつものようにグランドに出て練習していたが、中野監督がビニール袋と銀色の金属バットを手に下げてグランドに現れた。

袋の中身は、十個位の硬式ボール、バットも硬式用の少し重たく感じるものであった。みんなが交代でバッティングの感触を試してみた。打球の音、鋭いバウンド、グローブの中の手の痛さなど今までにない感覚に驚いたり、同時に興味を持ったりしたことが思い出される。

「硬式ボールで野球をやってみたい」チームのみんなの意見も興味半分、不安半分というところであった。冬場は毎日、黒川荘までのランニングを十人がしっかりと列になって走り、ウェイトトレーニング、新聞紙をテープで巻いたボールのティーバッティングなど基礎練習を繰り返し、年末年始の五日間以外は毎日練習を続けた。

翌年五二年二月十二日に新しく「木曽山林高校ＯＢ会」が設立され硬式野球部へ向けての組織固めも大きなうねりのように進んでいった。

昭和二十年代には硬式野球部であったことから「復活」と言われて、テレビ、ラジオ、新聞にも掲載された。そしていよいよ四月十七日、初の公式戦となる春の中信地区大会に出場し、Ｏ高校と対戦、一回の表、四球絡みで一得点したものの四回に七点を取られ結局十二対一のコールドゲームで終わった。

そしてその翌日から夏の大会に向けて練習が始まった。しかし、守備練習のノック受ける時にイレギュラーバウンドが多く何人かが前歯を折ったり、けがをしてしまった。

「これでは、まずい」ということになり、農林技師の岩井さんにお願いして、苗畑で使っていた耕耘機で昼の間に掻き起こしてもらい、夕方の練習時間を返上して、みんなで土を集めては、斜めに据え付けたふるいにスコップで土をすくいあげて小石を取り除いた。

何日か後に監督さんが電気モーター付の土ふるい機を借りてきてくれた。見た目にはポンコツ（貸していただいた方に失礼）であったが、一たんスイッチを入れるとこれが至極すぐれ物で、さらさらな土が下にうれしくなるほど、どんどんたまり、

小石は先端に置いた一輪車にたまって作業は一気にはかどった。外野の方までやっていると、一学期の中間試験の直前までこの作業についやしてしまった。

夏の甲子園大会中信予選は、松本市営球場でK高校と対戦し、途中まで三対二でリードしていたものの八回裏に逆転を喫して八対五で敗れ、三年生四人の夏は終わった。

昭和五三年三月、中野監督さんから記念の盾と祝健闘と書かれたボールをいただき、後輩に見送られながら卒業した。

その後もグランドに顔を出した。すると、後輩たちのユニホーム姿を見てびっくり、腕、足、尻周りがひと回りもふた周りも大きくなっており、冬場の努力が見て取れた。

そのガッチリした体に監督と常時OB四、五人が猛ノックを雨あられ状態で打ち、電車通学の終電車がすぎても練習は真っ暗になるまで続き、OBの自動車で各家まで送った。

六月の合宿には、駒澤大学野球部から小森主将をコーチに迎え体力トレーニングからフォメーションの練習など第一線の技をどんどんと教えていただいた。特に梅雨のどしゃ降りの中でも「当然、こういう場面もある」と言って田んぼのようなグランドでもノック練習をして精神面でもとことん鍛えられた。

そして、小森コーチの口癖は「グランドの神様」で、選手のランニング中などわずかな合間にも一年生と一緒になってトンボで土を掘り起こしてはならして石を拾い集めていた。

また守備練習が始まる前には、全員を集めてはグランド整備

●コラム　実習の思い出

製炭実習

三年A組　林　勲

現在、省エネ時代ということで、石油関係の燃料を節約しようと努力している。石油不足が問題化して、このようになったのだ。そこで今、石油に代わるエネルギーとして、木炭が見直されてきた。

そんなおり、木曽山林で製炭実習を行なったのである。自分としては、炭は使ったことはあるのだが、焼くところまで見るのは初めてであり、まさか自分達が焼くとは、遠山先生が製炭をやるというまで思ってもみなかった。

製炭実習は、最初思っていたよりも、いざやってみると、結構手間がかかるものだ。炭窯をつくるのも時間がかかった。いよいよ窯ができ、材を入れて火をつけたときは、「なんとかうまく炭が焼ければ」と思ったものだ。やがて数日たち、いよいよ炭出しだ。窯の口を開け一つ一つ取り出すと、最初、炭らしいものが出てきた。そしてはっきり炭といえるものが出てきた。成功したのだ。

自分としては、この実習は大変よい思い出になるだろう。

『製炭実習』（一九七九年十一月）より

＊『製炭実習』は林産コースの諸君が製炭実習の感想文をまとめたもの。卒業後も大事に保管されている。林勲（77回）提供。

を必ず行なった。グローブやスパイクシューズの手入れにも細かく目を配って少しでも汚れを見つけると注意をした。

七月二三日の夏の県大会では、二回戦、春の県代表の強豪I高校を、一年生投手原と巾崎史生主将のバッテリーでみごとに勝ってから勢いに乗り、三回戦のS高校にも勝ち、ベスト十六までのぼり「木曽山林旋風」といわれ連日、新聞を大きく飾った。

真夏の太陽の下、球場のスタンドでは、必勝と書かれたヒノキ傘をかぶり、ヒノキの枝を手に持って、大勢の駆けつけてくれた人達と太鼓をたたいたり、大きな声を張り上げて応援した。

昨日のことのような、今は昔の話となったが、その頃を知る者が数人集まると、相変わらずつまみがなくても一晩中酒が飲める。

（了）

学び舎の思いで

七八回　児野光九仁

木曽山林高校一〇〇周年おめでとうございますと申しあげたい。歴史と伝統ある我が母校に更なる偉大な一ページが刻まれたことを感慨深く思う。果敢なる青春時代を懐古してみるのにこの一〇〇周年は実に絶好の機会と言える。

この原稿を書くのに当たって、当時の卒業アルバムを引っぱり出してみた。一部変色した厚紙のケースに収まっている白いアルバムは色あせることなく、当時の記憶を少しずつよみがえらせてくれる。

表紙に金文字で印刷された「１９８１」の数字が、卒業から二〇年経ったことを告げている。懐かしき青春の学び舎、共に学んだ仲間たち。曖昧な記憶をたどると、楽しかったこと、苦しかったことがたくさん思い出される。

山林高校の特色は何だろうか。一日中机に向かつて学問を享受するだけでなく、実際に山へ入って実技を習得すること、これに尽きるのではないか。育苗、植林、育林、伐採、測量、どれをとっても頭と体で覚える、正に「実習」である。

他校には真似のできない「体を張っての実体験」から技術の習得にとどまらず、共同作業という形の中で、仲間と協力しあうことの大切さ、助け合うことの大切さを学ばせてもらった。

話は変わるが、かつての木曽東高等学校が健在の頃は郡下唯一の女子校ということもあり、また、山林高校はその学業内容から男臭さ以外の何ものも感じられないことから、男子校と見られていた部分があった。私が三年生の頃、学年にはインテリア科に女子がたったの二人いるだけであった。今の山林は変わったなぁと思う。当時と比べると違う学校みたいだ。でも女子生徒が作業服を着て実習している姿を見ると、「これも時代だな」などと一人うなづいてしまう。

私の年代も十分「おじさん」になった。でも気持ちはいつで

も当時のままのつもりでいる。学校の雰囲気は変われども山林高校の精神は変わらない。山林健児であることに誇りを持っている。もう一度言わせてほしい。偉大なる一〇〇周年おめでとうございます。

（了）

農業クラブ福岡大会の思い出

八一回　渡辺　孝

第三四回日本学校農業クラブ福岡大会は、昭和五八年十一月九日から三日間にわたり、久留米市を中心にして、全国から生徒約五千名、教職員約一千名が参加して行われた。

このうち、農業鑑定競技は三池農業高校に選手九五〇名が集い、八学科十一コースで行われた。

私が出場する林業科は、本県五名をふくむ全国各県の代表五八名が、四〇の鑑定問題（内三者択一16問、四者択一11問、記述式13問）に挑戦した。

出題された質問内容は、林業全般・木材加工・農業・測量・動植物等広範囲にわたり、ことに最後の三問題は材積計算・林道最小半径・トランシットの水平角読み取りなど実技の試される問題も含まれていた。

こうした難関をほとんど完全正答しないと上位入賞がおぼつかない。全国の精鋭の中で最優秀賞獲得がいかに難関であるか、過去に出場された先輩の方々の苦労等々考え合わせると自分の置かれた立場の重大さに思わず身の引き締まる思いであった。

学校出発以来競技が開始されるまで、緊張感につきまとわれはしたが、今まで「自分なりにベストをつくしてきた」という気持ちだけは失わないようにつとめていた。しかし、会場に入ったり大勢の人波に接すると、それが不安にかられてしまいやすくなる。

私は、今まで自分が重ねてきた事の数々を思い出しては、自分を自分で激励することにつとめた。

私は、学校代表になる前までは、授業で習ったことを少しでも多く、そして確実に覚えるようにと努力してきた。また、できるだけ多く実物を見るようにも心掛けてきた。そして、実物の特徴、用途などをノートにまとめることを継続してきた。

また、林業科の生徒として身につけておくべきと思われる常識は、なるべく幅広く覚えるよう情報収集を大切にした。

学校の代表になってからは、目標を立てて勉強を進めるようにした。特に木材、樹木の出題が多いので、毎日毎日注意して観察することも取り入れた。コツコツ努力すること、これが大事だと毎日の学習の中で確信するようになった。

大会では、応用問題が難しかった。冷静になれば解ける問題でも、雰囲気にのまれて解らなくなることもあり得る。あがるのは仕方ないと思う。でも、ふだんから自信をつけ、自分を信じることが大事だとこの大会でしみじみ実感した。

わが校は日本三大美林のひとつ、木曽にあるから身近なところに実物が豊富にある。校内競技の一週間前に、鑑定係の生徒が、それこそ手当たり次第に実物を集め出場者に学習が出来ているか各自が確認するよう呼びかける。

集めた実物は、林業棟の中の特別教室に展示して公開する。ビンにつめた樹木の葉や木材が、約一五〇～二〇〇点陳列される。この中から応用問題を出すわけである。校内大会は、六月と九月に行い、合計点数一位が全国大会出場選手となる。

わが校は農業クラブ加盟後二年目で優秀、三年目と四年目は連続で林業科最優秀賞の栄誉に輝くことができた。このような成績を残せた背景には、前述したように環境に恵まれていること、また、林業科の他にインテリア科があって、木材加工の出題も実物が見られること、歴史が古いので先輩の残した資料がたくさんあること。そして一度最優秀になると「来年もぜひ！」と後輩の目標が高まることがその理由ではないかと自らを振り返り痛感する。

あの感激の日は二〇年近い過去のことになってしまったが、歴史の古い学校の一学徒として若い日の情熱を傾け、それが全国の高校生たちと覇を競い、全力を出し切れたことは終生忘れることが出来ない。

こうした思い出を、母校の百年誌にとお計らいいただいた事を謝し、創立以来一世紀を迎えた母校がますます発展されるよう願ってやまない。（了）

山林から

八三回　青木　千春

高校入学は、人生の原点となっている。それは、卒業して十二年となるが、山林で学んだことが考え方の基礎となっているからである。

振り返れば、なぜ山林への入学をきめたかというと、物事の捉え方が直接的だったその頃の私は、国語・社会などの文系教科よりも数学・理科といった理系教科が好きで、中でも数学が少しだけ得意だったため山林へ行き測量を学びたいと思っていたからである。測量というのは、数学が基礎となっているもので、そのような要素が強いのだろうと勝手な思い込みがあり、測量に大変興味があったからである。

確かに測量とは、数学的要素が強い学問であったが、そればかりではなく大切なことを学んだ学問のひとつであった。

真夏の太陽の下、誤差をなるべく出さないように行なった実習。許容誤差内でなければまた再測し、同じところを出来るまで続けた。測り手一人が集中してもダメ、ポールを持つ者も記録者も皆、集中しないと、少しのミス「甘さ」が重なっていけばやがては大きな誤差となって現れる。「少しぐらいなら」という曖昧な気も許されない。許容誤差内に納まれば心の底から良かったと思う。このようなことから、ひとつの仕事をやると

いう事は、一人の力ではなにもできず、協力してやり遂げることが必要条件であり、その中で人を活かすことにより自分が活かされるという事を学んできた。

測量以外の実習でも、大切なことを学んでいる。それは、育林の森林土壌調査からである。森林土壌調査とは、ただでさえ登るのに辛い演習林へスコップを持って入り、一メートル×一メートル程の断面が出るように穴を掘り土層を調査することである。

この作業では広く断面を出すのに苦労した。そして調査より、穴を深く掘れば穴の直径は自然に広がっていくという事を学んだ。

どんな事でも興味を持ちなるべく沢山浅く広くやった方が良いと思っていたが、ひとつの事を深く研究していくという事は、深く掘り下げれば掘り下げる程いろいろな事に手をつけることになり、結果として前述を実現してかつ不動なものとして残って行くということにつながる。

大学を卒業して、ある建材メーカーの営業としての職に就いた時、それを実感した。業績をあげるためのカタログを手にして商品のＰＲをする。

その際に商品の良さを製造・開発した立場のみで説明するだけではうまくいかない。価格を下げても、何か他の物を付けても、その時だけで長くは続かない。

これは商品知識が少なく、他の物や事に頼っているからである。成功させるためには、ひとつの事「商品」について掘って掘り下げていくことが大切だからである。

具体的には、開発した理由や改良した点などの売る側の立場だけではなく、他社商品との比較、自社製品の欠点、建築業者の評判など買う側の立場になって商品知識をつけることが必要である。そうする事により、商品について深い知識を持ち、相手から信頼され次の仕事に繋がっていくようになった。

物事は単に直接的に捉えてはいけない。隠されている大切な事があるものだから。それを知るのに、時間の経過や経験・探究など必要であり解っていくものである。何事も直接的に捉える事しか出来なかった山林時代の経験は、これからの物事を実践していくうえでの考え方の基礎になっていく。今後もまだ解っていない隠された大切なものを知るべく行動に換えて行きたい。

また、時は流れても山林で学ぶことは、後になって活きていくものであり変わらないものであるから、今後も山林を大切にしていきたい。

（了）

思い出の記

八五回　吉田　薫

木曽山林高校入学式当日。緊張で静まりかえった教室に、勢

いよくドアを開けて入ってきた担任の先生を見た瞬間、私は昔へタイムスリップした。

まだ小学生の頃、地元ではやまびこ国体の相撲競技が開催された。当時は今ほどサッカーが盛んではなく、友人は皆、野球か相撲に熱心だった。

そんな私達の前で、長野県の期待の選手として紹介されたのが、今目の前に立っている先生だった。大学時代は相撲部キャプテン。国体では上位入賞。皆にやさしく相撲を教えてくれるその人は、私の中ではちょっとしたヒーロー的存在だった。

その人が今目の前に立っているわけだから、本当に驚いた。おそらく、あの静まりかえった教室の中で、こんなに驚いた人はいなかったと思う。

先生は多くを語る人ではなかったが、皆からの信望が厚かった。時にはふざけたり、時には怒られもしたが、いつも真剣に私達と向き合ってくれた。高校三年生の秋、進路の相談で先生のいる研究室へ行った時も、先生は一人一人の書類を必死になって書いていた。仕事以上に生徒を思う気持ちが伝わり感激した。

先生とは高校卒業後、友人の結婚式で再会することになる。すでに七年の月日が流れていて、先生は他の学校に、私は指圧師の免許を取り、自分の治療院を開業していた。

先生は変わらず元気だ。だが、相撲の現役は退き、長野県の監督になっていた。私は仕事のインターンなどで忙しく、先生には年に一回、近況を手紙に書いて送る程度だった。

先生はそんな私にトレーナーとして選手と一緒に国体について行ってくれないかと話してくれた。私は感激にふるえ速決賛意を表明した。

それから二年連続で、長野県から相撲の日本一を出すことになる。選手のほとんどが山林高校の卒業生で、楽しい後輩ばかりだった。聞けば私のいた高校の時と雰囲気は変わったらしいが、それが良い方向に変化していることは、後輩達をみればわかる。

私の高校時代は一言で言えば出会いだと思う。恩師との出会いが、私の人生に大きな影響を与えている。先輩達から後輩へ、山林高校での出会いが、色々なかたちでつながり合い、さらに大きな輪になっていってほしい。

（了）

山林高校への想い

八九回　熊田　友美

地元木曽福島町で就職をし、生活をしているため山林高校で行われている行事が耳に入って来たり、また生徒の登下校の姿を見ていて自分の高校時代を懐かしく振返ったりする事がある。

そんな中で山林高校が創立百周年を迎えると知り、私が在学中九〇周年の式典が行われたのに、もう十年もの年月が経つの

かと時の流れの速さをつくづくと感じている。
思い返せば、在学中ある先生に「高校時代が一番たのしいんだぞ」と言われ、その時にはそんなものなのかなあと思っていたが、今なら「本当にそうですね」と実感をもって言える。
私が中学卒業の時、なぜ山林高校を選んだのか。私はある学校への入学を決めていたが、自分の中で何かが違う気がしていて最後まで進路について悩んでいた。
そんな時にふと山林の入学案内を目にし、自分の将来を見つけるのに、今までと違った一面で将来を考えてもいいんじゃないのかと考えるようになった。普通科の高校では味わう事の出来ない実習や勉強をする事によって、自分でもまだ気づかない自分を見つける事が出来るかもしれない、それから将来を見つめてもいいのではないかと思い、進路を決める最終ギリギリで山林高校を選び平成元年、木曽山林高校インテリア科に入学した。
学校での授業は、それまで私が勉強に対して不安であった事も、先生方が分かりやすく、また理解できるまで教えていただいた事により、やればできる！という事を私はこの学校で学べたと思う。
これは決してマンモス校では味わえない事であり、あまり知られていない山林高校の良い所ではないかと考えている。
また、三年間の実習で作り上げたものを今も大切に保管したり、日常生活で使ったりしている。この作品についても三年間という短い年月の中で、自分が学び身につける事ができ、そして自分の力で作り上げた私の大切な財産である。
実習の他にも特殊な科目をいくつか学んだが、私はその中でも色についてすごく興味をもっていた。卒業してからも、もっと勉強してみたいと思い趣味としてカラーコーディネータの勉強を通信教育で学んだりしている。
私は山林高校に入っていろいろな事を学び、入学する時に思っていた、自分でも気づく事のなかった自分の力をこんなにもたくさん見つける事ができたのだ。
しかし、勉強についても実習についてもきっと「ゆとり」に出会わなければ充実した学校生活は送れなかったであろう。「ゆとり」とは、私達仲間のニックネームです。この名も先生方が名付けて下さった。私はこの学校で大切な親友を二人見つける事ができた。この二人に出会えた事で私の高校時代が本当に楽しく思い出に残るものとなった。
私が山林を卒業してうれしいなあと感じる事がある。それは卒業しても恩師の先生方がいまだ学校に残っておられて、街でお会いしても気軽に声をかけて下さる事である。
これは、わがままな事だが、母校というものは、いつまでも変わらずにあって欲しいと思うのが本心だからである。いつ学校に行っても、昔のあの時のままであってほしいと願ってしまうものである。
しかし、学校も変わっていく所もなければ成長はない。生徒

のみなさんがこの学校を愛し、より良い学校にして行ってくれる事が、私達卒業生にとってなによりもうれしい事である。

私は今でも、そしてきっとこれから先もずっと、山林の卒業生であることを誇りに思っていようと思う。なぜならば、この木曽山林高校でとても素晴らしいものと、また人達に出会えたからである。

いつか自分の人生をゆっくりと振り返る事が出来る時、ゆとりの三人で、あの楽しかった高校時代を懐かしく思い出し、語り合いたいものである。（了）

木曽山林高校とかけがえのない友との出会い

八九回　澤柳（松村）清子

木曽で生まれ育ち、四方を山に囲まれた中で少しでも樹木の事が知りたくて、木曽山林高校へ志望し入学させていただきました。

初登校の日、教室に入ると回りは男子ばかりで、これから三年間やっていけるだろうかと不安になりました。四〇人ほどの中で女子は七人いましたが、中でも赤岩陽子さんと出会い、彼女と一緒に体験した思い出を書こうと思います。

赤岩さんは楢川村の平沢から列車通学していました。いつも笑顔で明るい人だなというのが第一印象でした。話しかけるとお互い時代劇が好きなことや、冒険ものの映画が好きといったことから話がはずみ、友達になりました。

赤岩さんは私に「まつきち」と、あだ名をつけて、三年間呼ばれてきましたが、今でも（現在二七歳）私は「まつきち」と呼ばれています。

三年間の学校生活はいろいろありました。そんな中でも一番思い出に残った出来事は、実習の授業中のことです。

二年生の十月のことでした。広島への修学旅行が近づいていて、それが楽しみで、気持ちが浮かれていたのを覚えています。午後から下草刈り実習と同時にゴミ拾いもあり、作業服に着がえ、下草刈りカマとゴミ袋を持ち、演習林に入っていきました。

私は赤岩さんと組になり、夢中になって山の中を進んでいくうちに、周りの人達や先生の姿を見失い、二人して山の中で迷子になっていました。大きな声を出しても誰からの返事もなく、聞こえてくるのは鳥の声や樹木が風で揺れる音でした。

尾根へ出たのでどこか分かる場所はないかと歩いていると、私の家が遠くに見えてきて、演習林の一番奥深い所まで来ていることを知りました。暗くなる前に山を下りられるかと、二人とも不安になり、その日の朝、きのこ採りに行った人が近くの山で行方不明になっていることを思い出し、さらに不安になっていました。

歩き続けているうちに日が暮れ始め、山の中は暗さを増し、足もとに鳥の死骸を見つけ、もう頭の中はパニック状態でした。

その後、何とか見覚えのある道を見つけて山を下りて行きましたが、他のみんなや先生達が心配しているだろうと思い、職員室へ行くと、「お前達、今まで山にいたのか。みんな帰ったぞ。」と、言われてしまい、緊張していた思いが一気にとけて、山になったゴミの袋とカマを持ち、しばらくの間、動けずにいました。

この出来事があったせいか、赤岩さんとのきずなが深くなりました。修学旅行も無事に行くことができて、ちょっと浮かれすぎていたのかもしれません。演習林で迷うなんて笑われそうな話ですが、山の怖さを知り、そんな中でも空き缶やゴミがたくさん落ちていて、拾ったなと思いました。

今、私は結婚して飯田市に住み、赤岩さんも結婚され武居さんに苗字が変わり松本にいます。二人とも木曽を離れて生活していますが、十年以上経った今でも演習林での思い出を懐かしく話し合っています。

今なら携帯電話があるのにね、と笑い話になっています。木曽山林高校でないと体験できない思い出と、かけがいのない友達ができて、最高の学生生活でした。

十年以上経ちましたが、「みんなと会いたいね。」と、武居さんと一緒に高校時代の写真を見ていました。（了）

在学当時を振り返って

九〇回　寺沢文恵、浅村千春、高谷祐子
長野真理、庄原ひかる、荻原実佳

今回、原稿の依頼を受け、高校時代からの友人六人と在学当時の思い出を振り返り、一言ずつ書くことにしました。

（まりお）高校生活で得たことは、大切な友達に出会えたことです。ねっ千春。

（千春）そうだね。今でも時間が合えば友達同士集まって、遊びに行ったり、ご飯食べに行ったりしています。高校時代で一番楽しかった思い出は、お弁当の時間と家具を作ったことです。家具は、今でも使っていますが、それを見ると沢山のことが思い出されます。苦労もあったけれど、仕上がって行くのがうれしくて、家具を作る授業が楽しみになりました。友達の失敗したのを見て笑ったら、自分も間違ってたことも多々ありました。ねっ祐子。

（祐子）うぅーん。そうだね。人の失敗は笑ったね。卒業した今でも笑いのネタだもんね。でも、祐子の一番の思い出は、毎週土曜日にはインテリア科の職員室でお世話になった事かな？育ち盛りの私たちの胃袋は、いつも

満腹に満たされていたもんね。（こんなこと書いたら怒られちゃうかな？でも、もう時効だよね）お陰で、高校時代の写真を見るのが怖いもんね。ひかるは？

（ひかる）「日向ぼっこしたこと！」あと「飲んでガラス割ったこと！」

（まりお）飲んでガラス割ったことは使えないんじゃないの？「日向ぼっこ」はしたね。インテリア棟のあの犬走りのところ。でも「日向ぼっこ」っていったら千春だけどね。

（実佳）そうそう。体育館のところで寝ちゃって授業に来なかったんだよね。そう、思うと、卒業してからあっという間だったね。高校時代って、今思うと楽しかったよね。あの頃のたくさんの思い出、そして何より若さが懐かしい。もう、椅子を作ることもないね。まりお。

（まりお）椅子？そう、もういすを作ることもなければ、自分で家具を作ることなんて家具職人にでもならない限り二度とやることなんてないと思う。真理は高校生活を一言で言うと…？

（真理）「毎日笑って過ごせて楽しかった。みんなのおかげで高校生活が楽しめたと思う」かな。

在学当時の思い出といっても、授業の内容や先生のことは、ほとんど印象に残っていないし、毎日友達と一緒にいる時間が長く、それが一番楽しかったと思う。

高校在学の三年間で辛いこと、悲しいことがあったときもみんなが居た。今もそれが変わらないという自信がある。そんなかけがえのない友人を与えてくれたのが私たちの高校生活だったと思う。

（了）

卓球の思い出

九二回　山本　仁

「今、頑張ったこと、毎日練習し、やり通したことは人生の糧となる。」在学中部活動の練習のあと卓球部顧問であった塚田先生によく言われたことを今でも思い出す。

それは今頑張ったことが社会に出てから、何かくじけそうな時、高校の時、あれだけ練習を頑張ったじゃないかと励みになるという意味で話されたのだと思う。その言葉は今も私の頭をよぎる。

私が木曽山林高校に入学したのは平成四年、上松中学校からの入学である。入学した理由は父が山林高校の卒業生であったので勧められたことや、中学校より始めた卓球をやりたいという理由からであった。

林業高校へ通うのだから林業を学ぼうという考えは、その当時はなかった。中学時代は卓球が好きで好きで、練習したくてしょうがなかった。中学校を卒業してからも卓球をやりたいと

いう思いに変わりはなかった。

今でも忘れないことがある。高校入学までの春休みのことである。一度、山林高校へ練習に行く機会があった。あの頃の卓球部の練習場は中庭から、コンクリートの通路を通りインテリア科NCルーターのある建物と、現在全校集会をする体育館の間辺りにあった。

練習場の中は暗く、体育科の先生の休憩室（現在の柔道部練習場）とつながっていた。練習場へ入ると塚田先生が現われ、何を話したか思い出せないが「よう来たな」というような事を言われて練習したのを思い出す。

塚田先生は、上は襟のついた服の襟を立てていて、下は普通のズボンであった。手にはゴルフの五番アイアンを持っていた。最初の印象は怖い先生に見えたので、もしかするとこれで、「練習中にたるんでいる」と叩かれるのかな、と恐怖感を抱いたことを今でも覚えている。

しかし、実際は練習に情熱を燃やし、経験と知識が豊富で、特に基本に忠実な先生であることがわかってきた。後になってよく感じることであるが、何をするにしても基本が大事で、先生の言われた事の大切さを痛感する。

試合にしてもカッコよく見えるプレーは見た目もいいし強くも見える。しかし、いざ試合をしてみると基本に忠実なほうが、自信につながり、それが生きてきていざという時心強いものとなった。

思い出されることは、部長の号令に集合し、先生の挨拶、部の床の掃除、卓球台の雑巾掛け、毎日のメニューをこなすこと、これらの総てが規律に基づき行われることによって向上心が一層高まるということである。

良き先輩方に恵まれ、卓球をうまくなろうと思う人たちが多く集まっていて、先生の卓球の指導の情熱に練習を頑張ろうという気持ちで一杯であった。

特に高校生活最初の高校総体、この大会は思い出深いものとなった。団体戦一回戦、南安曇農業高校に自分が負け、先輩たちの頑張りで突破。その時の申し訳ないという気持ちから頭の中は真っ白になってしまっていた。

団体二回戦、対深志高校戦では一回戦突破で県大会への切符を取ったという安堵感もあり、自分の試合をしようという考え方に切り替わっていて、何か吹っ切れていた。

試合中は、もう周りのギャラリーで見ている人たちは視界に入らず、卓球台と対戦相手、そして卓球のボールだけが見えていた。集中している時ということはこういうものなのだなと実感したものである。後にも先にもこれだけ集中した試合をしたことはない。

先輩方の「もう一本」というかけ声にも励まされ、セットカウント二対一で勝ち、団体戦三対一の勝利によってベスト四に駒を進めることができた。その時は、塚田先生が握手を求めて手を差し出してくださった。

この時の握手は「頑張ってきてよかった」という思えるものであった。そしてこれからも頑張ろうという強い気持ちの引き締めになるものであった。

握手の後先輩から「塚田先生は余程のことがない限り握手はしない」といわれ、余程私の一勝というのはチームのムードを変える意味でも大きかったのだなと感じた。

後になってわかったことであるが、相手の高校が一人目にエースを送り込んで来ると予想していたので、一年生の私が捨て駒として選ばれた訳である。素晴らしい体験になった。今思うと、日曜日も長期休業中も練習で明け暮れ、結構卓球漬けの生活であった。練習が終われば急いで電車に間に合うよう走ったりもした。

そういえばあんなことがあった、こんなこともあったと尽きぬ思い出が頭の中をよぎっていく。

その当時、通学路のゴミの投げ捨てが学校全体の問題になっていた。そこで、山林高校から木曽福島駅までの通学路の清掃をすることになり、生徒会で全校生徒に呼びかけたところ大勢の人たちが集まってくれた。卓球部でも積極的に協力してくれてとてもうれしかったことを思い出す。

良き先輩方や友達に恵まれて、木曽高校卓球部員の方々と交流したり、大会を通していろいろな経験をすることができた。小さなピンポン玉に数々の思い出を残せたことが私の励みになっている。

卓球を続けることができて、本当に良かったと思っている。

（了）

心に生きる

九二回　熊田　正

母校、木曽山林高等学校を卒業して数年が経ち、現在私は社会人となり、当たり前のように会社と自宅を行き来しながら日々を送っている。

私の仕事は、土質や地盤の試験及び調査をするものである。試験や調査という言葉がつくと、非常に堅苦しい印象を受けるのだが、実際は舗装されていないような道を歩いたり、土にまみれたりと意外とハードな仕事である。しかし、私はこの仕事に満足している。

ところが、時々なぜ私は今この仕事をしているのだろうと思うことがある。その答えはまだ出ていない。会社に入るまでの経過を簡単に語ると次のようである。

高校卒業後、大学（信州大学農学部森林科学科）へ入学。気楽に大学生活を送った末、今の会社に入社した。自分で言うのもなんだが、大学卒業するまでは体力に自信がなかったはずなのに、それが今では体力が必要な仕事を満足しながら日々を送っているのだからおかしなものである。

そんな事を考えているさなか、手元に一通の書類が送られてきた。送り先は木曽山林高等学校である。中には一〇〇周年について書かれたプリントと数枚の原稿用紙であった。どうやら思い出を書けとのことらしい。

文章を書くのは最も苦手であるが、これを機に少し思い出に浸りながら、前に述べた答え探しをしてみようと筆を執ることにした。

平成四年四月、木曽山林高等学校入学。正直言って私は、不安と期待で胸がいっぱいだったと共に、高校より更に先の進路についても頭の片隅に抱いていた。

それは、進学である。入学する前から推薦入学ができるということを知っていた私は、これを目標に高校生活を充実したものにしようと考えていたのである。

ところが、これがまたなかなか難しく、常に楽なことに流されそうになってしまう私には難関であった。しかし、こんな私をいつもバックアップしてくれる方々がいた。木曽山林高等学校の恩師達である。進学したいという気持ちを知っていた先生方は、一年のときから進学予備校のパンフレットを取り寄せてくれたり、手続きの手伝いをしてくれたりと本当に親身になってくれた。

二年の後半からは、貴重な時間を割いて特別講座を開いてくれたり、夏休みには勉強合宿などというものも企画してくれた。これだけの環境を作っていただいたため、私も一年のときから進学に向け前向きに歩み、大学入学を現実のものにできた。

また、先生方は様々な経験の場を私に与えてくれた。その一つが林業鑑定の全国大会である。この大会では、我が母校は毎年好成績を収めていたため、いざ出場できると決まった時には、語りきれないようなプレッシャーが私に圧し掛かってきた。

しかし、こんな気持ちを知ってか知らずか、先生方は私に自信をつけようと鑑定競技のノウハウを叩き込んでくれた。

何人の高校生が集まっているのかわからないほどのこの大会の中に私はいた。会場は四国。

こんな雰囲気は今まで味わったことがなかった。ところが私は、この時まるで緊張感を楽しむかのように驚くほど落ち着いていた。やるだけの事はやったという自信のようなものが心にあったのだろう。

鑑定も無事に終了し、優秀賞というお土産を手にしながら胸を張って木曽に戻った事、先輩方と同様な賞をこの手にすることができ、「ホッ」とため息をつき安心した事を今も覚えている。

この事があってから、私は少し場慣れしたような気がする。

私に大きな影響を与えたのは、恩師達ばかりでなく、木曽山林高等学校で知り合う事ができた仲間達も忘れてはならない。

彼らがいなくては楽しい高校生活を送る事はできなかっただろう。この学校では実習というものが非常に多かった。中には、とてもきつく嫌になるようなものもあった。演習林に入る事も

数えきれないほどであった。

しかし、仲間と共に汗をかき、助け合い、冗談を言いながら行う事により、普通に授業をこなすよりも数多くの事が身につき、自然と触れ合う事ができる実習のすべてが好きになった。

もちろん知らないうちに少しずつ体力がついていった事は言うまでもない。このほかにも仲間に助けられた事が沢山ある。こう考えると仲間の存存がこれほど大きいのかと驚くほどである。

数多くの恩師や仲間達、彼らに出会えた事が一番の思い出であり宝である。筆を執りながら強く感じた事がこれである。また、木曽山林高等学校に入学し、そして卒業した事が私の人生の大きな節目になっている事も確かである。何年も前の事柄をこれほど強く思い出す事ができるというのが、まさにこれを裏付けている。

現在の生活が充実している原因は仕事が楽しいからである。既に述べている事なのだが、ここに抱いた疑問の答えが少し解けた気がする。

自然に触れられるということで今の仕事と楽しかった高校での実習の思い出が一致しているからだろうし、様々な現場にいっても何とかやっていけるのは、多少だが場慣れしていることからも言えるだろう。

そう、木曽山林高等学校で体験した事が知らず知らずのうちに生きていたのである。何かを学び自分を成長させていくという事は、大学に入ってからも幾度となくできたと思っている。

しかし、自分で自分を成長させるための小さな芽がでてきたのは、心に木曽山林高等学校という大木が生きていたからであろう。今後の人生の中で、いろいろな壁が行く手を阻む事だろう。

だが私は、それらにひるむ事なく乗り越えるために努力し、自分を成長させていきたいと思う。なぜなら、いつも心に大木が生き、いつもどこかで見守っていてくれるからである。

（了）

思い出の記

九五回　大野田武史

私が木曽山林高校に入学したのは、至極簡単な理由からである。その当時、私は中学校でテニス部に所属していたので、高校でもテニスをやってみたかったので木曽山林高校へ入学した。

そのため、高校時代の思い出といったら部活動のことが強過ぎて、他の事はあまり覚えていない。

部活動ではいろいろな事を学ぶことができた。私は部長をやっていたので、初めはいろいろと苦労した。「本当にやっていけるのだろうか。」と、とても不安であった。しかし他の部員が協力してくれたおかげで、なんとか部を一つにまとめるこ

とができ、部をまとめていく難しさや部の上に立って指揮していく大変さを学ぶことができた。また、年ごとに自分たちが強くなっている事が分かり、結果が出てくると、とてもおもしろくもなってきた。

授業の方では、インテリア科だったので一年生の時は、主に基本的なことを学んだ。基本的な線、円の書き方などである。また、卒業作品となるものでは、くつ箱を作り、金賞をいただいた。最初はあまりにも大きすぎてとても苦労したが、作業をしている内に段々慣れてきて、スムーズに作業が進むようになった。そして先生の協力もあって、この金賞を取れたんだと思う。他にもいい作品があったのになぜ私の作品が取れたのか不思議なくらいである。

私は、林業科ではなかったので山と接する時間が少なかったが、「山なんてなあ。」と思っていたのが、卒業してあらためて山を見るとホッとするというか、落ち着く気持ちになることが多い。そして現在自然環境や環境問題などが問題になっている中で、何か山林高校でも出来ることがあると思う。これから入学する人、在校生のみなさんは頑張ってほしいと思う。

卒業生の私達も努力していきたいと思っている。　（了）

旧職員編

遥かなりと
いえども
今なお 眼前にあり
鮮やかな孫
生徒の歓聲
ああ 山林

木曽山林高校と共に生きた私の半生

元木材工芸・工芸・インテリア科　奥原万喜男

昭和二十二年四月、木曽山林高校に木材工芸科（修業年限三年・定員四十名）が設置された。木工専修科が廃止されてから十年余を経て、再び木材加工に関係した科が設置されたことは林業科との関係からしても大変うれしいことであった。

終戦後の当時、会社を退職し、たまたま家にいた私に、実習教師として山林高校へとの話があったが、突然のことで決心もつかずにいたところ、一年後再び話があり、二十四年四月から講師として山林高校へお世話になることとなった。

当時木材工芸科には、科長の下島万夫先生を始め五・六名の職員がおられた。工芸科の生徒は三年生は在籍者なく、二年生三十五名、一年生十七名であった。

二十年前、生徒としてお世話になった母校に、立場は異なるものの再びお世話になる事のできた自分をうれしく思うと同時に教員としての責任の重大さを感じていた。

以後三十二年間の長い間、教科指導・生徒指導・進路指導や、さらにクラブ活動の顧問、蘇門会事務局等々、毎年同じようなことの繰り返しの中で勉強と経験をさせてもらうことができた。

その上さらに、学級担任・進路指導主事・保健主事等も務めさせてもらったが、長い年月の間に記憶の薄らいでいることも多いので、現在特に心に残っている事項について簡略に記してみたいと思う。

一、教員免許の取得について

初めて教員として採用されたのが講師の資格であり、教員としての免許が必要であった。当時は小・中・高校共に無免許で教職についている者が多く、県教委では教員免許取得のために必要な科目の講習会を計画的に開いていた。

それにより一定の単位を修得し、不足の単位数があれば各自で大学の通信教育により定められた単位数を充足して、県教委に免許交付の申請をし、交付を受けた。

二、木材工芸科の実習の概要

木材工芸科の実習であるから、当然木材を主体としたものであり、実習作品は家具を中心としたものとなっていた。従って木工工具の使用や塗装なども当然実習の中に含まれていたのは言うまでもない。

また、木工機械の使用も重要な一分野である。使用する木材をはじめ、その他の諸材料は地方の業者を通じて購入していたが、一時期営林署からナラ材の払い下げを受け、学校の製材所において製材技術者に製材を依頼し、木材乾燥室で乾燥実習（昭和五十四年まで）を兼ね、職員・生徒で乾燥したナラ材を使用した。

地元のナラ材は堅くて加工には生徒も苦労したようだったが、そのうち木材も外材輸入により、また実習に使用する諸材料も改善されたものが使用されるようになってきた。生徒による一年間の実習作品は、以前からも作品展示即売会等により処分されてきた。

三、女子生徒の入学

昭和三十八年四月、工芸科に開校以来初めて女子生徒の入学（四十八名中七名）があった。本校始まって以来の入学であったから、学校としても今までとはまた異なった面についての配慮が必要になってきた。

三十八年以後、工芸科には数名から十名前後の女子生徒の入学生があり、卒業後の就職先もまず良好というところであった。その後、昭和六十一年からは林業科にも女子の入学が認められ、現在では全校で一〇〇名を越える女子生徒が在籍している。

四、寄宿舎について

本校の特色として、以前から寄宿舎制度のあったことを忘れることはできない。昔から数少ない林業の専門校であったため、県内外から入学者が多かったことによると思われる。

県外からの入学生はもちろん、県内でも通学不可能な遠距離地域から入学していた生徒も相当数入学していた。私の在職した昭和三十年頃には、五・六十名の生徒が寄宿生だったように記憶している。

各部屋とも縦割り制度で、各学年からの生徒が二から三名位ずつ割当てられていた。大部屋には十四・五名一緒に入っていた頃もあったようである。一時は百名以上の生徒が寄宿舎に入居していた時期もあった。

舎監は一時期定められた先生が勤められたようであったが、通常は寄宿舎委員会が設けられ、その中で運営されていた。食事の方は、炊婦さんが専門に二人勤めて下さっておられた。

寄宿舎の記事については書き足らない部分や、不適当な部分も多々あると思われるので何とぞお許しの程お願いしたい。現在も寄宿制度は存続しているが、わずか数名とのことである。

以上、思いつくがままに二・三簡単に記してみたが、ずっと以前のことで記憶も薄れているのでこの辺で擱筆させていただきたい。三十年余りの長い間、山林高校と共に生きた私の半生は、私にとっては貴重な人生経験の場でもあった。

その時々の校長先生はじめ、諸先生・職員の皆さん、さらに蘇門会の皆様方に心から感謝申し上げたい。（了）

桜

元社会科　上平　慶治

「桜伐る馬鹿、梅伐らぬ馬鹿」という諺がある。しかし、時には己むを得ず、桜を伐る羽目に立ち至ることも……。

学生生活に別れを告げ、木曽山林高校に赴任するため新宿から急行に乗り、塩尻で普通電車に乗り換えた。谷が深くなったり少し開けたり、小さな駅を幾つか過ぎて、空が広がり眼下に街並が見えると、そこが木曽福島であった。所々に石を載せた板屋根があり、松林の中には青い屋根の大きな建物も見えた。

林業の学校として全国的に有名であり、県下の農林関係の高校としては小県蚕業・上伊那農業に次いで古い伝統のある高校で、地域の特性を生かした木材工芸科もある、と聞かされて来たので、駅前の神社に安着の報告と今後の努力・加護を祈願した。

新学年のスタート直後、林業科では演習林の実習が三日間ほど行われた。校庭に三年は法披（はっぴ）、一・二年は作業服でスパッツを着け、腰に鉈・鋸をはいて集合した姿は圧巻であり、服装の違いには時の流れも感じた。

書き忘れたが、落着いた先は校門前の道路を挟んだ上の段の借間である。食事は望岳寮のお世話になるとのことであった。下駄履きで徒歩三分で寮に到着、寮生と一緒に朝食を戴きお弁当を貰って校庭を横切り、木曽五木の植栽を見て裏口から入り、玄関の下足箱に下駄を収める。

事務室・校長室その隣が職員室で、机上に風呂敷包を置いて一日が始まる。林業科・工芸科とも男子ばかり、午後は両科とも二時間続きの実習が多く、普通科は午前だけで授業が終わる日もあり、その日は木工実習の見学をしたり（巧い生徒は作るのも早い）、林業科と一緒に丸太橋を渡って演習林に出掛けたりもした。

四月は歓迎会と花見、五月には田植酒と朴葉巻を味わい、順調な滑り出しであった。それを天が妬んだわけではないだろうが不順な天候が続くようになった。

早くもお盆には台風が上陸、県下に戦前戦後最大の被害を与え、死者も数十名にのぼると報道された。次いで九月半ばには降雹の害があり、特に東信では野菜・果樹に対する被害が大きく、幾つかの町村に災害救助法が適用された。

天気予報はまたまた次ぎなる超大型台風が最悪のコースをとることが必至である、と報じ警戒を呼び掛けていた。前日から雨が降り出しなま暖かい風が吹く。

生徒はクラブ活動をしないでなるべく早く帰宅するよう、放送が入った。丁度その日は日直、K校長と事務のTさんらが残っていた。風雨とともに強まり、特に風の猛威は凄まじいものとなった。

窓枠をガタガタゆすり始めた風があらゆる隙間を突き抜け、

ラジオもよく聞こえない。窓ガラスが風で撓り、木製の古い窓枠もたわむ。ガラスがあのように曲がるのをはじめて見た。

K校長が外れないように夢中で窓枠を押さえに走る。より激しくなると堪えきれず廊下側に逃げるしかなかった。強いときこそ抑えていなければ意味がないが、自分でも大体同じ行動をし、何回となく押さえと避難を繰り返していた。

夕暮れになり少し風が弱まったときを見計らって、裏口から寮を経てようやく借間に辿り着いた。しかし、この後も強風は止まず、暴風の大音に何かが飛ばされたり倒されたりする更に大きな音が混じり、家屋も時どき地震のように揺れミシミシ音がして、一晩中まんじりともできなかった。

明け方、風音が弱まり路上をトタン板か何かがカラコロと舞い転がる音がして、ようやく去ったかと安堵できるようになった。

翌日、抜けるような青空を仰いで登校すると、校門の両側にある防風林の松や杉、桧の枝が折れ、小木は根こそぎ倒されていた。テニスコートは折れた枝や木の葉・トタン板などで全面が覆われていた。

幸い校舎は被害が少なく、上の段の寮の棟の屋根瓦が何枚か飛ばされた程度だったと思うが、工芸科の実習棟の屋根が大被害を受けて、相当の広さが剥がされ吹き飛ばされていた。

裏の校庭にも様々な飛来物が散乱し、何と花見をした西側の土手の桜（二十本近くあっただろうか）が大小を問わず全部倒されてしまっていた。（全国的にも大被害で数千名の人命が失われ、被害家屋も数千万戸。県下では風台風のために死者は十数名だったが、家屋の被害は甚大。西筑摩でも家屋のほか風倒木で道路が不通になったり、停電になったり通信機関も全郡に及ぶ大被害であった。）

翌々日、林業科の三年が中心になり、倒された桜を掛け声を合わせて抱き起こし、土を運んで盛り踏みつけて立て直した。まだ倒されていた状態の間に、K教頭が先頭にたって各々の桜を見て回り、チョークで伐る枝に○印をつけた。あたかも桜と対話をしているようであった。外科の手術のようにチェーンソーで次々と枝を伐り落としていく。根の力とのバランスで伐り過ぎ枯死につながる。伐り口に何かを塗ったように思うが、記憶は定かではない。その結果、冬に入るまでにすべての木が活着し、感嘆しかつ安心した。

翌春は花数も少なくやや寂しく冷たい感じであったが、次の年からは以前のような見事な桜に蘇った。まさに「樹芸の力」であった。

都合、五回の花見を堪能し、更に教師としての経験を積み力量を高めるべく、「山と川のある町」との別れを惜しみつつ、ベビイブームで学級増となるという大町に向かった。

「年年歳歳花相似タリ……」再訪の機会をもてないが、今頃あの桜はどんな花を咲かせているのだろうか……。　（了）

思い出の記

元木材工芸科・工芸科・インテリア科　日向　昭夫

一、木曽路へ

山深く緑美しき木曽路、その枝越しに映ゆる学舎、遠く過ぎ去っていった十七年間の思い出が、爽やかに蘇る。

秋田県横手工業高校から、木曽山林高校に赴任したのは昭和三十四年のことである。

紙の荷札に「新開村・杭の原」と宛名を書いているとき、この文字からどんな山の中だろうかと、すこぶる戸惑い行くことに、決めたことへの後悔にも似た不安を覚えたものだった。

石炭の煤でよごれた顔をこすりながら下り立ったホーム、そこからは広い構内操車場が見られ、何本かの入替え線が連なり交錯していた、中央西線最大の中間駅、機関車の方向を変える転車台があり、その向こうには大きな機関車が並んでいた。駅舎前にはタクシーが三台止まっていた。ダットサンと呼ばれていた小型車で、町を通り抜け、山裾を廻り木曽山林へと着いた。

田村さんと言うおばさんが学校の玄関先でお茶を出してくれた。開田蕪の漬物は、鮮やかな赤紫色をしたしわだらけのものだったが格別うまい味だった。木曽を思うとき、すんきとともに、今でも忘れられない味となった。

荷物を整理し終わったころ周囲はすでに暗く、石油コンロに沸く湯の音と、際立つ山の峰その木々をかすめる風の音のみであった。

木曽は全て山の中、そんなことばの実感をしみじみと覚える。

二、学校風景

樹木にかかわる専門学校、木曽山林高校はごく簡単に略されて単に「山林」と呼ばれ、地域全体からそのようにずっと昔からその名で親しまれ愛され、現在もそのように続いている。

石柱の校門が建ち、イチイの木が植えられていた、その向う正面に木造の校舎があり、その中央に立派な玄関があった。前庭左右はテニスコートで、毎日生徒も職員もよく楽しみ、日が暮れて暗くなるまでボールの弾む音が、そして歓声が快く聞かれていた。

南側の一方は高い石垣が築かれており、ずっと校庭の端まで続き、その石垣には歴史を忍ばせる苔が生えていた。

石垣の階段を登った所に、木材工芸科の職員室、実習室、製図室があった。そこから離れたところに二階建ての寮があった。

昼休み近くになると町の大橋パン屋さんが、小型のオート三輪で運んできてくれた。二階への階段下に購買があり、文房具用品などと共にここでパンと牛乳が売られていた。

また学校の写真は古田写真館にお願いしており、この方もスバルに乗ってこられた。ミゼット、スバル共に当時は珍しくうらやましく思ったものだった。

宿直の朝など玄関に立つと、サルがうろうろしていたり、狐や狸が通り抜けて行ったり、時にはマムシが校舎内にとぐろを巻いていることもあった。

昭和三十四年、最大級の伊勢湾台風により、校舎を囲む土手の樹木はほとんどなぎ倒され、校舎の瓦や窓ガラスが飛び散り、木材工芸科実習棟の赤茶けたトタン屋根がめくれてちぎれ、それは全く悲惨な様相のものだった。

たまたま校舎全面改築計画が進行しており、この状態を期により加速され、昭和三十八年創立六十周年記念と合わせて現在の校舎に生まれ変わった。近代的校舎は木曽路のまた一つの話題となって広まって行った。

新校舎三階のベランダからは、深い緑をたたえたダムが見下ろせ、木曽川の流れ、そしてその向うの山裾を機関車が何両となく連結した長い貨物列車を、そして客車を牽引して急勾配を上っていく。

真っ黒い煙が吹き出され、喘ぎ、止まってしまうのではないか、と思われることもしばしばあった。

三、教室風景

当時のクラス別は、A・B・Cが三年、D・E・Fが二年、G・H・Iが一年生、最初の二つが林業科で三つ目が木材工芸科だった。新校舎に移ってからは、A・Bが林業科、Cが工芸科と変更された。

旧校舎時代は、授業の始まりと終わりに公使さんが「りん」を振って廊下を廻ってくれた。生徒は皆たくましく、一クラス五十人、教室一杯で机間巡視などはからだを斜めにしないと出来なかった。

授業中生徒に注意をしたり、怒鳴ったりするようなことは、ほとんどなく気持ちよかった。黒板は黒そのもので、ひびが入っていたりして板書しにくい所もあり、生徒も見にくかったことと思う。皆せいせいした明るい顔をしていた。

昼食はもちろん持参したお弁当で、皆アルミのそっけない「弁当箱」そのものだった。公使室に行くと大きな釜に湯がたぎっており、やかんに汲んで持ち帰る、そのやかんはほとんどまともな形のものはなく凹んだり歪んだりしていた。ご飯が済むとその弁当箱へお湯を入れて飲む。

公使室は炊事の薪の煙で天井といい柱と言い全てが真っ黒に煤けにじんでいた。竈には一日中火が燃えていた。

担任は何回か持ったが、クラスにそれぞれ特徴があり雰囲気があった。困らせられるようなこともなかった。生徒たちは、多くの懐かしい良い想い出だけを残してくれた。その幸せに深く感謝している。

赴任早々私につけられたあだ名は「チャボ」でこれは在職中ずーッと続いた。あるクラスの同級会は「チャボ会」とつけいまだに続いている。

四、生徒とともに

在職中のその多くは、生徒会・生徒指導・舎監・何回かの担任だった。

(1) 生徒会

生徒会では、生徒がよく自発的に活動した。執行部の計画は創意・発想・工夫等いつも緻密に検討された。これに全生徒もよく同調協力し、いろんな行事の後問題や不愉快感が残るような事はほとんどなかった。

(2) 水泳大会

毎年夏になると黒川渡ダムに、紅白のブイを連ねて結わいたロープを対岸に打ち込んだ杭に結びつけてコースを作った。自然の中での水泳大会、その歓声と水音は本当に元気はつらつとしたものだった。このプールは体育の授業の中でも一夏使われた

(3) スケート大会

冬にはダムの向こう岸まで届くような長い棒を何本となく継ぎ、波止を作り自然の氷のリンクを作りスケート大会を行った。このリンクも体育の授業に使われ、またほとんどの先生方も良く滑った。

生徒たちは厳しい冬の寒さの中、夕方にはバケツや可搬式のポンプで散水し氷面整備をしたり、雪の日には雪掃きが何回となく繰り返された。陰の力である。

しかしこれらは今思うとき、衛生的保健面でも、危険性の面からもずいぶん大胆なことであり無謀な事だったとさえ思える。ただ当時そうした経験をした生徒にとっては、再び決して味うことの出来ないものであり、今なお深い想い出になっていることと思う。

(4) 強歩大会

全ての体力と精神力に挑みながらひたすらに歩き続ける。南は坂下小学校、北は現塩尻高校まで、その方向は一年ごとに変わった。どちらの場合も約六十キロ、実施に当たっては、警察への認可届、ほぼ等距離になるように配慮した関門へのＰＴＡへのお願い、職員配置等事前の準備等結構大変だった。当時はまだ職員の車はなく、古田写真館さん、スポーツ店信用堂さんの車、それに譲渡されていた学校のジープ位のものだった。以後年々先生方の車が増加し機動力に困る事はなくなった。しかしずーッと続いてきた強歩大会、以前はどんなに大変なことだったかとその苦労が忍ばれた。

北へのコースはゴールまで登り道であり、特に鳥居トンネルは薄暗く、排気ガスと煙がこもりはなはだ見通しが悪かった。そうした中を車が通り、両壁から雫の流れ落ちた水を跳ね飛ばしていった、生徒はその悪条件の長いトンネルをただ黙々と歩

きぬけていった。

十九号線の交通量の増加に伴い危険を避けるため、開田村コースへ、更に熊沢コースへと変更された。足を引きずりながら最終ゴールへ到達した生徒の「成し遂げた」その満足の笑顔は実に素晴らしかった。そして関門で接待して下さったＰＴＡのお母さん方の温情こもるやさしさと声援される笑顔は、最高に美しく今日もなお決して忘れることは出来ない。

(5) ひのき祭・運動会

ひのき祭・運動会は、伝統あるものとして、木曽における一つの行事かのように人気があり期待されていた。ヒノキの枝や杉の枝で構成されたアーチは町内三高校の中で一番優れたものだった。特に運動会は、内容が豊かで、勇ましく、力強く、面白く、見にきてくださった多くの方に燃え上がりと笑いを、そして競技している生徒自身も満足するものだったと思う。

その後「ひのき祭」はマンネリ化をさけ、新鮮な内容をより豊かなものへという趣旨により三年に一度と変更された。今はどのようになっていることだろうか。

この季節になると既に少々肌寒く、紅葉が残りの鮮やかさを増し、ダムには美しい落葉が漂い、日の暮れ行くのも早く三時を過ぎる頃にはもう日は山の端に傾いて行った。

(6) 生徒指導関係

当時の生徒はほとんど高歯下駄で通学していた。ぞろぞろ連なる下駄の音には若さがあり懐かしまれる。皆学生帽をかぶり、それはまた「山林」生としての誇りでもあった。山林の校章、私はそのデザインが好きだった。

世相は徐々に変わりすぎ、長髪へそして無帽へと進んだ。その方向決定にまでは生徒会、職員会ともに検討が重ねられた。こうしたことは今当たり前のこと、しかし長い慣習が変わるときは、慎重に節を経て行くことは当然すべきことと思う。

(7) 応援練習

毎年新入生が学校になれた頃応援練習が行われた。主として一・二年生が対象で応援管理委員会が指導する。この時ともすると肉体的、精神的圧力がとても心配される面もあり担任の先生方にも校庭へ出ていただくなど、さわやかなものにするよう配慮し努めた。昔から伝わる山林の応援練習を生徒行事として、良い面も包含されていたのでは、と思うこともあった。

生徒指導全般を通して現在と比較すると、当時の問題とされた内容は、今では微々たる事項のようにすら思える。

五、望岳寮

山林へは広く県内、そして他県からも多くの生徒が入学してきていた。従って結構寮生も多かった。また大雨等で河川が増

水し交通が遮断される心配のある時などは授業を打ち切って帰宅させ、時には寮へ宿泊させたりする事もあった。

舎監と言うのは中々大変なことで、親から送られて来た現金封筒の受け渡し、余分な所持金を預かり、病気等に対する対応手配、相談事へのアドバイスなど親代わりとなり接することも多かった。懐中電灯を持って夜中の巡視も課せられていた。消灯時間を過ぎてもうるさい部屋へ注意に行くこともしばしばだった。一部屋三・四人の仲のよい部屋もあり、その一方泣きながら部屋換えを申し出てくる生徒もあった。寮生だけのバス遠足も行われ、その中で上高地へ行ったときの素晴らしさが思い出される。

休みに入ると一斉に帰省して行く。特に一年生は、父母の待つ故郷へ、そのうれしさに皆晴れやかに爽やかに弾むうれしさに瞳が輝いていた。

全面改築とともに望岳寮も快適な寮となった。門標は当時校長先生だった鷹野貞雄先生に書いていただき、私が厚い板を機械で切り抜き彫刻し金色塗装に仕上げて製作した。

ある夏の夜、この無人となった旧寮は突然出火し、瞬く間に全面燃え上がり、どす黒く赤い焔は周囲の夜空を焦がし恐ろしい様相の中で消えていった。警察の調査が執拗に行われたが結局不審火として終わった。

六、インテリア科に至る科名の変遷

①木工専修科

木工専修科として創設されたこの科は、より良い生活必需製品の製作技術者の養成を目標としてその実を上げて来た。

②木材工芸科

木工だけではなく、その中に芸術性を含む製品の創造、工夫、更に生産性の向上、こうした技術者の育成が強く求められ、そうした要望に添うべく、昭和二十二年、改めて木材工芸科として発足した。多分に芸術性を包含し表現する製品創造へと目標を定めた授業内容となった。

③工芸科

日を追い戦後の世相は落ち着き生活は急速に豊かになっていった。日本の工業は順調に躍進し、多くの新素材が次々と生産されるようになった。こうした時代の中、木材だけを対象としないで、主とする木材と他の素材との複合新製品の総合開発、新技術の必要性が高まり、新しい科の方向を熟考する時、「木材工芸」にこだわらず、単に「工芸科」とすることを主張し、山林からの発想は、当時五十八校あった同科の賛同を得、昭和二十八年「工芸科」と改称新目標に向かって出発した。

④インテリア科

更に社会はその速度を速めより豊かさへ向けてと伸びていった。こうした時、他の分野の工芸と言う対象も確立し、たとえば、ガラス・金属・繊維……等各工芸である。このような中、主たるものは木材科でありながら、全ての工芸の総称したかのような「工芸科」の名称は適切ではなく、ここにおいて更に大きく広い分野へと飛躍を求め「移住空間をより快適に創造する技術者の育成を目指す」、こうした人材育成へと教育内容改訂し合理化し、昭和四十八年「インテリア科」と改称移行した。

このようにして、当科は常に時代を反映し、要望に呼応しながら変遷を重ねて現在に至っている。

当時はまだ「インテリア科」と言う言葉もあまり周知されておらず、カタカナの科名は全国の高校で初めてのものであった。

七、樹齢と共にたくましく

今教育について種々論じられ、改革などといわれ、いろんな施策が講じられているが、全く何の役にも立っていない。

昔から伝統的には親は子を大事にして可愛がり、反面人の道、躾には厳しく教えて来たものである。これは人間だけでなく総ての動物が本能的に実行し励んでいる。

飽食飽物の時代に育った現在の社会、わがままを許し、躾と教育は学校まかせ、こうしたあり方を強く反省し、人として本来あるべき原点へ心を戻すことが何より大事であることを思う。

伝統とはただ長く続いていることではなく、常に反省、研究、改善を重ね、昨日より今日へ進んで行く、その経て来た充実の航跡の継続であると思う。

緑の鮮やかに美しく紅葉また麗しく、流れ澄む木曽川、その大自然の素晴らしき木曽路に山林高校がある。

ここを基点としてよりよい先輩たちが大きく巣立ち、社会で立派に活躍されている。その多くの先輩に続き、やがてその時代に活躍でき、社会に貢献できる素養を持つ人間教育に、より努力を重ねて戴きたいと願う。

世の移り変りはあれど、麗しき大自然と人の道はかわりなく、今日の青空のように果てしなく、未来に向けてその名をとどめ、健やかに若ささわやかに、はつらつと伸びゆく「木曽山林高校」であるように願う。

八、思い出に残る先生方

芦部隆彦校長先生

思いやりと配慮深く、校用技師の大久保さんが捻挫した時など、薬草を集めて自分で練り薬を作られ、汚れた足に毎日つけ替えられ、包帯をして下さるなど、人間味豊かな学者肌の先生であった。

体はやせ形で大手術を受けられた後も、建設事務所からブルトーザーを借りて来られ、始業前に一人で校庭全面の整備を成

し遂げられたこともある。
自分には厳しく、先生方からは全面的に信頼されていた。しっかりした教育理念を持っておられ、きりっとした適正判断の早い先生であられた。

神庭英先生

林業科の重鎮として科の充実にあたられ、教頭もされていた。校外にも広く名を馳せられた。テニスが上手で、スマートな体でテニスもスマートであった。テニスといえば、同じく林業科の原貞夫先生も上手で庭球部顧問として熱心に指導されていたことが印象的に強く残っている。

下島万夫先生

木材工芸科設立に力を尽くされた先生で、教頭として学校運営・全面改築等大いなる功績を残された。校舎全面改築の記録、その他学校行事の記録などをカラースライドにする製作はきめ細かであった。
そうした反面、教務室の机の上で版画を平気で彫刻されるなど、その作品はすべて芸術作品として感銘するものばかりであった。

奥原万喜男先生

スキー、テニスの指導をされ、特にスキーは指導員の資格を持っておられた。盆栽にも凝り、大からミニまで随分の数におよんだ。教科内の実習には卓越した技術を秘めておられ手際が鮮やかだった。
退職後は陶芸に打ち込まれ、製作技術と優れた感性とがよく複合し、県展等には何回となく入選された。陶芸教室を開かれるなど、今や一流の陶芸作家として高く評価されている。

田下達雄先生

当時県下一の年の若い事務長として勤務されていたが、まことにこだわりのない温厚なお方であった。従って、先生方からも親しまれ信頼されていた。
少々のんきな面もあり、休みの時などには生徒が電話機を引っ張り出して窓枠に乗せて話するのを黙認されたりすることもあった。事務職員同士テニスを楽しむ機会を設けたりされる先生であった。

佐々木弘文先生

林業科の先生で、教務主任をされていた。あだ名は、よく表情を示している方だと思った。先生方からも生徒たちからも人気の高い先生であった。
実習時の服装は何か、腰の「なた」をはじめ、武装した兵士のようにも見られたものだった。入れ歯を口唇あたりまで出しておどけたりするユーモアに富み周囲の雰囲気を明るくしてく

ださった。

教頭先生になられたが、お酒のせいかまだ若くしてご逝去されてしまったことが悔やまれてならない。

上平慶治先生

新卒で来られ、「青い山脈」に出てくる先生のように誠に闊達で、大きな笑い声が印象的であった。テニスをはじめ、ほとんどのスポーツが上手であった。後に校長先生になられた。

山口登先生

林業科の先生として新風を吹き込まれた。思考があっさりと論理的であった。大学時代空手をやっていたとか、指の節々にタコができており、いつもそのタコを噛んでいた。

暗算が抜群に早く、電卓のない時代いろんな面での合計算出に遺憾なく、その才能を発揮された。後に校長先生になられた。

千村和彦先生

林業科の先生で、気持ちが温和のうえに少々な事にはあせることなく、生徒からも慕われていた。数学・物理にも強く、テレビが出始めた頃通信販売でキットを取り寄せ完成させてしまうなど、そうした面の知識・技術に優れていた。

在職中、何かと心置きなく相談し合い親しさのこもる先生であった。

坂本政さん

校用技師をなされておられ、中古のバイクを持ち込んで、ついには乗れる状態にまで修理をするなど、校舎内外の補修から設置にいたるまですこぶる器用な方だった。

「そうさなぁ、だけんど蜂の巣と蜘蛛の巣だけは出来ねえなぁ」と、そうした笑顔は実に朗らかで、その明るい人柄が、口ぐせのようによく使われた「そうせぇ、そんだけどな」という言葉とともに、今懐かしく思い出される。

多くの立派な特徴と個性のある先生方に出会え、支えられて素晴らしい人生の思い出の日々を幸せに過ごさせていただいた。そんな木曽山林高校に対し深く感謝している。

本来ならば、当時の全先生方に敬意を表し、記述すべきであるが、勝手に選ばせていただいたことをお詫びし、お許しを戴きたいと思う。

湖面に校舎を浮かべ、深く緑が溶け込み、風がそよぐあの日のように、そして今も、これからも、美わしき自然の中に健やかに続いていく木曽山林高校、この栄光ある道を願ってやまない。

（了）

在職当時の思い出

元養護教諭　勝野　秋子

昭和五十三年四月から五十九年三月まで六年間、保健室において、生徒の健康管理、保健指導、保健相談等、保健専門職・養護教諭として勤めさせていただきました。

いろいろの思い出の中から、『保健委員会』（生徒の会・職員係の会・外部の方々出席での会）『寄宿舎衛生検査』『創立八十周年記念式典』『長坂清人先生について』述べたいと思います。

生徒保健委員会

生徒保健委員会は、各クラスより保健委員が二名ずつ出て、週一度定例委員会を開き、それぞれのクラスの健康に関する情報交換や、保健だよりの発行、時期によっては、梅雨期の食中毒予防やムシ歯予防、インフルエンザ予防等お話ししたり、又救急処置法の実習や献血推進について、さらに精神衛生についても話し合いをしました。

生徒保健委員会は、私にとっての楽しみの会でした。一番生徒を知る機会ですし、なぜかまじめで良い生徒が多く、いつも親しく心通いあわせてのなごやかな会でした。

学校保健計画立案の源であったように思います。

文化祭で保健委員会として研究発表した中の一つに、「喫煙と健康障害――ＮＯ　ＳＭＯＫＩＮＧをめざして――」がありますが、身近な問題として、みんなで話し合い、研究発表資料をつくりました。この時の資料が今でも私の手もとに残っておりますが、生徒達はよくやったと思います。

次に保健部係会ですが、保健主事の角間積善先生と藤井義道先生、野口金造先生と私の四名でした。保健室で学校保健法にもとづき、保健計画、実践方法等について、生徒保健委員会の声を入れて話し合いを絶えずもちました。

学校保健は、あの当時まだ新しい分野でして、職員会で理解していただき、実施決定されることは、なかなか大変でした。お三人の先生方、本当に良い知恵を出してくださり、職員会に上手に先生方に話をされ、学校保健がスムーズにいきましたこと、今も深く感謝しております。

保健部で旅行に出たことがありますが、野口先生はご都合が悪く、三人で群馬県榛名湖から白根山方面へ行きました。楽しゅうございました。そのときの写真がアルバムに収められていて今も懐かしく見ております。

角間先生はご専門が林業科だったせいでしょうか、白根山では、紅葉した樹々（赤い実・赤い葉）高山植物、めずらしい古木の根っこを中心に、そして山脈を写したり頂上での雪風景等何枚も写真を撮っておられました。

藤井先生は、旅行中ずっとドライバー役、いつもすてきなクラシック音楽を流してくださり、たまには奥様の好きな演歌も

一つ二つ聴かして下さり、旅を一段と楽しくしてくれました。
保健部の先生方、人数は少なかったけど、チームワークは良く、力惜しむ事なく一丸となって学校保健に懸命にご協力なされました事、力不足の私にとって、誠に力強い先生方でございました。忘れることはできません。

学校保健協議会

次に、年一回の学校保健協議会は、外部の方々も出席し盛会でした。木曽保健所からは、保健予防課長の下條磯三郎様、福島役場からは、保健厚生課長の平田様、ＰＴＡの厚生部長様、校医の長坂清人先生、芦沢正三先生、歯科の杉本貞雄先生、薬剤師の下條周助先生、校長先生はじめ教頭先生、保健係の先生方、生徒代表は保健委員長他五名です。
この保健協議会は、生徒の健康問題を中心に、地域の保健環境状況を話し合いました。特に保健所の下條さんからは、郡内、県内についての保健に関する情報、それに食品衛生面に関するお話し等され、校医さん方からは、それぞれご専門の立場からご発言され、校長先生からのお話、先生方からも、生徒からも、意見やら、質問等がでて誠に有意義な会でした。

寄宿舎の衛生検査

寄宿舎の衛生検査は、週一回（火曜日だったと思いますが）舎監の山崎裕英先生と行きました。男子校の寄宿舎とは思えないほど、いつも整理、整頓、掃除が良くできていました。
衛生検査記録簿は、いつも良好でマルでした。これは山崎先生のご指導が大変良かったのだと思います。先生は見落しがないほど気がつかれると同時に、気くばりとやさしさがあり、公正さがあり、すてきな先生でした。
又、賄いを担当されていた中島いとさんは、しっかりしている方で、生徒の食事状況や、食堂、炊事場の衛生状態等、ご自分から話され、もちろん、しっかり見させていただきました。時には、味のよいキムチ漬けのキュウリを、どんぶりに山もりにもってきて、「どうぞ、どうぞ」といいながら、お茶を入れてくださったことを懐かしく思い出します。

創立八十周年記念式典

創立八十周年記念式典は、誠に盛大で立派でした。いつもはなんとなく暗く、がらんとした体育館が、目をみはるほど明るく整然としていて、式典はおごそかに、古川校長先生は堂々とすばらしいご挨拶で、輝いておりました。
式典が終わると会場は一変して祝賀会場となり、にぎやかな、なごやかな雰囲気で、大勢の方々はどの顔も笑顔で楽しい会でした。
蘇門会の黒田会長さんは、こぼれるような笑顔で、みな様にご挨拶やら、杯をかわされておられました。黒田会長さんは、私にも声をかけて下さり、会場で一緒にとったスナップ写真が

あります。

式典当日の私の役割は来賓の接待係りでした。朝から準備、接待と、あまり着付けない和服姿で、めまぐるしく動きました。

それに校内の清掃状況が気にかかり、きれいになっているか、特にトイレは何回かのぞいてみて注意をはらっておりました。

校長先生はじめ、教頭先生、先生方一同、事務局、みんな一生懸命それぞれの分担を全うし、無事式典が終わりました事は、何よりうれしく、又、この八十周年にあたった、この時期に勤務させていただいた事に幸せを感じ、更に素晴らしい先生方の出会いがあった事を心からうれしく感謝しております。

あれから二十年経とうとしているのに、八十周年記念式典は、今でもあざやかに脳裏に刻まれております。

校医の長坂清人先生

校医の長坂清人先生は、山林学校ご出身で、母校を愛されてお亡くなりになる寸前まで、健康診断、健康相談等、生徒のために熱心においで下さいました。

ご高齢でいらしたのに、いつも幅広く新しい事も勉強されていて、感服しておりました。私も少々影響を受けました。医学面のお話しの内容も深く、いつも広い視野でお話しされました。

地域医療で一番力のあるのは医師会です。木曽郡医師会長をなされていた時、今の県立木曽病院を招致されたのが長坂先生です。先生のお話によると「医師会の中では、反対者もいたが、将来の木曽の人達を思う時、どうしても、県立病院をもってこなければな、と思ってな。」と話されました。

人口も少ないこの木曽谷に、県立病院をもってくることは、県知事さんを説得し、どんなに大変だったかと思うのです。今人々はこの県立病院で本当に助かっています。

山林学校卒業生で、長い間母校の校医として、また木曽地域医療に貢献された長坂清人先生に、心から敬意と感謝をささげます。

（了）

木曽山林高等学校在職時代回想記

元社会科・国語科　池田　錬二

一、木曽山林高等学校に奉職するまで

私は、一九一九年（大正八）、下伊那郡座光寺村（現在飯田市に合併）に生れた。村の尋常高等小学校、飯田中学校を経て上京、早稲田大学付属第一高等学院修了、早稲田大学法学部を、戦時特令法（学生の徴兵延期特別措置の停止）により、太平洋戦争が起された翌一九四二年九月二七日という半端な日に卒業。

全国一斉に実施された徴兵検査の結果は第二乙種、現役入隊は免除、当時は国策会社以外は禁止のため、軍需輸送優先の日本通運株式会社に入社。希望してその年十一月末、雪ふぶく酷寒の旭川支店勤務、翌年五月までの七ケ月旭川支店に勤務して、

札幌支社に転出した。

一九四四年（昭和一九）赤紙（召集）が来て、東京板橋の高射砲隊一九九一部隊に配属、翌年の三月十日の東京大空襲以後、部隊は転々とかわり、敗戦は現在の米軍横田基地に隣接する拝島（現昭島市）のくぬぎ林の中の兵舎で迎えた。

主計担当だった関係で拝島に十一月までとどまり慶応出の主計担当と二人で、米軍に陣地をあけわたして帰郷した。

帰郷はしたが、当時札幌までの切符が買えず、復職がかなえられないなかで、急に教職に転職しようという思いが頭をもちあげ、教職に就こうとしたが、敗戦直後のこと軍人の適格審査が厳しく、下士官も職業軍人とみなされ教職の道は閉ざされてしまった。

やむなく、翌年六月札幌行きの切符が手に入り日通札幌支社に復職した。復職して何より驚いたことは、召集前までは想像もつかなかった労働組合が結成され、国鉄労組とともに強い組合だったことを知ったことだった。

しかも、僕が復職するまで青年部長の役職を空けてあったので、復職と同時に青年部長にされた。およそ組合のことは白紙、怖いもの知らずで組合活動に専念した。

何よりも戦前と違い、会社と対等の立場にたてるのが痛快だった。敗戦の翌年文部省が出した「新しい憲法の話」によって自由・平等・平和主義に目がさめたといわれるが、僕はそれより前に、労働組合の実践活動のなかで、新しい日本の進むべき方向を肌で感じとっていた。

青年部長になつた翌一九四七年（昭二二）一月三十一日零時からのいわゆる二・一ストに直面した。日通青年部はスト突入の時点から札幌はじめ北海道内主要な駅のピケ要員の任務を与えられていた。

しかし、ＧＨＱ（マッカーサー）のスト中止指令でストは不発に終つた。そればかりか、対日占領政策は一八〇度方向転換、日本の民主化とは逆に反動勢力の復活の方向に力をそそぐようになった。

日通の業務も、何よりもアメリカ優先の輸送が主で、米軍の思うままにこき使われた。毎日の仕事は味気なく、また転職を考えた。

丁度この年新学制の実施により新制中学が発足、教員の不足がおこり、教員の適格審査がゆるめられ、下士官や時には幹部候補生あがりの将校も教職に就くことが出来るようになった。

僕も早速申し出て、山吹村の青年学校と中学兼任の教師に就いた。当時デモ・シカ先生という言葉がはやったが、僕は教育立国に燃える「われこそ先生」になろうとしてのことだった。

しかし、翌年青年学校が廃校になり転任を余儀なくされ、上郷中学に移った。この村は戦前の「二・四事件」の下伊那の拠点の一つで、その伝統が残っていて、学校運営が大変民主的であり、生徒会も「生徒自治会」と呼んでいた。

組合も強く、県に専従執行委員を出していた。それだけにＧ

HQ長野から目をつけられていた。一九五〇年のケリー旋風では小中学校で十名にのぼるレッドパージ者が出た。

たまたま僕のいた学年の教師にも該当者がいて、生徒たちは村に出て首切り反対の署名活動を始め、僕ら若い教師は生徒の立場にたち行動を共にした。

そのころ信濃教育会は占領軍の計らいで組合にかわってカムバックしていて、僕らの行動は占領政策違反だとして、追い出しにかかった。理由は、占領政策にたてつき信濃教育会にとっても危険分子だということだった。

二六年の人事異動期に転出を迫られた。転出先は世話はしないから自分で探せということだった。あて先はないし学年末で異動は済んでいる、と困っていた矢先、中学の後輩が木曽西高校の教師をしていて、山林高校に日本史の教師がパージされて空席があることを知らせてくれた。

僕はわらをもつかむ思いで木曽に飛び、年度末ぎりぎりの三十一日山林高校の職にありつけたのであった。まさに薄氷を踏む一週間だつた。

三月新婚早々で、引っ越しすなわち新婚旅行だつた。

新任式のときの言葉を今も思い出す。堀辰雄の「大和路・信路路」を読んだばかりで、なかに木曽に泊つた時の描写に「……木曽路をまわってきたら、おもいがけず吹雪にあいました。」に始まる紀行文のなかに何回もこぶしの花が出てくるので、「こぶしの花の咲く木曽に住めることがうれしい」といった意味のことを話した。

この時から四年間の本曽の生活が始まった。赴任のあいさつが終って職員室に入ると数人の生徒が会いに来た。生徒自治会がクラブの顧問を頼むためであるのを知り、山林高校が生徒中心の教育を行っていることを実感し感動した。

レッドパージの教師を出すほどだから、前任校との共通点があることを知り心強いものを感じた。ここまでの道ゆきがつい長くなってしまったが、以下僕の心に残つている幾つかの例をあげておきたい。

真下教授の講演会

赴任してからの校務分掌は、大宮さんと二人で生徒会、文芸部、図書館担当。学校行事は生徒会がすべてを計画し、職員会にかけて承認する形をとっていた。

その中で、当時の進歩的思想家で名古屋大学の真下信一教授を招いての全校講演会が思い出される。演題は忘れたが、旧安保条約が締結された直後のことで、真下さんは、「歴史は螺旋状に変化発展するものである。現在は螺旋状の円が逆回りする方向に向いている時だ。その目指すものは米軍支配下、現皇太子を艦長とする日本列島不沈空母にすることだ」と述べた。

あの時から五十年、その完結が急がれているが、反動勢力の矛盾から、それを許さない平和・民主勢力が螺旋の逆流をまがり越えて前向きに発展し始めている状況にあり、螺旋形発展は

前列左より横内校長、真下教授、池田教諭、後列右　牧内生徒自治会長

前向きになってきている。弁証法の確かさを今に思い知らされる話であった。

文化祭と「抵抗文学の系譜」

次は、文化祭に文芸部がやった「近代日本における抵抗文学の系譜」である。あの出版事情の中で、よくこれだけのものを調べ上げたものだと今さらに感銘深い。

近代の年表を作り、時代ごとに書かれた抵抗文学作品を書き記し、下に並べた机の上に現物を並べ、読むことが出来るように工夫して、一教室の四面を囲みつくした。

これが大変好評で、その頃新進文芸評論家小田切秀雄が「この山の中で、戦争と平和を抵抗文学の形で解明しようとしたことには大きな先進的な意義がある」との感想をよせてきた。

彼はたまたま木曽を通りがかって、この展示があることを知り、立ち寄ったのであった。当時は平和教育など実践されていない中でのことで、その先進性には一驚する。小田切はその後変節するが、この評価は生きている。

平和教育が話題にのぼり始めたのは六〇年安保のころからだが、教材は原爆被害が中心で、加害、抵抗に目が向けられるようになるのは八〇年代半ば以後のことを思えばなおさらのことである。

この取り組みは全国的にも評価され、僕の加盟したばかりの歴史教育者協議会（歴教協）の創刊されたばかりの機関紙「歴史地理教育」第三号は全面的に取り上げて掲載した。

なお、この展示の中心となったのは生徒自治会の役員を兼ねるものが多く、関係の本の購入を図書館に要求してきて、なけなしの図書費を投じて要求に応えた。松川事件の「真事は壁を通して」もこの時購入。僕自身松川事件の真相究明、支援活動に参加するきっかけになった。

また、当時は再軍備論争、全面講和か片面講話かで国論が二分する中、彼等は街頭に出て「再軍備反対・全面講和の実現」を訴え、文化祭でもそれを大きく取り上げた。

その頃から高校生の政治活動の規制を文部省がうちだし、こうした生徒の動きとしばしば対立することがあったが、生徒達はあくまで生徒会の自主性を曲げなかった。今思ってもその政治意識の高かったことが思い出される。

また生徒会主催のクラス別演劇祭や弁論大会も開かれ、僕のクラスでは「きけわだつみの声」を放送劇でとりあげたりした。弁論大会でも政治問題にふれる演説が多く、「ああ、北は三十八度線……」という絶叫は今も耳に残っている。

図書係となっても図書室がなく、図書室作りに苦労した。古い書籍の十進法による分類、カード作りに助手の芝田君と労を共にした。

雑誌『信濃教育』

不要な支出をなくそうとしているのに毎月雑誌『信濃教育』が送られて請求が来るので「注文もしないのに古色そう然とした雑誌は以後送本停止されたい」旨、信濃教育会（以下信教）へはがきを出した。

しばらくして校長に呼び出された。机の前に立つやいなや「これは何だ」といきなり信教へ出したはがきを突き出した。

僕は驚いて「どうしてそのはがきが」と問い返した。校長（古屋清）曰く「信濃教育会がかんかんに怒って、つっ返してきた。中でも古色そう然とは何事か、とその非礼を怒っている。自分の立場もない。購読を続けてくれ」と懇願する。

そこで、僕は「注文もしないし、こんな雑誌読む人なんかいませんよ。第一予算もない。勝手に送られてきても金は払いませんから」と物別れになって校長室を出た。

信教による二回目の圧力。これで信教の独裁性がよくわかった。義務だけでなく高校にも信教の権力が及んでいる事実を知ったのである。

出張のこと

ちょうどその年の秋、歴教協大会が東京お茶の水女子大で開かれ、出張願いを出した。校長曰く「こうした民間の研究会への出張は認められない」と言う。「じゃあ、信教の集会には出張している（義務制）ではありませんか」と食い下がった。「あれは県教委が後援しているから違うんだ」という。

しばらく問答していたが、絶対に認めない風だったので僕の方から「じゃあ、都内の公立高校の図書館と授業参観ということにしたら差し障りないでしょう」といったら途端に態度が変わり「じゃあ、そういうことにしとく」ということでケリがつき、県費で三泊四日の歴教協大会への出席をかちとった。

毎年大会は、時には他の教師との兼ね合いもあったりして、全額ではないが県費出張に終始してきた。

二、木曽山林での授業

男子ばかりの百五十人、三クラスだったが、僕のもった日本史は学年通しての縦割り講座制。二年生と三年生の混成講座。中学校では主に国語を持っていたので、日本史は苦手。それでもやむなく週三時間こなさなければならない。

そこで、文化史を中心に授業を進めた。当時まだ教科書はな

かったので、その点はよかった。一年やって三学期、受講生に感想を書かせた。

中に「文化史は面白かったが、時代のつながりがわからなかったとともに、その文化を生み出す人間の姿が見えない。もう少し人間の歴史を教えてくれると良かった。戦後、そういう新しい歴史が書かれているので」

この何気ない感想はショックだった。「人間のいない歴史」を教えて何になるか。文化も人間が創り出すものだ。そう思うが、それが何か見当がつかない。

翌年、はじめて和歌森太郎さんの「現代日本のなりたち」という日本史教科書が出て、新しい日本史に目が開かれていった。

この本の後書きに高橋哲夫の「新しい歴史教育の道」の紹介があり購入。そのまた後記に今度歴史教育者協議会という民間教育団体が結成されたので入らないかと書かれておりすぐ入会した。

その後、長野県にも歴教協を作り、退職後も会員となっている。

また、国語の時間では近代文学史を主軸にした授業をした。ある時間、生徒から突然「紅露論争って何ですか」と質問され立ち往生したことがあり、いまだ記憶の中に残っているほどである。

こうした生徒の中から、三十年以上過ぎてから、集会の席上で松原朝弥（49回）林野労組委員長、田本広（51回）国労県本部長に会い、あの頃の山林の革新性の中で育った生徒たちが、充分その校風に生きているのを見て、教育のあり方の大切さをいっそう感じた。

また、最近では文芸を志して文芸部に入り、抵抗文学の展示に苦労を共にした生徒が木曽福島町共産党町長（田中勝己）に当選したのを見て、螺旋階段状の歴史発展の法則の確かさを感じさせられている。

三、その他思い出すことども

①組合運動

僕が山林に異動した年に長野県教職員組合（以下県教組）から高校教師が脱退する動きが出ていて、僕も含めて脱退に反対だったが、結局集団脱退に踏み切った。

そこで山林の教師たちはいずれの組合にも入らず、残った組合員は僕だけになり、高教組木曽支部ができると、すぐ支部選出の書記長と県本部の執行委員に選ばれた。

今でも思い出すが、浅間温泉の旅館で開かれた県教組から分離（分裂）することをめぐる話し合いで、高校側は義務制より賃金が高い三本建てや、呼び名を教授とするなどを持ち出していたので論議は激突し「お前たちは俺たちと違った人種だと思っているのか」と殺気立った状況だったことが昨日のことのようだ。

あの分裂は、文部省が管理職とグルになって仕組んだ組合つ

ぶしであり、委員長は校長の推薦する校長代表がなっていた。その執行部の中での執行委員、日通青年部や上郷での組合体験に比較すると話にならない体制ベッタリであった。選出されてくる各支部の執行委員も、数名を除き校長派。僕はいつも反主流の少数派で、校長派執行部と対決した。

当時は、月に一・二回の執行委員会に木曽から出席するのは大変であった。朝四時起きして、駅まで五十分近く歩き、帰りも同様十一時過ぎになる。実費旅費とわずかな日当に文句も言わず、ひたすら本来の組合作りに若い日の情熱を注いだ。

それから十数年後、はじめて校長執行委員長の席を管理職外の組合員が闘い取ったのである。

そのほか、山林は僻地校なのに僻地手当が支給されていないので、僻地手当を要求しようと高教組と提携し僕が山林代表として対県交渉し、ついに闘い取ったことも忘れがたいことだ。

「雪の降る町に」が、巷には流れる雪の日だった。

②その他つきない思い出から

戦争の敗北で、奉安殿が壊され、その敷地の上に教員住宅が建てられ、その住宅に四年間住んだ。風呂場はあっても、浴槽も風呂桶もないがらんどう。もちろん水道もない。それでも長男が生れ、風呂桶が必要になり木曽名産の桧造りの風呂桶を買ったが、風呂桶を置いてもたき口がない。やむなく壁に穴をぶちぬいてたき口にしたが、水がない。生活用水は住宅の上に学校で使う用水もかねて、沢のわき水をためる貯水槽の水をあてていたが、夏は渇水、冬は凍結して使用できない。

そういう場合は、百メートルも離れた黒川ダムまで天秤棒に二つのバケツをつるして担ぎ上げたものだ。冬期のダムの氷を割っての水くみは大変だった。雪が降ればなおさらのことだった。しかし、まだ三十代前半の若さにまかせて苦にはならなかった。

あの伊勢湾台風は、木曽谷をも直撃した。住宅のまわりの赤松が幹もろとも激しい音を立てて折れ、上隣の校長住宅の家族はわが家に避難する有様だった。古い校舎が心配になり、校内に入ると、管理棟の天井が今にも吹き飛ばされそうにふわふわと揺れていて、危うく校舎外に逃げ出した。間もなく台風一過、屋根は飛ばされることはなかった。

学校の生活は、教師と生徒との隔たりはなく友達のようなもので、今のように忙しさに追われることはなく、毎日放課後は生徒職員こみでテニスばかりしていた。

時に東高や西高の職員と交互に行き来して交流試合をし、地域のテニス大会にもチームを組んで出場した。

ケリー旋風で追放された下島宏さんが、よく新刊物の行商で来校され、本を買うのを楽しみにした。あの時買った国際文化情報社刊行の「画報千年史」「近世三百年史」「近代百年史」「現代史」合わせて八十冊は、その後の歴史教育に大いに役立ち、現在も読むにたえうる。

服部之総等唯物史観に立つ編集、目で見る図鑑形式のさきがけで、唯物実証史学の不滅性ともなっている。そこには民衆の生活、たたかいが息づいている。

学校の諸行事も楽しく思い出が多い。あの「命に保障なし」をモットーとした無料の森林鉄道に遠足・実習などで乗ったこと。樹齢数百年の美林の生命力に圧倒されたこと。美林を訪ねたおり、たまたまコウヤマキの小さな実生を見つけ、土産にとこいで手に持って山を下る途中、巡視中の営林署員に会い「国有林に生えている植物はどんなものをも採ったり持ち帰ってはいけない」と取り上げられたこともあった。

現在、荒れ放題の国有林を思うにつけ、今昔の感にたえない。民族ひいては人類の破滅を招く森林の荒廃対策を放任している戦後の反動政治の責任は大きく、真に自然を大事にする革新政治の実現を望むや切である。

また、毎年の木曽駒ケ岳登山。一度は雨に遭いこうもり傘をさして登った。無謀といえば無謀、のんきといえばのんきな登山も忘れがたい。

生徒、職員有志による駒ケ岳スキー場行き、その帰りに立ち寄った鉱泉「駒の湯」のぬくもりと汁粉の味が忘れられない。現在のように華やかなスキー用品はなく、寄せ集めたような道具のスキー行きだったが、貧しい故の楽しさと友情があった。

山林に就職した時、誰となく聞かされたことは「木曽に来たら、なかなかこの谷から出られない」ということだった。それはいっこうに苦にならなかったが、四年を過ぎた時思い立って転任しようと決めた。

その時はじめて難しいという言葉を思い出した。とっさに思いついたことは、こっちも戦術を使って対応してみようということであった。それは「どこでもいい。定時制を希望する」ことであった。

校長も驚いたらしいが、すぐ県教委に連絡してくれた。県教委も「定時制希望なんてこれまで一人もない。珍しい例だ」といってすぐ空席を探した。「いくつも空席があるがどこでも希望通り」とのことだった。話はすぐ決まった。桔梗ケ原高校（現塩尻志学館高校）定時制転任と難なく決まった。

一九五〇年三月末、すでに下宿先の決まっていた塩尻への引っ越し。引っ越し先は、中学時代からその散文詩（国語教科書に載っていたのがきっかけ）にひきつけられていた母校早稲田の大先達孤雁吉江喬松の生家の二階。貞子夫人がわび住まいをしている長畝の八百年の樹齢を持つという大きな欅の樹のある家だった。

まだ鳥居トンネルはなく、至る所に「死亡事故多し」が表示された石ころの峠道を家財道具を積み、親子三人荷台に乗り、何人かの同僚に見送られて四年の木曽の生活に別れを告げたのであった。

谷を出ずる日の歌

憧れて来し谷なれば咲き出ずるコブシの花に去りがたきかな

ダンコウバイの黄なる小さき花盛りにて谷出ずる日の幸いとする

四年住(よとせ)みし谷と思えば咲き出ずるコブシの花に去り難きかな

馬小作の調査も中途に谷を去る集めし資料行李に入れる

この馬小作の資料は、塩尻に来てから「馬尊人卑の山里」と題して研究論文にまとめ、先述の歴教協機関紙「歴史地理教育」第五号に掲載した。

追記

現在私は長野県内木曽（上松、三岳、王滝）や平岡で、戦時中、中国・朝鮮・東南アジア、その他の国から強制連行した人々を強制労働させたことに対し、一昨年上松、三岳、平岡で強制労働させられた人が中国に健在で、日本政府と関係企業に対し謝罪と補償訴訟を長野地裁に起こし、その訴訟支援活動をしている。

木曽にいた頃はそのことを知らず、真相調査もしなかったので、在木曽中に知って調査をしておけばよかったと悔やんでいる。

（了）

在職の思い出

元林業科　坂下　健彦

昭和四十二年転任した時に蘇門林の植栽が行われた。二～三年後上層部は笹が多くカラマツが育たないので、森林組合にお願いして地拵えをした。その後全校による下刈また各コースの生徒による手入れを行った。

平成五年には森林組合に依頼してヒノキも除伐、間伐を行って現在に至っている。蘇門林の成立の経過は当時の『蘇門会報』に掲載されている。

県下各校で、合宿所、格技室、プールなどが造られ、本校でも狭い土地に幾つも建てられたが、平成五年には、インテリア棟に続いて林業棟が改築された。そのためプレハブ特別教室、演習林管理室の移動などで大変であった。古い講堂も取り壊された。古い校舎の角にあったカツラの木も伐られ、インテリア科により演台に作られ残された。

校舎の変遷については、『学校要覧』に細かく残されている。なお隣りに林業大学校が建てられた。その下調べを兼ねて私と川手先生と佐々木先生との三人で岐阜林大・静岡林大を調査に出かけたことなどがあった。

授業については、三年生に猿の話をした時、ゴリラと言ったら一同大笑いになった。あとで聞いたところゴリラという「あだ名」の生徒がいたとのことであった。

実習の思い出は、林道補修における丸太で階段を作る作業、枝打ち、間伐など。生徒達は平気で木にのぼり枝をどんどん落とすなど、気持ちの良い実習ぶりに楽しさを覚えた。これらは日ごろ鍛えた山林魂だと思う。

同僚については、上衣の袖を引裂いたり、テレビのアンテナを折ったり、新車に乗せてもらって地区ＰＴＡの会に行った時タバコの灰を落としカバーを焦がしたことなど、多くの失敗をした。今さらながら申し訳ないと思っている。

演習林作業については、第一林班の中腹より上の部は、石ガラのためパイスケで土を、植え穴に入れてヒノキ植栽をしたことや、佐々木先生が中心になって外国樹種の見本林を設定し、第四林班の谷筋に石碑が建てられたこと、三林班のヒノキの美林が県林務部の要請により伐採されたが材質が余り良くなかったことなどの思い出がある。

舎監の時は、寄宿の北側の民地にウィスキーのビンが数十本投げ捨てられていたのには驚いた。塵も積もれば山となるの例え。タバコの吸殻にしても同じである。私もウイスキーを欠かさず飲んだことがある。そのときは酒が水のように感じたものである。

地域との交流といえるかどうか、黒川の小学校に木材加工で作った木製の馬を贈って、子供たちからたくさんの礼状が届き、教頭が生徒昇降口に張り出していた。興禅寺の幼稚園へも三つ程持っていったが床に傷がついて困ると言われた。

私のアダ名は「マムシの坂」と言われ、前任校から伝わってきたものと思われる。どうも評判はよくなかったようだ。またある先生は「腑抜けの坂」と言ったそうで、酒ばかり飲んで締りがなかったためと思う。

別な話で、住宅の裏山へキノコを取りに行ったら、寒くなる時期で腹の大きなマムシがいた。捕まえて一升瓶に入れて飼っていると子供が三匹生まれた。雨蛙を捕まえて飼育しようとしたが、全然食べずに死んでしまった。その年は、あっちこっちでマムシの子供が生まれた話を聞いた。

木曽で学んだことは、真直ぐに空に向かって伸びる世界一の木ヒノキと、赤茶けた岩肌を思わせる御嶽山。優雅な木曽踊りと木曽節。やさしい木曽馬に育まれた人情かと思う。

また山林高校に期待するものは、山林を通して海外（アジア）に進出すること。生徒や先生が出かけてゆくことは資金が必要ではあろうが、広い視野を培ううえからも是非実現されたい。

（了）

（昭和四十二年～五十五年在職）

わが名は「メケ」

元国語科　小林　俊樹

「山林」の名は知らぬではなかったが、まさか教師一年生の場が木曽の谷とは、神ならぬ身の知る由もなかった。

赴任は昭和三十三年（一九五八）、確か四月十日だったと記憶する。ナタや長柄のカマを持ったニキビ面の連中が、車中にも、通学路にも溢れていた。実習の当日だった。

そんなことはつゆ知らぬ新米教師は、春いまだしの木曽路の谷の深さに辟易したばかりではない。ゆっくり走るデコイチの煙と、山賊まがいの実習スタイルに、先行きの不安は隠せなかった。その正直な気持ちが初対面の挨拶に出た。記憶は定かではないが、あいさつなどというものではなく、ほどんどが悪態だったように思う。それが良かったか悪かったかは知らぬ。

途端についたあだ名が「メケ」だった。当時奇妙なスタイルで名を売っていたシャンソン歌手丸山某の歌の題名の借用だと後に聞いた。しぐさや長髪のありようがよく似ていたというのだ。いつの時代になっても、あだ名などほんのお愛嬌に過ぎないが、大方が動物（たこに怪獣）に仮託されていた時代に、珍しく洗練？されていたのが気に入ったのか、後に自ら「女気」の字を当ててやったことも覚えている。

これも後聞きだが、その夜寮内では、生意気な新任教師をやっつける手立てを鳩首思案していたというが、結局は何も起こらなかった。

後に詩集などを出した、丸子町？出身の池内卓君（故人）などが首謀者だったとか。一年休学しての二年生で、図体はでかかったが、極めて繊細な神経の持ち主だった。

当時『いず美』の誌名で出していた文芸部誌を『山林文学』と改題して昭和三十五年三月発行した佐々木康夫君、安保文恭君（昭和三十四年度卒）たちから「主」と呼ばれる畏敬の対象でもあった。若くして故郷で逝ったと聞いたが惜しまれてならない。

大学を出て、半生可な小説などものしていた生意気な若造だった私は、二月とたたないうちに、このひとたちとごく親しい仲となった。年齢もさして違わなかった。一年下には、成田勇君、小林岩男君、青木巌君、百瀬治君、その下には、中平征夫君等十数名の部員がいた。

この人たちの創作意欲は旺盛で、そのころ出した三冊が今も手もとにあって、往時を懐かしく語ってくれる。今は皆、いいオッサマになって、それぞれの地域でいい顔になっているだろうことを思うと、まさに今昔の感に堪えない。

赴任したての夏、水無神社の祭りの宵のことだった。今あるかどうか「王様」という寿司屋さんに、白かすりの着流しで寄り、一杯やっていた私のどこが気に食わなかったのか、相客数人に因縁をつけられてしまった。

迷惑な話だったが、売りことばに買いことば、下の河原で一触即発の事態になりかねなかったのだが、どこでどう連絡がとれていたのか、池内君ほかの寮生数人がかけつけてくれ、大事に至らなかったことがある。

若気の至りで、とんだ「坊ちゃん」になりかねないところだったが、おかげでその夜の宗助・幸助の神輿まくりを満喫することができた。そんなこんなで、木曽の四年間は、したい放題、勝手気まま、当時の諸君には随分と迷惑をかけた。

通学区ごとの、お芝居コンクールの稽古など、深夜から夜明けに及ぶこともしばし。差し入れの安ウィスキーに酔いもせず、通学区全部の出し物をこなしたが、どれほどの役に立ったことか？若かったとはいえ、よくつき合ったものだ。

後に演劇部が発足し、成田勇君ほか結構すぐれた役者衆もいたが、みんなどうしているか。今、豊科の「よってい家」主人になっている権野信重君などは、当時はまだ純情なもので、稽古のたびに訳もわからずに怒鳴られ、泣きの涙だったというが、よく耐えたものだと思う。

今でも時折その頃の無茶苦茶ぶりを語っては痛飲し、一夜のつまみにしている。加えて、新聞や柔道にも手や足をだした。柔道は、そのころ二段をもらったばかりだったから、まだまだ大方には引けを取らなかったが、静岡県出身の鎌倉君は、なかなかの腕前だった。適当にごまかしてはいたが、三本に一本は取られたように思う。

少し後だが、伝統の相撲部には山田幸男君というすごい君がいて、金沢の兼六園の大会に出場し、全国のベスト8に入ったと記憶している。その時の二人旅は楽しかった。卒業後彼は大学相撲部に引き抜かれ、相当な成績をあげたはずだが、その後を聞かない。

在職三年目だったか、二時間の車中、その他の珍談を数えたらきりがない。今でも冷や汗をかきそうな話ばかりだ。そんなことより、豊科辺りから毎朝四時起きで一緒に通った、穂高君、古屋君、丸山君、権野君、松本の山本君などなど。あの不便な時代にご両親ともどもよく続いたものだ。今思っても、ただ頭が下がる。

四年にわたった山林生活だったが、その間、陰に陽にお世話になった、公使室の田村のお婆ちゃん。その後替わった坂本さんご夫妻。毎日の昼食を寮から運んで下さった賄いの三輪さん。町へ下っては、「とんかつのしらかべ」こと奥村さんご夫妻、などなど。幽明の所在はそれぞれだろうが、皆さん懐かしく、四十年たった今も、メケの中にはありありとある。

これらは、すべて木造の古い校舎時代のこと。ほんのわずか新しい校舎に入ったが、その記憶はほとんどない。町は映画館の栄えた最後の時代？というより石原裕次郎の時代だったか？そんなころの山林の仲間との若い出会いだった。

以来三十数年、もろもろのしがらみに縛られながら、何とか教師の道を歩んできたメケも、数年前ようやく自由を得、下手

なもの書きの真似ごとをして暮らしている。今日は九月も末の三十日。ようやく思い出した依頼原稿の締切日。何とか間に合えばいいが。恐惶頓首。

（了）

（一九九九年九月三十日）

記憶に輝く六年間

元国語科　泉　万珠男

昭和三十七年三月の末、四トントラックにわずかな家財を積み、その助手席に同乗して上田を出発、列車で通過する以外は初めての木曽路に向かった。

塩尻からは全面工事中の国道十九号線、未舗装の悪路をノロノロと二時間以上走りながら、だんだん挟まっていく空を心細く眺め、耳に聞いていた「鰻の寝床」を実感した。

しかし、まず学校に行ってみると、思いがけない白亜の校舎。驚きだった。まだ竣工したばかりで、一部残っていた木造の旧校舎からの、事務室等の移転も済んではいなかったのである。

山平の線路際の家を拝借して、それからの六年間、教師としても木曽の住人としても、様々な貴重な体験や出会いをすることになった。専門課程の勉強に取り組む生徒たち、人間味豊かな先輩教師や善人揃いの若い仲間たち、「創立六〇年誌」づくりを任されたおかげで知遇を得た大先輩たち。

温かい気持ちを持つ地域の人々や、大自然との触れ合いも木曽ならではの大きな収穫だった。

卒業生が全国規模で林業界を支える一翼をになってきた歴史と自負、それがいい意味で生徒たちを育むことになっている雰囲気、現場に身を置いていたときよりも、後になって振り返ってみて、世にいう「伝統」とはこういうものだったのかと納得できた気がする。

若手の普通科教師の研究室だった「三研」（三階の研究室の意）から生まれたのが、同人誌「曽流」。ガリ版を切り、下島教頭さんの創作版画を毎号表紙に貼り、印刷も製本も自分たち。事務室を借りて徹夜の作業になったこともあったが、仲間たちが転勤していく先々に支部ができ、第一〇号が出るころには全県の高校に広がっていた。

県教委にも、高教祖本部にも有力会員がいるという、独自の輪を持つ雑誌にもなった。もちろん、あくまで木曽山林高校を母校に据えていた。

どういう成り行きでだったか、ＮＨＫの人気番組「ふるさとの歌まつり」が本校を会場に放映された時も、一年前から連絡や協力の役割を担当させられて、雑用を受け持った。前日のリハーサルの日には、体育館の横の空き地の古材に腰を下ろし、二、三人の生徒も交って一緒に島倉千代子さんと雑談した。

三一書房の『全国高校風土記』の取材にも応じたが、その頃には本校を誇りに思い、胸を張って話した記憶がある。

学校新聞の顧問でもあったので、他校にはあまり例のなかった週刊誌大の大きさにし、ページ数を増やしていろいろな記事を読みやすく組む試みもした。

相当のページになった号もあったと思う。これにも蘇門会の長老格の方々から原稿を頂戴したり、生徒と一緒に校外へ取材に行ったりして、多くの人の協力をいただいた。

寄宿舎の生徒たちと、実習林に見つけておいたスズメバチの巣を取りに、夜になってから全身重装備のいでたちで出かけて行ったり、工芸科の工場で実習の仲間入りをさせてもらって、大きな本箱や、足付きの碁盤まで作ったりした。この碁盤は今でも愛用しているが、新しい職場で新しい仲間ができるたび、山林高を宣伝、紹介するよすがとなった。

その他、列伝風に書きたいほど多くの、多才で個性豊かな先生方もおられたことなど、思い出すことはたくさんあるが、紙数がなくて残念である。

山林高を愛し、ここに自分のすべてを傾けた教職員たち、そしてここで人間らしい感覚も育てられて世に出、大地にしっかり足をつけて生きている卒業生諸氏に、賛嘆の念とエールを送りながら、「百年」をお祝いしたいと思う。（了）

（昭和三十七～四十二年度在任）

木曽山林高校の四季に想う

元農林技師　岩井　茂雄

昭和三十五年四月に山林高校に就職した。当時は全面改築の期成同盟会が発足し、旧校舎の校内付近の防風林から取り壊しが始まった頃であった。

また、まだ県内の営林署に三台しかないというマッカラーBPIチェンソーを借りてきて、初めて見本林の大木を伐採した。

春になると、生徒も職員も法被（はっぴ）に巻脚絆姿で実習が始まる。神庭先生は、まだ軍隊時代の帽子と服を着用していた。

放課後になると、何日も応援歌の練習が続き、あまりの厳しさに下級生は、実習当番の時は、時間延長を喜んで当番活動をしていた。実習当番といえば、便所の汲み取りは実習当番の仕事で、天秤棒でかついだりリヤカーで運ぶのが大変であった。

夏は、何といっても暑い盛りの下刈り作業が大変であった。植林地の面積が広く何日も続く実習は、生徒はもちろんのこと職員も一番苦しく、それだけに忘れられない思い出である。今でこそ立派なヒノキ林になっている陰には、こうした全校一丸の苦労が秘められているのである。

黒川渡ダムに目すき板を運び、それを浮かべてスタート台にした水泳大会は、山林高校ならではの行事であった。

秋、紅葉が裏山に始まる頃になると、ストーブの薪採りが始

まる。割当量が時間内に採れないものは放課後に行って採取しなければならなかった。それからの実習当番の毎日は大変であったし、その指導も容易ではなかった。

運んできた材は、実習時間内と実習当番とで、石油エンジンの丸鋸で刻み校舎のまわりに積み上げ、冬の準備をしたのも忘れられない。

冬……佐々木先生の指導で築いた炭窯が出来上がり製炭実習が始まる。宿直で一時間おきに炭の燃焼具合の観察も生徒と共にした良い思い出である。

一番びっくりしたのが閉寮となっていた旧校舎が火災になった時の夜のことである。その夜は、佐々木先生と私の宿直であった。私は炭窯から炭火を炬燵に入れて食事に帰宅していた。

サイレンが鳴るので外へ出てみると杭ノ原の山が真っ赤になっている。黒川渡へ来ると確実に林業棟が燃えている様に見えた。「炬燵の火が原因か……もう何もかも終わりか」とへなへなしてしまうところであった。

でも、林業棟が無事であった時はホッとすると同時に、宿直当番の責任の重さというものをこの時程実感したことはない。

私の人生で、青年時代はとりわけ喜怒哀楽が沢山であったが、良き山林高校に三十五年間を生徒と共に汗を流した日々は貴重であり、何かにつけて彷彿としてくる。

「百周年、誠におめでとうございます」と申しあげたい。また「二十一世紀も名高き山林高校でありますように……」と願わずにはいられない。

（了）

（平成11・10・1）

「木曽山林」の人々

元英語科　長坂　富雄

私が木曽山林高校に勤務したのは、昭和四五年四月から五十年三月までの五年間でした。新米の英語教師として多くの教職員の方々、生徒の皆さん、そして地域の皆様に教えられ、支えられて楽しい日々を過ごさせていただきました。

昭和五十年三月、お世話になった杭の原の原一夫さんの下宿から皆様にお見送りいただき、愛知県に帰ってから、はや二十六年が経ちます。木曽谷での五年間は、駆け抜けたように短い期間ではありましたが、その後の私の教員生活（人生といってもよいかも知れません）に大きな影響を与えてくれました。

何かことがあると、仕事の上だけでなく日常生活においても、ふと、「木曽の人ならばどうだろうか」などと思い、自分の思考や行動の規範を山林高校での生活とそれに繋がる人々に求めている自分を発見することがよくあります。

この思考パターンはほぼ日常化しているものと見えて、寒い冬の夜などは「こんな日は木曽では……」というようなつぶやきが出てしまい、家人がそれをほほえみながら聞いてくれます。

さて、私が赴任した昭和四十五年といえば、大阪で万国博が催された年でもありました。夏、当時下宿させていただいた平田長九郎さん宅から、同宿の浜田耕三先生がバイクで長駆大阪まで万博見学に出かけたことがあったので思い出します。

愛知県育ちの私はそれまで長野県とは縁がうすく、まして木曽といえば、源義仲が巴御前とともに旗揚げしたところ、民謡「木曽節」と御嶽山、島崎藤村の小説「夜明け前」ゆかりの土地といった、脈絡のない知識しか持ち合わせていませんでした。

木曽山林高校にしても、自分が学んだ高校は普通科だったこともあり、林業科や工芸科における専門学科の教育内容などには馴染みがなく、見るもの、聞くものすべてが新鮮でした。

この年、二C（工芸科）の副担任として、担任の奈良本守正先生に教えられながら教員修行を始め、次の年もコンビを組ませていただきました。女子生徒が四人ばかりいて、和気藹々とした雰囲気のクラスでした。

工芸展の即売で購入したサイドボードが自宅の居室に今でもありますが、それを見るたびに、当時の生徒のことや、奥原万喜男先生、白金茂先生、日向昭夫先生、大西貢先生といった工芸科の先生方のお顔を思い出します。

三年目には学年主任千村和彦先生のもとで、林業科一年B組の担任をさせていただき、男臭さいっぱいの生徒と三年間付き合いました。担任としてでなくても、授業や生徒会活動、部活動（音楽部、軟式野球部）等で触れ合った生徒との思い出もたくさんあります。

赴任した年、前年からのいきさつでその実施が危ぶまれていたファイヤーストームを実行委員の諸君と力を合わせて開催にこぎつけ、一つの型として定着し得たことなどは、その後の私の教員生活に大きな自信を与えてくれました。

こんなこともありました。卒業式当日の朝、ある生徒のお母さんが、息子の卒業の内祝にと言って、風呂敷に包んだ重箱を差し出されました。重箱にぎっしり詰められた赤飯の上には南天の枝葉があしらわれていました。

家は遠く、まして厳寒の中、お母さんはいったい何時に起きて赤飯を炊かれたのだろう、と胸に迫る思いをしつつ、その赤飯を若い先生方とかみしめながらいただきました。

親とはどういうものか、親御さんにとってかけがえのない存在としての子どもを、教師としてお預かりするというのはどういうことなのか。教師の何たるかがまだ分かっていない私にとって、あの折の赤飯は、新米教師への道しるべともいうべき尊いものでした。

私のいた準備室は三研と呼ばれていて、故百瀬哲夫先生や仁科秀康先生、浜田先生、塩川久人先生とご一緒でした。談論風発の雰囲気を持つ部屋で、授業の合間には丸山紘正先生、山浦博先生、折山邦彦先生、永田勝男先生、鈴岡美智子さん、平田さんの下宿で同宿の桜井裕記先生などがよく立ち寄られました。

林業科は科長の古川彦次先生を中心に、まとまりと温かみが

ありました。古川先生の転出後は、横関哲二先生が雰囲気を継承されました。故佐々木弘文先生、桜井久一先生、坂下健彦先生にはよくお酒をご一緒させていただきましたし、渡沢秀二郎先生、岩井茂雄さんにもキノコ等でお世話になりました。また、坂本政さん、大久保裕市さんは魚取りの師匠でもありました。

職員野球チーム「蘇龍」も私にとっては忘れられない存在です。早朝野球ということで、眠い目をこすり、試合や審判をしたことが懐かしく思い出されます。柿崎庫之助監督、中野重則さん、堀内文武先生、加藤博先生、原貞夫先生、原喜仁先生、竹内善一先生、小林澄光先生、太田清先生、逢沢道澄先生等を中心としたこのチームはまとまりがよく、教職員の中信大会で優勝したこともありました。生徒の野球部チームともしばしば紅白戦をやり、内山太郎教頭先生も顔を見せてくれました。

こうして当時のことを思い起こしていくと、生徒や職員や地域の皆さんの顔が次々と浮かんできます。わずか五年の在職ではありましたが、地域における山林高校の影響力、素朴な中にも確として存在する教育力の大きさを誇らしく思い、このことを、木曽を去って以来、愛知の人に折に触れて語り、私自身の励みにもしてきました。

また、芦部隆彦元校長先生、塚原隆明元教頭先生からは、私が木曽を離れて以来ずっと、今でも年に数度はお電話やお手紙でご指導を賜っています。

青年期を過ごした長野県に、師と仰ぐことのできる先生がいらっしゃることを何より光栄に、誇らしく思います。山林高校は樹木を管理し、育てるだけでなく、人そのものを育ててくれているのだと心から思っています。

二十世紀の始まりの年に産声を上げた山林高校が、百年の歳月を経て、なお、次なる世紀へと着実に歩を進めていることを思うとき、これまでこの学校を支え、育ててこられた関係の皆様のご尽力に深甚なる敬意をお捧げいたします。木曽山林高校の今後の益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。（了）

（現、愛知県立鳳来寺高等学校長）

木曽山林と私

元数学科・教頭・校長　永田　勝男

昭和四七年三月、上水内北部高校信濃町分校に勤務していた私に、木曽山林高校への転勤が命ぜられた。翌早朝長野から国道十九号線を木曽福島町へ下見に向かった。

途中鳥居トンネル（その当時のトンネルは照明もうす暗く、大型トラック同士は徐行しないとすれ違いができないものだった）に入った途端、前が一瞬見えなくなり急ブレーキをかけた大変怖い記憶をいまだに鮮明に思い出す。（これはトンネル内の気温の変化でフロントガラスに結露がおこることによるものと判明した）

三月下旬引っ越しの時は、大勢の先生方のお手伝いがあり、その上お茶の用意までしていただき、未知の地で温かな人情に触れ、木曽の地で新たにと心構えがつくられた。

若い独身の職員も多く「チョンガー会」も活発で、当時結婚の記念に広蓋を贈るという慣例であったが、私がなかなか結婚しないので保管にも困るということで先に頂いてしまった。今も懐かしく大切にし、良き思い出と共に使わせてもらっている。

赴任しての部屋は物理研究室に数学二人、理科一人の三人での生活であった、最初の三年間はC組（インテリア科）の副担任であった。

当時山林は副担任も担任と共に仕事をする気風が強かった。家庭訪問も担任と一緒に行き、担任の先生が車に酔ってしまい、私が保護者と話をしても何の違和感もなかった。

また若い仲間の飲む席には決まって校歌が歌われ、歌詞を見なくても四番まで歌えるようになった。

「乞う見よ我等が樹芸の力……」「五木は生い立つ……」「濁らぬ蘇水……」「直ぐなる桧……」の所は今でも時々無意識に口ずさんでいる。

会社訪問も楽しみだった。県内はもとより名古屋方面まで出向き、卒業生の声を聞いたり会社の人事担当者から色々な情報を得て進路指導に役立てた。はじめてシャブシャブをごちそうになったり、乗ったこともない高級車で駅まで送ってもらったりで当時の私にはカルチャーショックであった。

時代も変わり、現在上伊那に勤めているが、当時訪問をした会社が今門を閉めている。卒業生も何人か居たはず……気がかりなことである。

学校訪問も思い出の一つであった。木曽郡下の十一中学校はほぼ回り、木曽山林を良く理解してくれ、応援もしていただき、元気づけられた。帰りの車の中は林の中を吹き抜けてきた涼風に快さを感じ、明日からの授業に活力が出たものだった。

また中信地区・下伊那、果ては岐阜県にも出かけ地域の人間性にも触れ山林の生徒理解にも役立ち色々と勉強になった。

体力の限界を示す強歩大会の参加も心に残っている一つである。開田高原コース三八・三キロでの完歩賞。若い彼らの体力にはかなわず三百三十四位。しかし生徒と行動できたこと、各関門での梅干しと冷たい水の用意は保護者の方々の協力で出来たこと。感謝と感動の念がまた募るものである。

柔道部の顧問として生徒に投げられたり、道路を裸足で走ったり生徒と共にやる部分もかなりあった。

昭和五一年二年B組（林業科）の担任を二年より引き継ぐ。担任願望であったのでかなり張り切っていたという記憶がある。クラスは四十名（内、三十名は木曽郡、十名は下伊那・上田・岐阜）で家庭反省・反省文・短髪等の記録があるが、卒業後のクラス会などでは、それぞれ立派に成人し頼もしい限りであった。

山林の生徒は社会に出てから実に評判がよい。思うに教育方

針の中に「勤労精神を培い質実剛健の気風を涵養する」というくだりがある。まさにこの部分の教育効果ではないだろうか。

学年の最大の行事は修学旅行であった。四泊五日、倉敷・広島・岡山・鳥取・京都で十三ケ所の見学場所とコース別見学、大変な強行軍であった。しかし大変充実していたように心に残っている。

その時の引率者は教頭先生以下学年の正副担任の七名であった。このときのメンバーで「ラッキョウ会」を作り年に二回会ってきたが、メンバーの一人永原先生が他界され、仲間もそれぞれ忙しくなり、最近はその機会も少なくなり残念に思っているところである。

担任したクラスの生徒が卒業後三年目に転勤、山形村へ帰ったわけであるが、住宅の新築の時は、何人かの生徒が我が家に泊まり込み（卒業後も山林の生徒はよく家に遊びに来てくれた）大きな乾燥場兼物置の解体や家具やピアノなどの出し入れと実によく働いてくれ非常に感激した。

分掌面で昭和五四年度（八年目）教務主任と分会長を引き受けざるをえなくなった。周囲の心配もあったが山林高校のある先輩の言葉「与えられた（頼まれた）仕事は黙ってやる」が心に残っており、やろうと決めたいきさつもあった。そして授業の一部を負担してくれたり、陰に陽に協力をしてくれた先生方、そういう仲間がいてくれたから乗り切れたとつくづく思う。今考えても感謝の念でいっぱいである。

いろいろあった木曽山林高校での生活、私事となるが人間の出会いというものは、ひょんなことから始まるものだと今さらながら思うこの頃である。ある日同僚の先生から某高校にこういう先生がいるが、下宿先に行って話をしてくればと言われた。昭和四九年の初秋のころだったと記憶する。一面識もない彼女（今の妻）に何と言ったらよいかと聞いたら、その彼曰く、まずドアをノックして「決して怪しいものではございません」と言えばよい、あとはアドリブで、とのことで下宿を訪ねた。私は山林高校の職員ですと自己紹介し、いつか話をしたいと告げてその場を去った。その後彼の段取りに従い「鳥鍵」という木曽では一流の料理屋で会い、それがきっかけで結婚すると言うことになった。

なぜか私にはいつもお金がなく彼女から一万円・二万円と借金したが、返さないうちに結婚ということになり、今でも気になっているところである。木曽を出るときは皆結婚するというジンクスもあり私もその一員となった。

そうこうして十六年がすぎ、平成八年四月教頭としてまた木曽山林に赴任することになった。前から在職されていた先生方も何人かおられ大変心強く思ったものである。授業をしても以前の生徒と同じく人なつっこいところがあり楽しい授業ができた。実習の時間も生徒と打ち解けよい思い出となると同時に、そのころの生徒の今後の幸せを願っているところである。

演習林で「春風やあたり一面木曽ひのき」というような句を

作り痛む心をいやしたこともあった。教頭・校長の時には蘇門会、ＰＴＡの皆様方には本当にお世話になった。また良き思い出も沢山いただき感謝している。

卒業生に「自分の生きる中心課題を探り、若いときは愚痴を言わず、黙々と励むときもあって良い。独善でない自分の道を歩め。遊びも大切にせよ。」という言葉を贈った。これは山林での自分の教員としてのもがきを言葉にしたのではないかと今は思う。

イギリスの哲学者ホワイト・ヘッドは「余り多くのことを教えるなかれ、しかし教えることは徹底して教えるべきだ」と言っている。山林の教育はこの言葉にふさわしい教育がされていると考える。

現在問題になっている地球温暖化防止のための京都議定書発効に向けての森林の二酸化炭素の吸収の問題など、これからの我々の森林への関わり方は、今以上に重要なものとなる。従って木曽山林高校の存在はますます重大な責務を帯びてくるのである。

二十一世紀に、その存在をより大きく羽ばたく木曽山林高校に発展することを祈念し、またますますの存在感を認識し我々関係者は木曽山林高校を盛りたって行かねばならないと考える。

思うままに書きましたが、木曽山林高校を懐かしく思うと同時に、大変お世話になった蘇門会・ＰＴＡ・先生方・生徒諸君に感謝申し上げ思い出の一端としたい。

（了）

記念誌編集委員会より

◎元林業科山口登教諭の「情報処理元年」は、第七章に掲載した。

◎本校に残された資料の中から、特に得がたい証言をされていると思われる二人の旧職員の思い出を、次に転載した。

思い出

元林業科　上嶋　積善

桂の木と桜の木

全面改築後思い出されるものには、当時の職員や卒業生にとっては限りない愛着があるものです。

当時の庭球コートとなった所に、亭々と立つ桂の木（注1）は、今体育館の東に変りなく、卒業生の未来を象徴するように聳えており、校門の両側にあった桜の木の一本は余命を細々と生きている現状ですが、今になると言うに言われない、懐かしさで心を満たしてくれています。もの言わぬ木々にその膚をなでて語りたくなります。

長い間風雪に堪えて生き続けた、そのたくましさに感心するのみです。そして何時までも健全であってほしいものです。

技術員養成所のこと

昭和十九年に併設された林業技術員養成所は、六回にわたり開講され終了しましたが、修了した諸君は、よい年齢になり県下各地でそれぞれに活躍していると思います。

最初の頃は妻帯者が多く、土・日曜などには、「ネンネコ」に子供を背負った奥さんが、お父さんに心をこめたお土産を持参して面会に来た姿が、今でも彷彿として目に浮かびます。そして私などはそのおすそわけをいただいて、家庭の暖かさを感じさせられたものです。

訪問のあった諸君はまた生気をとりもどし、活力を得て本当に生徒と違った姿勢で一生懸命に学習していたものです。

何時の日かあの真剣に学んでいた諸君に会いたいものです。

スキー・ケート大会のこと

今のようなスキー・スケートブームでない昭和一〇年～二〇年頃「きびおスキー場」でスキー大会を全校で開いたころ、スキーを持てなかった生徒の寂しい顔が浮かんできたり、黒川ダムでのスケート大会で歓声をあげたことなど、ちょっと想像ができない昔日の思い出ではないでしょうか。

寄宿舎のこと

寄宿舎は南寮と北寮とあり、一〇〇名ほどの舎生が常時おり、四分六くらいの麦飯と粗末なおかずで三年間頑張っていたことも忘れられないことです。舎生の楽しみは、点呼後の各部屋毎の茶話会で、一年生はいつも使い番で、早く上級生になりたかったと思います。

寄宿舎には七不思議があり、怪談めいた話が多く、下級生は恐る恐る夜便所に入ったものです。また八沢の鉄橋を列車が汽笛を鳴らして通過するとき、一年生の悲しい涙を見たことも強く印象に残っております。三年間在舎した生徒の敷布団は綿ばかりになって「栗鼠」の寝ぐらを思わせる状態で、あきれたり、せつなくなったりしたこともありました。

思い出の一端をつづりました。八〇年の歴史のなかみはそれぞれに限りなく語りつきないものを感じております。（了）

（注1）第八章コラム参照

『学校だより』80周年記念増刊号（昭56・10・25）

一〇年の思い出を語る
忘れられぬ人たち

元寮母　三和　るい

（『木曽山林高校新聞』記者）　十一年前――

食糧も豊かでなく、寮の周りは草ぼうぼう、窓ガラスも欠け放題という時代に炊事係として寮に来て下さった三和さんです。長い間沢山の若者たち

を見守ってくれた、その生活の中から次のような思い出を語ってもらいました。

雪で炊いたご飯も

なんだかその頃の生徒はとても親しみがあったような気がするんだけど、私が初めてこういう集団生活に飛び込んだせいだったかしらね。いろいろ親切にしてもらったね。

例えば水汲みよね。炊事場の大きい桶に一人二杯と決めると、気持ちよく汲んでくれた。けれどいたずらもしたわねえ。せっかく汲んできてくれた水を夜中に使ってしまうの。朝になると使うのがなくなってね、雪の多い日なんか雪をとかしてご飯を炊いたこともあったよ。

ご飯といえばあの頃は、おつゆとご飯だけだったのよね。だからみな魚とかカンヅメ買ってきて自分でおかず作ったの。

春になるとワラビを採ってきてね、塩漬けにして明けても暮れてもワラビのおつゆを食べさせたこともあったんね。そしたらみな目を悪くしちゃって……。

蛆のわく味噌

その頃お味噌をよく炊いたの。豆を一人三升持ち寄ったんじゃないかしらね。お釜で煮てつぶして、にぎって棚へ上げておくと、蛆がわいて来たりしてね。それを平気で、ちょっと洗っただけで仕込んでね。当時の寮長さんは親切でもあったけどヤバン的でもあったわね。それで朝おみおつけを煮るのが私、いやだったの。蛆のわいたようなの……でも皆平気で食べちゃうの。

壁や桶をたく

あの頃炉があってね、夜になるとお腹がすくかして、皆ご飯を炊くのよ。ところが薪がないのよね。ふだん米を炊くのさえなかったんだものね。壁を壊しちゃったり桶まで壊して炊いたりね。

夜九時過ぎると三升だか四升だかの鍋を自在鍵にかけて自炊するわけよ。お魚なり肉なり買ってきてお汁を作って食べるんだけど、なかなか面白い所あったね。

当時肉汁が一番の御馳走でね、作ると一杯おばさんにもやるっていうわけでさ、私が寝てしまっても起こして持ってきてくれるんよ。そういう時、かわいさみたいなものを感じて、感激したのよ、私もね。

山羊や犬も殺して食う

山羊を殺したりして、料理してね、それで開田から買ってきたなんて言って。ある時はこれは絶対そうだって言わなかったけどね、犬を殺して煮たらしいわね。みんな肉汁にされてしまったわけよ。

畑も作って、お野菜なんかとっていたわね。私が来る前、え

えそう、戦争中なんかは校庭も全部畑にしてあって、お芋とかカボチャをとって食べていたようだけど。

私が来てからの一番の苦労はやっぱり水だったんね。水がなくて水がなくてね……。

よく勉強した

あんなあばら家でよく生活できたなって、今でも思うけど、それなのによく勉強していたね。本当にあの頃くらい勉強した時はなかったって、いつもそう思っている。

いろんな生徒がいたけど、中にはひどい横着なのもいたね。だけど今そういう生徒の方がよく訪ねて来てくれたりするんね。何かと来てくれたりするんね。何かと意地の悪い事いった人ほど、「やああの頃はあんな事いったけど、こんなに親切にしてもらってうれしい」なんて言ってね。

うれしかった事

うれしかった事っていうと、いろいろあってね。でもあの生徒といっしょになってデカンショ節を踊ったことやら、それからクリスマスね。

一番うれしかったことを一つ話すわね。ええと、二十九年の卒業生だったかねえ、卒業したあくる年に同級会をやってね、私にもぜひ来てもらいたいと呼んでくれたの。

松本のそばの温泉でね、子供もぜひつれて来いっていうんで、小学生の子供をつれて行った訳ですがね。一晩いい所に泊めてくれてね。本当に楽しい晩だったね。

おしまいに

あの頃の人、苦労していたせいか思いやりがあって、親切だったと思うね。忘れられない人が多いのよね。年とともに寮生さんの気質も変わってきたわね。どうって、うまく言えないけど……。私も一〇年勤めて、寮もこんなに良くなって、感謝しているし、いろいろ反省もしてみる所だけど……。（了）

『木曽山林高校新聞』49号（昭38・10・20）